

IX 中田遺跡第13次調査 (N T 92-13)

1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁日の範囲に広がる。旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地の周辺では、大阪府教育委員会・当調査研究会により下水道工事に伴う調査が実施されており、主に弥生時代中期から古墳時代前期の遺構・遺物が検出されている。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の調査は、引出し管路新設工事に伴うもので、幅約1.0mの開削トレンチ部分の調査である。調査区は楠根川右岸にあたる南北方向の市道部分（1区）と、東西方向の府道部分（2～8区）に分かれており、1区はL字型を呈する。

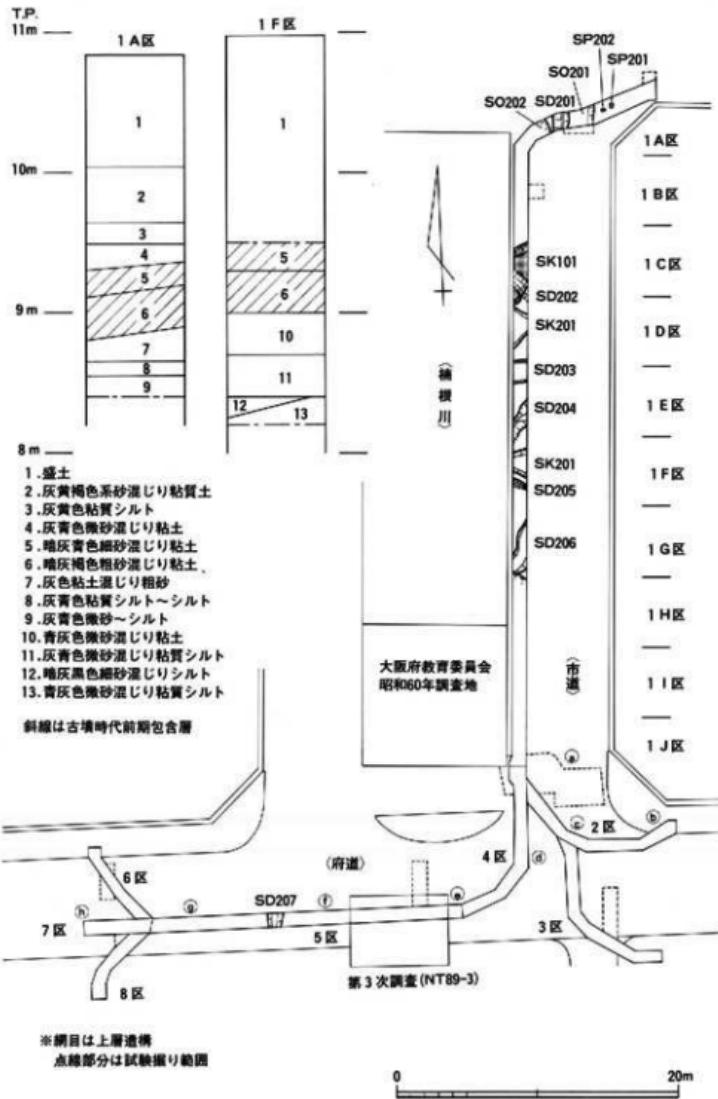
調査は、市道部分（5m間隔で北から1A区～1J区を設定）については地表下1.2m～1.6mまでを機械掘削し、以下の地表下約2.2mまでを人力掘削により発掘調査を行った。また府道部分（2～8区）については工事進行に合わせて立会調査を行い、主に断面観察と遺物採集を実施した。

2) 検出遺構と出土遺物

（市道部分（1区））

・基本層序

第1層は近年の盛土で、層厚は0.8m～1.0mを測る。第2・3層は中世～近世頃の土器片を少量含んでいる。第5・6層が調査区の全域でみられた古墳時代前期の包含層であり、第5層は部分的に炭を含んでおり黒色を呈する。1A区東部で古墳時代前期のベースとなる第7～9層及び第12層には弥生時代中期の土器（16）が含まれている。第7～9層はその状況から河川の堆積である可能性がある。第12層は1E区～1F区間の一部で確認したのみで、その抜がり



第1図 平面図($S = 1/400$)、1区基本層序($S = 1/40$)

は不明であり、遺構である可能性もある。

・検出遺構と出土遺物

上層遺構として、第4層上面で土坑1基（SK101）、下層遺構として、第6層・第10層上面で土坑2基（SK201・202）・溝6条（SD201～206）・落ち込み2基（SO201・202）・ピット2個（SP201・202）を検出した。下層遺構のうちSD201・202・204は第6層上面から掘り込まれているが、他は確認できなかった。

なお1H区以南は既往の調査による擾乱となっている。

SK101

1C区で検出した。南北3.2m～4.1m・深さ25cmを測る浅い落ち込み状を呈し、埋土は暗褐色細砂混じり粘土である。時期不明の土器片が出土している。

SK201

1D区で検出した。南北1.5m～2.8m・深さ約45cmを測り、平面形は西部が広がっている。埋土は上層が灰青色細砂混じり粘質シルト、下層が暗灰青色微砂混じり粘土である。布留式期の土器片が出土している。

SK202

1F区で検出した。南北1.5m～2.0m・深さ30cm～55cmを測り、東部が広く、また浅くなっている。埋土は暗灰青色系の粘土～シルトで、上層には炭が多く含まれ、土器もこの層に多く含まれている。土器（1～10）の時期は庄内式期新相に比定される。

SD201

1A区で検出した南北方向の溝で、幅約1.1m・深さ約60cmを測る。断面形状はV字に近く、埋土は暗灰色系の粘土（上層）～粘質シルト（下層）で、上層には炭が多く含まれ、土器もこの層に含まれている。布留式期の土器（11）が出土している。

SD202

1C区で検出した北西～南東方向の溝で、幅約1.0m・深さ約50cmを測る。断面皿状で、埋土は上から暗黄褐色細砂混じり粘土・暗灰褐色粗砂混じり粘土・灰黒色細砂混じり粘土である。古墳時代前期の土器（12）が出土している。

SD203

1E区で検出した東西方向の溝で、幅約1.6m・深さ約20cmを測る。断面皿状で、埋土は暗灰青色微砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

SD204

1E区で検出した北東～南西方向の溝で、幅1.0m～1.5m・深さ約30cmを測る。断面皿状で、埋土は上から暗灰青色細砂混じり粘土・暗灰黒色細砂混じり粘土・暗灰色細砂混じり粘土であ

る。庄内式期新相の土器が出土している。

S D 205

1 F 区で検出した東西方向の溝で、幅約40cm・深さ約35cmを測る。埋土は上層が暗褐色微砂混じり粘土、下層が灰黑色細砂混じり粘土である。古墳時代前期の土器が出土している。

S D 206

1 G 区で検出した北東一南西方向の溝で、幅約1.4m・深さ約50cmを測る。断面皿状で、埋土は上層が暗灰黒色細砂混じり粘土、下層が暗灰色微砂混じり粘質シルトである。古墳時代前期（庄内式期～布留式期新相）の土器（13～15）が出土している。

S O 201

1 A 区で東肩を検出した。法量は深さ約50cmを測るが、西部が S D 201に削平されているため詳細は不明である。埋土は上層が暗灰色粗砂混じり粘土、下層が灰青色粗砂混じり粘土である。古墳時代前期の土器が出土している。

S O 202

1 A 区で東肩を検出した。法量は深さ約20cmを測るが、西部が攪乱されているため詳細は不明である。埋土は暗褐色細砂混じり粘土である。古墳時代前期の土器が出土している。

S P 201・202

1 A 区で検出した。法量（長辺×短辺×深さ）は S P 201—32cm×24cm×5cm、S P 202—25cm×21cm×5cmで、埋土は暗灰褐色粗砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

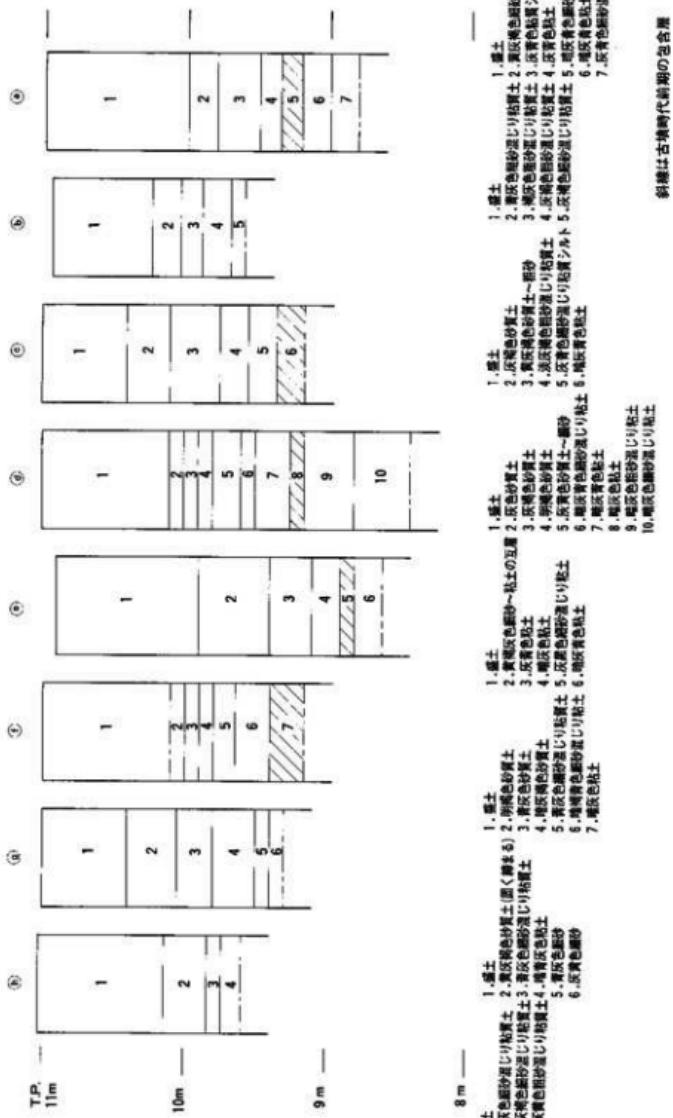
〈府道部分（2区～8区）〉

・層序

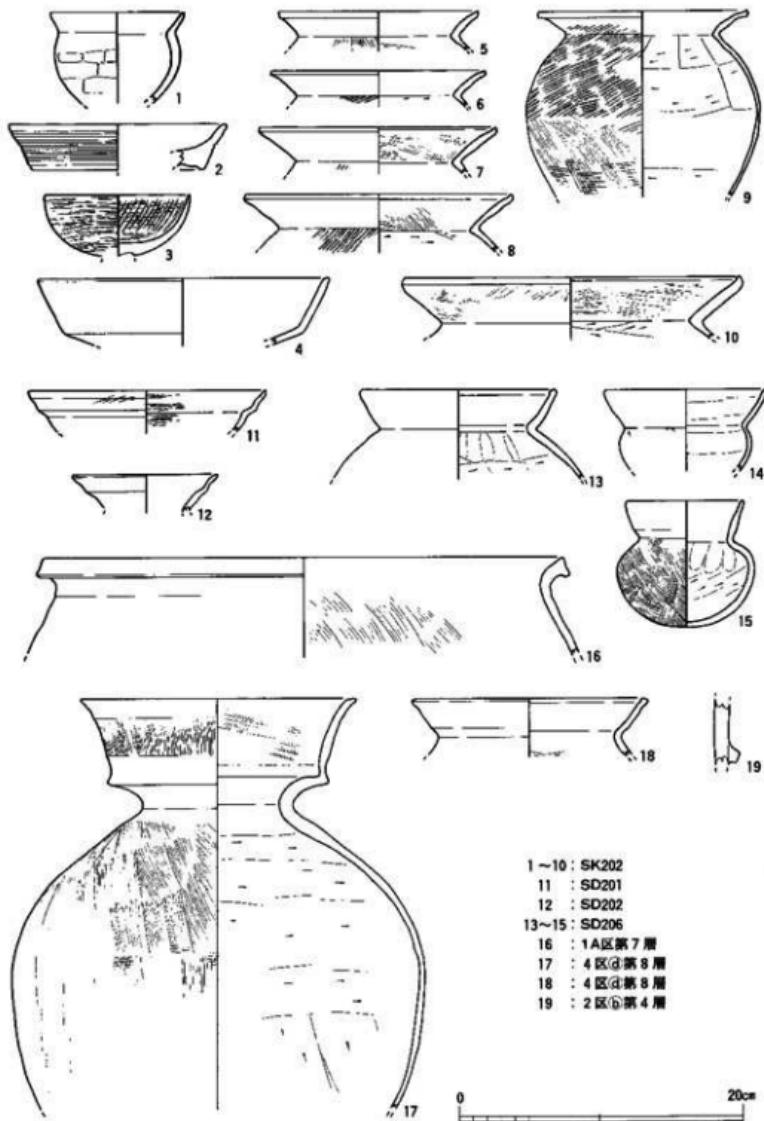
8 地点（⑤～⑩）で土層断面の観察を行った。②地点の第2層の細砂～粘土の互層は楠根川の旧流路と考えられる。⑥地点の第2層は固くつき固められており、近世頃の整地層と考えられる。⑥地点の第4層は中世頃の包含層で、瓦器梶の小破片が少量出土している。また円筒埴輪片（19）も含まれていた。⑦地点で、古墳時代前期の包含層の上に堆積する第6層暗褐色細砂混じり粘土は、この付近東西約5mの範囲でのみ認められた土層である。⑨地点から5区西部には古墳時代前期の包含層の上に細砂～微砂の堆積が認められた。古墳時代前期の包含層である暗灰色系粘土は、ほぼ全域で標高9.2m～9.4m付近に認められたが、⑩地点では標高8.8m～8.9mで検出され、やや低くなっている。

・検出遺構と出土遺物

5 区で溝1条（S D 207）を検出した。



第2図 立会調査地(印道部分)基本圖(3 = 1 / 40)



第3図 出土遺物 (S = 1 / 4)

SD 207

5区中央で検出したもので、平面的には捉えられなかったが、断面観察から南北方向の溝であると判断した。法量は幅約1.0m・深さ約48cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は上から明青灰色細砂混じり粘土・暗青灰色細砂混じり粘土・暗青灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

3) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 深さ	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残存 状況
1 土師船 壺 SK 202	1区		(9.8)		淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハラケズリ、内面ナデ。	1/4 反転
2 土師器 壺 SK 202	1区		(15.6)		淡系褐色 下の砂粒含む	薄 1.5mm以下	良好	口縁部ナデ後外側表面接着。	1/6 反転
3 土師器 壺 SK 202	1区		10.5		暗茶色	密	良好	内外面横方向へラミガキ後内面放射状のヘラミガキ。 外底延付。	杯部元存 無
4 土師器 壺 SK 202	1区		(20.8)		乳茶色	密	良好	ヨコナデ。外底延付。	微小 反転
5 土師器 壺 SK 202	1区		(14.2)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハケ、内面ハラケズリ。	1/6 反転
6 土師器 壺 SK 202	1区		(15.3)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキ、内面ハラケズリ。 内底延付。	1/4 反転
7 土師器 壺 SK 202	1区		(17.0)		暗系褐色 下の砂粒含む	密 1mm以下	良好	口縁部ヨコナデで内面ハケ残る。体部外側タタキ。	1/6 反転
8 土師器 壺 SK 202	1区		(19.2)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデで内面ハケ残る。体部外側タタキ。 内面ハラケズリ。口縁部端付。	微小 反転
9 土師器 壺 SK 202	1区		(14.9)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキのちド平ハケ、内面ハラケズリ。	1/4 反転
10 土師器 壺 SK 202	1区		(24.2)		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデでハケ残る。外底延付。	1/4 反転
11 土師器 壺 SK 201	1区		(17.0)		乳茶色	密	良好	内外側ヘラミガキ。	微小 反転
12 土師器 壺 SK 202	1区		(10.4)		乳茶色	やや粗	良好	ヨコナデ。	2/3 一部反転
13 土師器 壺 SK 202	1区		(14.1)		淡灰褐色 下の砂粒含む	密 1.5mm以下	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ナデ、内面ハラケズリで、 上位ユビオサエ。	1/4 反転
14 土師器 壺 SK 206	1区		(11.5)		淡茶色 下の砂粒含む	密 1mm以下	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。口縁部一体部周外側ハ ケ残る。	1/4 反転
15 土師器 壺 SK 206	1区		(8.3) 9.0 9.8		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハケ、内面上半ユビオサ エ、ド平ハラケズリ。外底延付。	3/4 反転
16 先牛 壺 SK 206	1A区 第7層		(28.0)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ハケ。	微小 反転
17 土師器 壺 SK 206	4区 ② 第8層	最大径(29.2)	(19.4)		褐色 暗茶色	密 4mm以下 の砂粒を多量 に含む	良好	口縁部ヨコナデで口縁部外側ハケ残る。体部外側ハ ケ、内面ハラケズリで、外底タタキ残る。	1/3 反転
18 土師器 壺 SK 206	4区 ③ 第8層		(16.8)		暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ハラケズリ。	微小 反転
19 円筒状輪	2区 ④ 第4層	タガ高 0.7 タガ幅 1.5	0.7 1.5		乳茶色	密	良好	不明。	微小

3.まとめ

今回の調査では弥生時代中期から古墳時代前期の遺構・遺物を検出した。

弥生時代中期では遺物包含層を確認した。遺構は検出できなかったが、当調査地の南部周辺での既往の調査で検出されている。

古墳時代前期では調査地全域で遺物包含層が確認され、北部では庄内式期新相から布留式期にわたる二時期以上の集落遺構が高い密度で検出されている。このことから、当地は当時の集落の中心地付近であったことが窺える。

府道部分2区では円筒埴輪の破片が出土しており、付近で出土している埴輪円筒棺との関連が注目される。



1 A区全景（東から）



1 A区 SD201 北壁



1E区 SD204 (南から)



1F区 SK201 (北から)

図版三 出土遺物



2



13



3



15



9



16



12



17

X 美園遺跡第1次調査 (MS92-1)

例　　言

1. 本書は、八尾市美園町2丁目・宮町4丁目地内で実施した公共下水道工事（平成4年度1工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する美園遺跡第1次調査（MS91-1）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第63号 平成4年7月9日付）に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年9月8日から12月13日にかけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約100m²を測る。現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。
1. 遺物整理等には、上記の他、磯上サカエ・宮崎寛子・村井俊子があたった。

本　文　目　次

1.はじめに.....	129
2.調査の方法と経過.....	130
3.検出遺構と出土遺物.....	131
1) 1区.....	131
2) 2区.....	136
3) 3区.....	136
4) 出土遺物観察表.....	138
4.まとめ.....	140

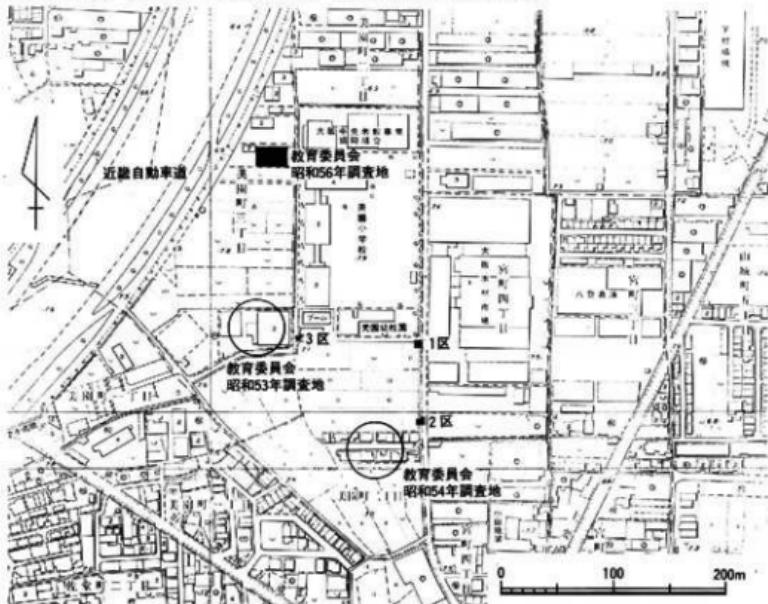
X 美園遺跡第1次調査 (MS 92-1)

1. はじめに

美園遺跡は、八尾市北西部の美園町・宮町一帯に所在しており、今回の調査地の南側に位置する宮町1丁目の穴太神社周辺では、中世～近世の遺構・遺物が検出されており、その付近は宮町遺跡と呼ばれている。

調査地の西側には、近畿自動車道が位置しており、ここでは、(財)大阪文化財センターによる大規模な発掘調査が行われており、埋没古墳である「美園古墳」の検出をはじめとして、多大な成果が得られている。また、今回の調査地の2区の南隣(昭和54年6月調査)および3区の西隣(昭和53年7月調査)では、八尾市教育委員会による発掘調査が行われている。

一方、当調査地の北西200m地点で昭和56年7月～8月に市教育委員会が行った調査では、古墳時代前期(庄内期～布留期古段階)の集落が検出されている。



参考文献

- (財)大阪文化財センター「美園」 1985年
- 八尾市教育委員会「5. 佐堂遺跡」「6. 佐堂道路」「昭和53・54年 埼玉文化財発掘調査年報」 1981年
- (財)八尾市文化財調査研究会「第5章 美園遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」 1983年

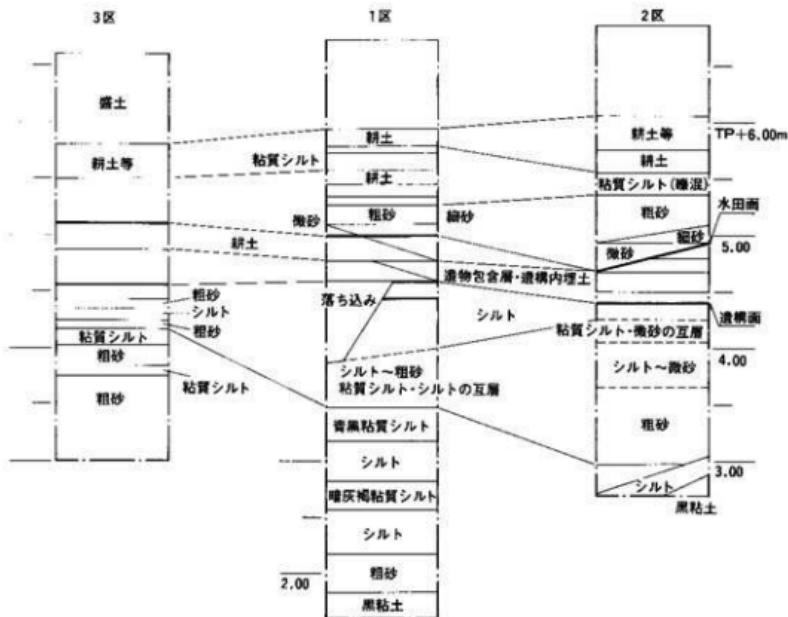
2. 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が美園遺跡内で実施した最初の発掘調査（MS92-1）である。

調査区は、発進立坑1か所・到達立坑2か所の3か所で、1区～3区と呼び、工事の進捗状況に合わせて随時調査を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。調査期間は、平成4年9月8日から12月13日までである。

調査は、北東部に位置する1区（面積49m²）から開始し、次いで1区から西100m地点の3区（面積12m²）、最後に1区から南約60m地点の2区（面積42m²）の順で行った。

1区は、平成4年9月8日から、鋼矢板打設に伴う機械掘削（現地表下0.8mまで）を開始した。矢板工および覆工終了後の9月11日、現地表下1.8～2.0mに存在する弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に相当する遺物包含層上面までの機械掘削を行った。9月14日から人力掘削を開始し、9月18日に遺構面（現地表下2.3～2.5m）を完掘し、平面的な調査を終えた。



第2図 縦断面図

翌9月19日、下層の状況を確認するために、人力・機械を併用して現地表下約3.0mまでの掘削を行った。さらに9月25日、工事による掘削深度である現地表下4.5mまでの機械掘削に立ち会い、1区の調査を終了した。

3区は、1区の調査中である平成4年9月16日に、覆工作業に必要な部分の機械掘削（現地表下0.6mまで）を開始した。1区の調査終了後の10月3日～5日、現地表下2.0m前後に存在する遺物包含層上面までを、機械掘削しながらライナー管設置作業を行った。10月6日～7日、以下の約1mについて人力掘削を行い、1区に対応する上層の検出につとめたが、遺構・遺物は認められなかった。次いで10月9日、工事による掘削深度である現地表下約3.5mまでの機械掘削に立ち会い、下層確認を行った。

2区は、11月21日から鋼矢板打設に伴う機械掘削（現地表下0.8mまで）を開始し、11月28日に1区と同様、覆工作業に伴う1次掘削を終えた。ついで、11月30日、土留工のための機械掘削（現地表下1.8～2.0mまで）を行ったが、土層観察用の畦を残すため、矢板際の周囲は現地表下1.5m前後までとした。人力掘削は、上留め工終了後の12月8日から開始し、12月11日に遺構面を完掘した。12月13日～14日に現地表下4.2mまでの機械掘削に立ち会い、すべての調査を終了した。

3. 検出遺構と出土遺物

現地表面の標高はT.P.+6.7～7.0mで、盛土は0.5～1mある。以下には旧耕土、床土などがあり、そこより下には洪水層であるシルト～砂があり、その直下には水田耕土の可能性のある灰色粘質シルトが0.2～0.3mの厚さで堆積している。この層上面は現地表下1.5～2.0m、T.P.+5.0m前後である。それ以下には、弥生時代終末期～古墳時代前期後半の遺物包含層である暗灰色シルト質粘土が0.3～0.5m程度の厚みで堆積しており、その直下に同時期の遺構面を構成する青灰色シルトがある。この層上面は現地表下2.5m、T.P.+4.5m前後に達する。この遺構面以下には、シルト～粗砂および植物遺体を多く含む粘土～粘質シルトの瓦層が1m以上堆積しているのを確認した。

出土遺物は、1区と2区の上層の砂層から奈良時代～鎌倉時代初頭の土師器や瓦器の小破片が少量出土し、1区の落ち込み内部および遺物包含層からは弥生時代中期後半～古墳時代前期の土器類がコンテナ箱に各1箱ずつ、1区・2区の各遺構内部からは古墳時代前期の土器類が少量出土している。

1) 1区

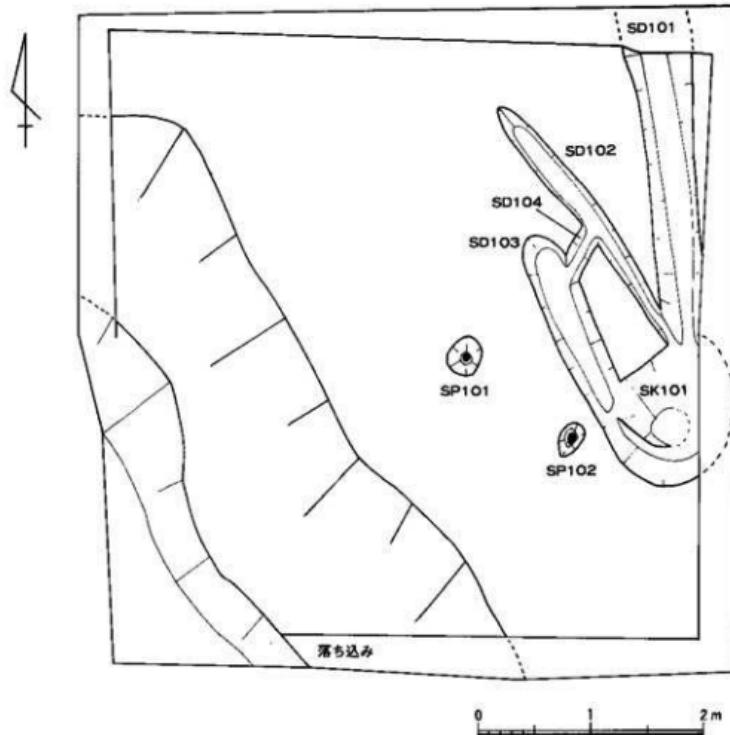
北東部の調査区である。ここでは、現地表下2.3m前後の青灰色シルト上面で、弥生時代後期末の遺構面をとらえることができた。遺構面はT.P.+4.4～4.5mで、南西へ急斜面を形成

して落ち込んでいる。落ち込みの比高差は0.8m程度あり、調査区南東隅が最も深く、T.P. + 3.739m（現地表下3m）を測る。

落ち込み内部には、弥生時代中期～古墳時代前期前半の土器が含まれている（1～10）。現地では、この層上面でのみ遺構をとらえたが、落ち込み内部の堆積土層や出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代前期後半までの複数時期の遺構面が数枚あったことが確認できる。

落ち込み以外の遺構は調査区の東部にまとまっており、土坑1基（SK101）、溝4条（SD101～SD104）、柱穴2個（SP101・SP102）がある。内部堆積土は暗灰色～黒灰色粘質シルトで、各遺構内部からの出土遺物はすべて小破片で、量も少ない。

SK101：調査区東端中央部で検出した。上面の形状は径1.1～1.2m程度の楕円形で、深さは0.6m、断面の形状は逆台形で南側の一部に二段の掲形をもち、底は平らである。内部からは上師器片が少量出土している。この土坑SK101に、溝SD101～SD103が流れ込む。



第3図 1区平面実測図

S D 101：調査区北東端から南へ流れ、土坑SK 101の北端に接続する。検出長2.7m・幅0.5~0.6m・深さ0.1~0.15m、溝底の比高差は0.1mを測る。土師器片が数点出土している。

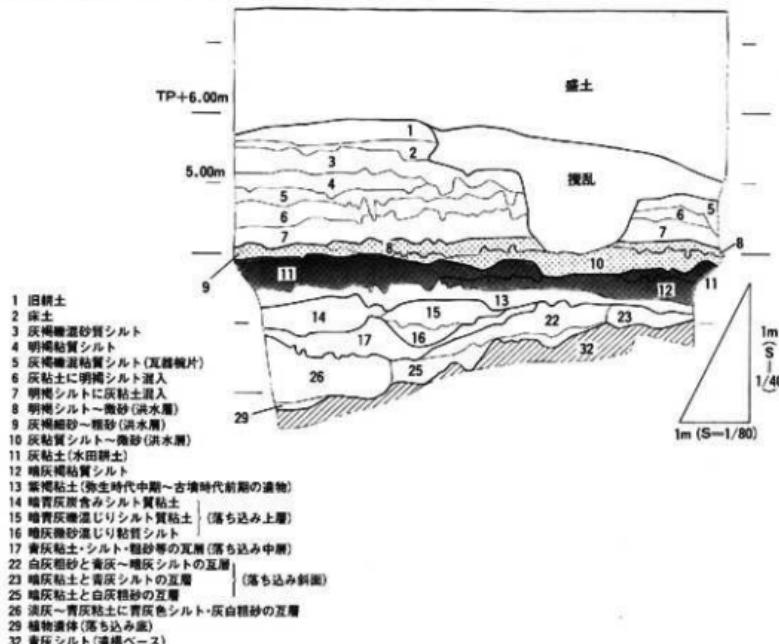
S D 102：調査区東部中央から南南東への流路をもち、土坑SK 101の北東部に接続する。長さ2.8m・幅約0.4m・深さ0.1m前後、溝底の比高差は北西と南東で0.05m程度である。

S D 103：調査区北東部から南東へ伸び、溝SD 101とともに土坑SK 101の北端に流れ込む。長さ2.5m・幅0.15~0.2m・深さ0.05~0.1m、溝底の比高差は北西と南東では0.05m程度ある。

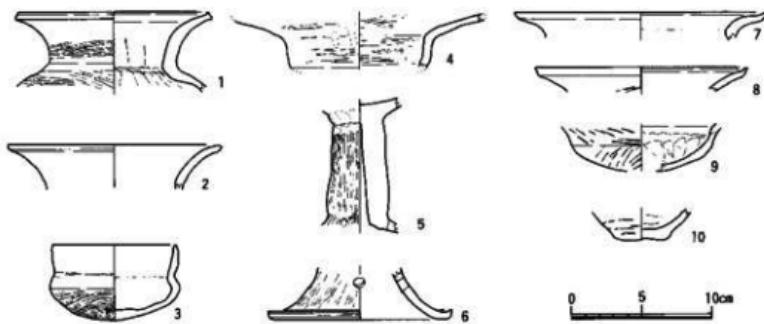
S D 104：溝SD 102とSD 103をつなぐ小溝で、長さ0.4m・幅0.2m・深さ0.1mである。

S P 101：調査区中央部、小溝群と落ち込みの間で検出した。上面の形状は北東一南西に長い楕円形を呈し、長径0.35m・短径0.3mを測る。深さは0.1mあり、中央部に直径0.1m・深さ0.1m程度の柱痕跡がある。

S P 102：調査区南東部、柱穴SP 101の南東1.2m地点で検出した。上面の形状はSP 101よりひとまわり小さい北東一南西に長い楕円形である。長径0.3m・短径0.2m、深さは0.1m、中央部に直径0.15m・深さ0.1m程度の柱痕跡がある。



第4図 1区西壁実測図



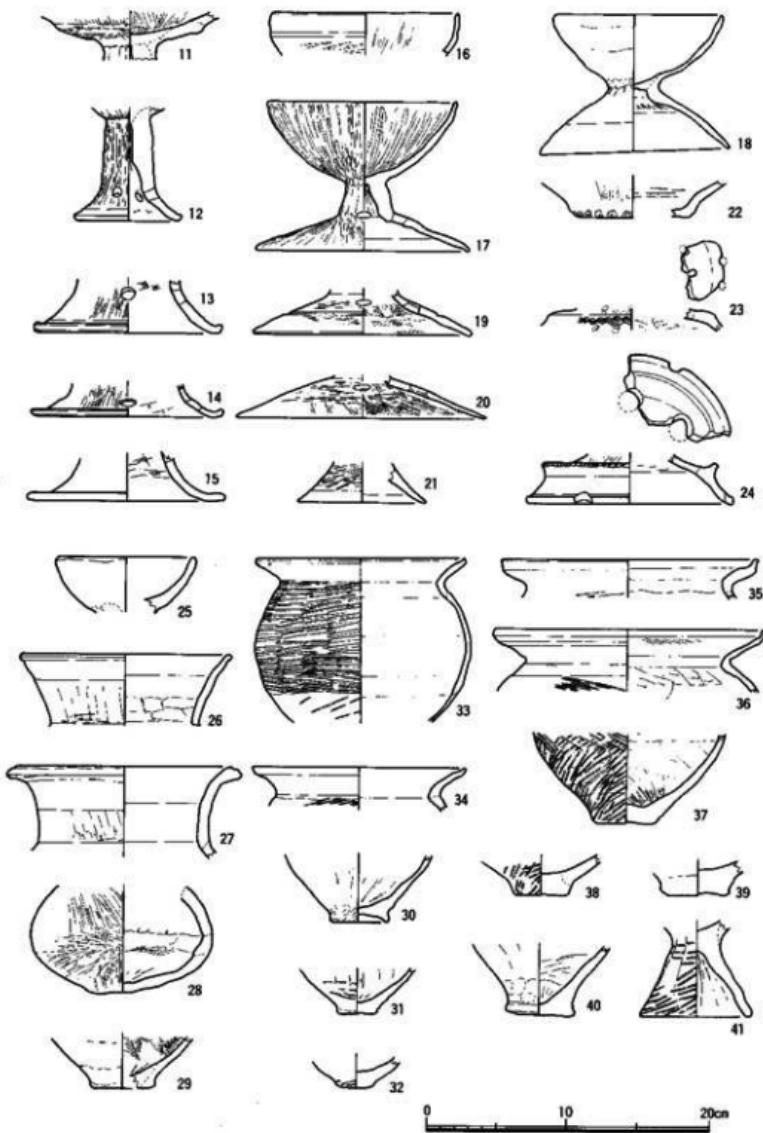
第5図 1区落ち込み出土遺物実測図

図示した遺物は、落ち込み出土のもの10点（第5図1～10）、包含層出土のもの39点（第6図11～41、第7図41～49）で、古墳時代前期のものがほとんどであるが、弥生時代中期にまで遡るものも含まれている。

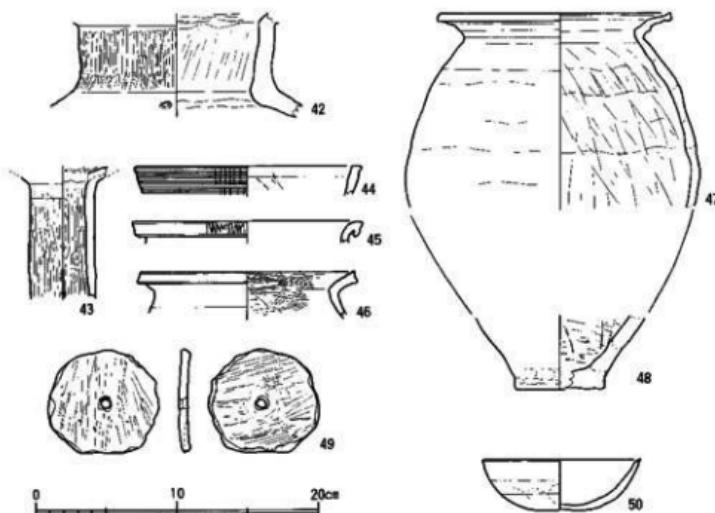
落ち込み出土遺物には、広口壺（1・2）、小型壺（3）、高杯（4～6）、甕（7・8）、小型鉢（9・10）などがある。小型壺（3）は、扁平な体部に内湾気味に立ち上がる口縁部を持つもので、外面はハケ調整がなされており、他地方製の土器の可能性がある。高杯には精製の器種（4）と、厚手で粗製の器種（5・6）がある。甕には、弥生V様式の系譜を受け継ぐ「V様式系甕」（7）、「庄内甕」（8）が見られる。小型鉢（9・10）はともに粗いタタキが施されており、（9）は浅い碗形で特異な形態を呈する。

包含層出土の古墳時代前期の土器には、高杯（11～20）、器台（22～24）の量が多く、吉備地方の形態的な特徴を持つ碗形高杯（18）、装飾器台（22～24）、小柄で精製の脚台部（24）、などが見られる。甕には「V様式系甕」（33～35・37～40）、「庄内甕」（36）、東海地方の形態的特徴を持つ脚（41）などがある。その他、小型鉢（25・30～32）、粗製の直口壺（26）、広口壺（27）、小型壺（28）、壺底部（29）などがある。

包含層出土の弥生時代の土器類には、広口壺（42）、高杯（43）、鉢（44・45）、甕（46～48）、円板形土製品＝紡錘車（49）がある。広口壺（42）は肩に竹管押圧文を持つもので、弥生時代後期にまで至るものかもしれない。他はすべて弥生時代中期後半までにはおさまるものであろう。甕（47・48）は同一個体の可能性が考えられるもので、東部四国の特徴を持つ。円板形土製品＝紡錘車は、弥生時代中期の大型の器種を転用したもので、孔は貫通しているが、周囲は粗削りでとどまる未完成品である。



第6圖 1区13層・15層出土遺物実測図



第7図 1区13層・2区1層出土遺物実測図

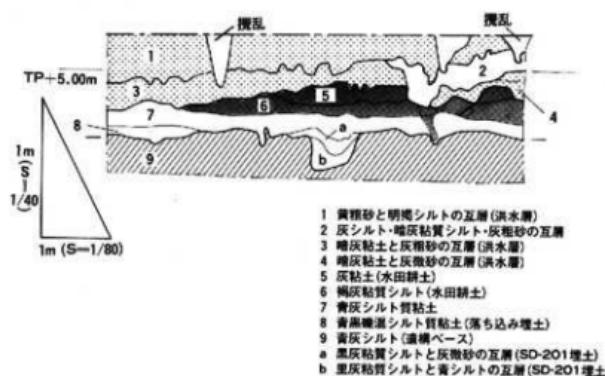
2) 2区

1区から南60mに位置する調査区である。ここでは、造構面である青灰色シルト上面は現地表下約2.5m (T.P.+4.3~4.4)m程度で、南東隅が落ち込んでいるのを確認した。その他に、溝1条 (S D 201) を検出した。出土遺物は、調査対象層より上の粗砂シルト層に、奈良時代~平安時代後期の土器片(50)ほかが数点含まれているが、すべて摩耗した小破片である。

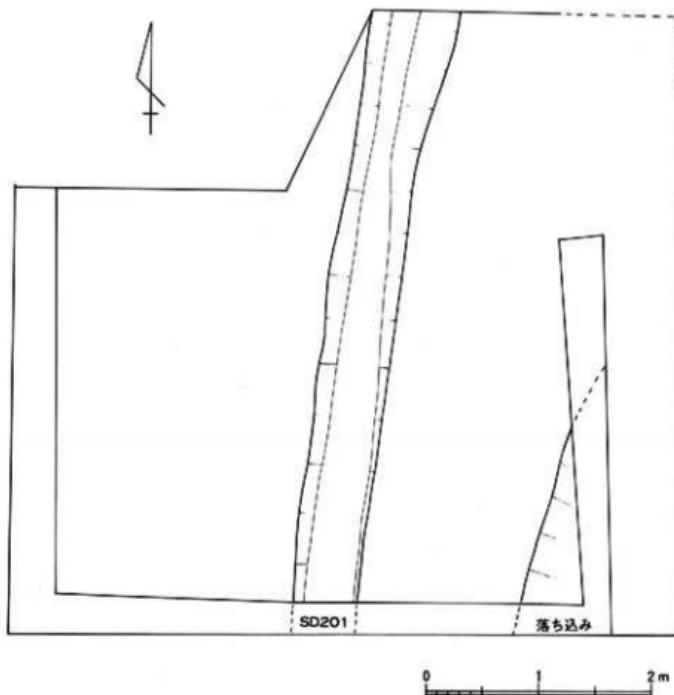
S D 201：調査区中央部で検出した。ほぼ南北に伸びる溝で、検出長6m・幅0.6~0.8m・深さ0.1~0.3mを測る。断面の形状は逆台形で、溝底の比高差は0.1~0.2mあり、南が高く北が低い。内部には、上層にa 黒灰粘質シルトと灰微砂の互層、下層にb 黑灰粘質シルトと青シルトの互層が堆積しており、b層は炭を含んでいる。

3) 3区

1区から西100mに位置する調査区である。ここでは、現地表下2.1m (T.P.+4.5m) 前後で古墳時代前期の遺物包含層に相当する粘質シルト (層厚0.1~0.15m) に達し、その直下に青灰色シルト (T.P.+4.4m前後) が見られたが、1区・2区と比べて薄く、以下には不安定な土層堆積である粘質シルトと粗砂の薄い互層が現地表下3m前後 (T.P.+3.6m前後) まで続くのを確認した。ここでは、造構・遺物は確認していない。



第8図 2区南壁実測図



第9図 2区平面実測図

4) 出土遺物観察表

番号	器種	出土地	法業 (cm)	色調 外 内	施土	焼成	技術・形態等の特徴	備考
1	広口壺	1区 落ち込み	口 径 18.5	淡褐色—青白色	青	良好	表面に残り目残る 外側面ハラミガキの後腹面部・口縁部ヨコナダ、 内面ナダ、底部ヨコナダ	口縁部完存
2	広口壺	1区 落ち込み	口 径 (14.9)	乳白色	青 チャート多い	良好	ヨコナダ	
3	小開窓	1区 落ち込み	口 径 8.8 最大径 9.2 高 3.4	淡褐色—灰褐色	青 裏面多い	良好	裏面を全体に内削気味に伸びる口縁部 外側面ハラミガキの後腹面部・口縁部ヨコナダ、 内面ナダ、底部ヨコナダ	完存 黒度あり
4	高杯 杯底	1区 落ち込み	口 径 (16.0)	明褐色 (淡褐色)	青	良好	横方向の痕なハラミガキ	
5	高杯 住状態	1区 落ち込み	基盤径 3.5 孔 径 0.5	鮮紅色	青—やや粗 長石多い	良好	2孔既存 (3孔?) 外側面ハラミガキの後腹部、横一枝射状ハラミガキ 内面底部ハラミガキ	住状態ほぼ 完存
6	高杯 樹脂	1区 落ち込み	口 径 (12.9) 孔 径 0.7	黄褐色	青	良好	1孔既存 外側面ハラミガキの後腹部、端面に巻括直線文 内面ナダ	
7	蓋 口縁部	1区 落ち込み	口 径 (18.0)	淡褐色	やや粗 花崗岩・長石 等多い	良好	水平近くに聞く口縁部、端部は上方に丸くつま みあげられる ヨコナダ	
8	蓋 口縁部	1区 落ち込み	口 径 (15.0)	茶褐色 (淡赤褐色)	やや粗 花崗岩等多い	良好	外反気味に聞く口縁部、端部は上方につまみ上 げられる、両き出し口様 ヨコナダ	
9	小型杯	1区 落ち込み	基盤径 (10.0)	淡黄色	青—やや粗	良好	浅い彫刻 2枝脚・2方向のタキ、内面板ナダ	黒度あり
10	變 底部	1区 落ち込み	底 径 3.6	淡黃褐色 (淡 灰色)	青—やや粗	良好	体部からあまり突出しない底 底面・内面ハラミガキ、外側面水平タキ	
11	高杯 杯底	1区 13層	杯底径 (10.0)	淡褐色—淡赤褐 色	青 やや粗 石英・チャート多い	直射	杯部と柱状部の繋合は円滑な形、中実の柱状部 杯底改修状ハラミガキ、柱状部ヘラによる削取 り、杯底部の内面部にヨコナダ	
12	高杯 脚部	1区 13層	底 径 (7.2) 孔 径 0.7	淡褐色	精良・青	良好	長脚・厚手、底は小頭、側に6孔あり 紋・削りの跡外側面直線状態へ放射状ハラミガキ、 柱底脚ハラミ、底部ヨコナダ	
13	高杯 鋸端	1区 13層	底 径 (13.0) 高 0.9	淡褐色	精良・青	良好	縦から外反する被部、端部は円筒 4孔あり外側放射状ハラミガキ、内面ハラミ。 端部ヨコナダ	表皮剥離
14	高杯 鋸端	1区 13層	底 径 (13.0) 孔 径 1.0	明褐色	青	良好	縦から外反する被部、端部は円筒 4孔あり外側放射状ハラミガキ、内面ハラミ。 ヨコナダ	
15	高杯 杯底	1区 13層	底 径 (14.0)	茶褐色	青—やや粗	良好	縦から外反する被部、端部丸く終わる。1孔 既存 通常近ヨコナダ、内面にハケ状工具の圧痕	表皮剥離
16	高杯 杯底	1区 13層	口 径 (13.0)	淡褐色	青 小褐色化粧 含む	良好	体部との境に凹溝が走り、内溝して少々口縁部、 表面に尖る 外側面、内面側ハラミガキ、端部ヨコナダ	吉備系
17	高杯 杯底	1区 13層・15 層	口 径 13.1 高 15.0 基盤 10.7	青褐色	青 小突起多量に 含む	良好	縦の杯部に付いた柱状部、大きく開く低い断面 4孔あり、放射状ハラミガキ、柱状部改修後外 周ハラミによる削取り。口縁・鋸端部ヨコナダ	ほぼ完存
18	偏圓 高杯	1区 13層・15 層	口 径 11.5 高 13.1 基盤 高 10.0	淡赤褐色 灰黑色	青	良	柱状部を持たない偏圓高杯 柱部・端部の被合部に指おさえ、端部内面へラ ミ、端部ヨコナダ	ほぼ完存 表皮剥離
19	高杯 鋸端	1区 13層	底 径 (15.1)	明褐色—灰褐色	精良—青	良好	大さく聞く断面中心に凹溝、4孔 (2孔既存) 外側ハラミ後被方内面なハラミガキ、凹溝以降ヨ コナダ、内面ハラミ?、ヨコナダ	1/4
20	高杯 鋸端	1区 13層	底 径 (17.8)	明褐色 灰褐色	精良	良好	内反気味に大きく聞く4孔 (2孔既存) 内面ハラミガキリ、ハラミ後被方内面ハラミガ キ、端部ヨコナダ	内面端部 1/3
21	杏又は 鶴 鋸端部	1区 12層	底 径 (8.8)	淡褐色	精良・青 チャート含む	良好	わざかに外反する被部、端部は尖る 外側面なハラミガキ、内面ナダ、端部ヨコナダ	

番号	器種	出土地	法量 (cm)	色調 (内は内模)	内外 の内は内模	胎土	焼成	技術・形態等の特徴		備考
								内模	外模	
22	被築物 受部	1区 13番 - 13 番	受部様 (8.8)	赤褐色	粗 石英多い	良好	外表面下端に竹管壓文、屈曲部の上下に互い 違いに円孔を基とする (4孔焼成)。内面模方向へラミガキ			
23	被築物 受部	1区 13番		赤褐色	粗	良好	屈曲部以下に模擬底状文、屈曲部の上下に互い 違いに円孔を基とする (4孔焼成)。内面模方向へラミガキ			
24	装飾器合 成部	1区 13番	瓶 横 (14.4)	淡茶褐色	やや粗	良好	斜面付底窓、6孔? (2孔焼成)。模擬底に1孔 外壁模状へラミガキ。内面ヘラケヅリ			
25	小型杯	1区 13番	口 横 (9.4)	明褐色 - 乳白色	粗	良好	圓窓、厚手 手づくね、縦口縫			
26	直口器 口縫部	1区 13番	口 横 (12.6)	淡茶褐色	やや粗 石英	良好	板壁、外側する口縫部、丸く抉れる輪窓 外壁模部のヘラによる面取り、端部コロ ナデ			接板
27	直口器 口縫部	1区 13番	口 横 (14.7)	明褐色	精良 - 壊	良好	木立する露窓、外反する口縫部、肥厚する端部 外壁模部に細へラケヅリの後ヘラミガキ 内外口縫部に強いヨコナデ			外面糊付省
28	盛平器 体部部	1区 10番 - 15 番	最大径 12.9 底 2.5	茶褐色	やや粗 角石英 - 長石	良好	扁平な球体の形態。突出気泡の底部中央は凹む 2分割成形、外壁ヘラミガキ 内面下端に削り後ハケ、上手ナデ			
29	直 底部	1区 13番	底 横 (4.0)	灰褐色 淡茶褐色	やや粗	良好	体部から突出する平底 外底頭にラケヅリの後外側ナデ調整 内面クサの裏剥のハケ調整			
30	体 底部	1区 13番	底 横 3.9	淡灰色	やや粗	良好	体部から突出するハケ 手づくね状、底部周囲は滑おさえでつまみ山出 内面ナデ調整			底部内外に 黒斑
31	斜 底部	1区 15番 - 15 番	底 横 2.7	淡灰色 黑色	やや粗	良好	体部からわずかに突出する平底 手づくね状、外底頭タキの底跡? 外底面 - 内面 ナデ調整			
32	鉢 底部	1区 13番	底 横 (2.0)	明褐色 - 白色 灰色	精良 石英粒多量に 含む	良好	突出の少ない平底 右上リタキ、外底面ナデ、内面ヘラケヅリ			
33	甌 底部	1区 13番	口 横 14.6 最大径 13.7	淡褐色	やや粗 花崗岩含む	良好	底部の内側、外反底頭の口縫部、つまみあげる 底部、端部に沈没感のくぼみがある 分割成形、水平一舟上がりタキ、内面ナデ			底部下端に 埋付省
34	甌 口縫部	1区 13番	口 横 (15.0)	明褐色 - 灰色 褐色	粗 チャート	良好	外反する口縫部、底部は外上方へつまみ上げら れる。横底頭から底脚 右上リタキ、ヨコナデ			
35	甌 口縫部	1区 13番	口 横 (17.9)	茶褐色	やや粗 角石英含む	良好	外反気泡に開く口縫部、上方へ立ち上がる端部 タキ、ヨコナデ			
36	往來 口縫部	1区 13番	口 横 (18.9)	暗茶褐色	やや粗 角石英多量に含 む	良好	くの字型の口縫部、底部は上方に立ち上がる と上りタキ、内面ヘラケヅリ、ヨコナデ			
37	甌 底部	1区 13番	底 横 4.0	茶褐色	白やや粗 石英、チャー ト	良好	突出の少ない底 右上リタキ後ナデ			体部 - 底面 に黒斑
38	甌 底部	1区 13番	底 横 (3.6)	明灰褐色	精良 - 細 ナード、花 崗岩	良好	突出する平底 右上リタキ、外底面 - 内面ナデ			
39	甌 底部	1区 13番	底 横 4.0	白灰 - 暗褐色 明灰褐色	やや粗 石英多量	良好	突出する平底 タキ、底脚間 - 底脚ナデ			
40	甌 底部	1区 13番	底径 (1.5) (約) 4.0	茶褐色	粗 花崗岩、石英、 長石	良好	体部から突出する平底 底脚部 - 外底頭へラケヅリ後ナデ、外側面おり え・ハケの既成			二次成形の ため器壁荒 れ
41	甌 脚台部	1区 13番	相 横 7.7	茶褐色 - 褐色	やや粗	良好	丈高的形態の脚、複合部からの割離 ハクによる既成り後水平 - 右上リタキ 内面削り、端部ナデ仕上げ			一次成形
42	燈籠座	1区 13番	諸部様 (13.5)	淡茶褐色 淡灰色	粗 - やや粗	良好	直立する頸部、肩に竹管壓文 内外底脚部へラミガキ、口縫、底脚部へラミ ガキ			

番号	名稱	山土地	法面 ①内は復元値	色調 ②内は中傾	地 上	焼成	技法・形態等の特徴	備考
43	高杯 柱状部	1区 13番	口 傾4.5~4.9	淡褐色	青一やや粗	良好	門型北吸。 柱状部ハラケズリ後配ヘラミガキ。杯部放射状 ヘラミガキ	
44	笠円体 UJ縫部	1区 13番	口 傾(15.7)	黑一黑灰色 (灰褐色)	やや粗	良好	門縫部は木字な凹面、外側に二段の縦状文。 ヨコナヂ。	
45	鉢 口縫部	1区 13番	口 傾(16.0)	淡灰褐色	粗	良好	丸く外反するUJ縫部、縫部内傾する間にヘラ 焼き模様。	
46	角 口縫部	1区 13番	口 傾(15.0)	淡黄褐色	粗	良好	くの字形に外反するUJ縫部、縫部外傾する凹面 内窓ヨコナヂ。内窓大部ハラケズリ、UJ縫部ヨ コナヂ。	
47	火 口縫一体 部	1区 13番	口 傾 最大径 21.0	淡赤褐色一灰 褐色	密 小色濃化粒多 い	良好	張りの少ない体感。口縫部は著しく外反する。 火土縫巻き上げ外側面ナテ。内窓ハラケズリ、 UJ縫部ヨコナヂ。	
48	甕 尖部	1区 13番	底 傾 6.0	淡赤褐色一灰 褐色	密 小色濃化粒多 い	良好	底部から突出する下底 底刺馬跡、内窓ヘラケズリ。	47の底か
49	内縫形 土製品	1区 13番	口 傾 厚さ0.5~0.7 直徑0.7~0.9	黑褐色	粗 閃光石多く含 む	良好	周縁削りの後削り。孔は内側から擴張したもの で貫通。弥生時代中頃の大甕の器壁からの転用	
50	土器 杯	2区 1番	口 傾 厚 3.6	淡茶褐色	青一やや粗	良好	手づくね、外底面ヘラケズリの後ナヂ、ヨコナ ヂ	1/2

4.まとめ

今回の調査は、限られた面積の中での「点」的な調査であったが、東西100m・南北60mの広い範囲にわたって、深層部までを調査対象とできることは有意義であった。

弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構面は、東部の1区および南部の2区では認められたが、西部の3区では河川内部の土層堆積状況を呈していた。この河川は、旧大和川の主流のひとつである長瀬川の氾濫に因るものと考えられ、その流路は、時代が下るにつれ川幅をせばめながらも長期間遺存していたよう、現在の区画の乱れに、その痕跡が認められる。

一方、1区・3区では、この弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構面の下層部分に埋没河川を示す上層堆積が認められ、それ以前の調査地付近の不安定な状況が確認できた。

2区の南の市教育委員会昭和53年度調査地では、古墳時代前期の土器棺墓が検出されていることから、同時期の墓域が2区から南側に広がっていたと考えることができる。一方、1区から北西200m地点の市教育委員会調査地では、古墳時代前期の掘建柱建物や井戸、溝などが検出されていることから、同時期の居住域は1区より北西側へ広がるものと考えられ、1区で検出した落ち込みが集落の南西の境界を示すものと考えることもできる。

これらのことから、今回の調査地点は、旧長瀬川左岸を占地する当美園遺跡の、居住域と墓域の中間地点にあたるものと考えられ、重要な位置を占めるものといえる。また、当美園遺跡も市域の沖積地にある多くの遺跡同様、弥生時代後期以降に発展する遺跡であることが明らかになった。さらに、時代が下がるにつれ、遺跡の中心は旧長瀬川の下流域（流路方向）である北西へと移動・拡大することを示唆している。



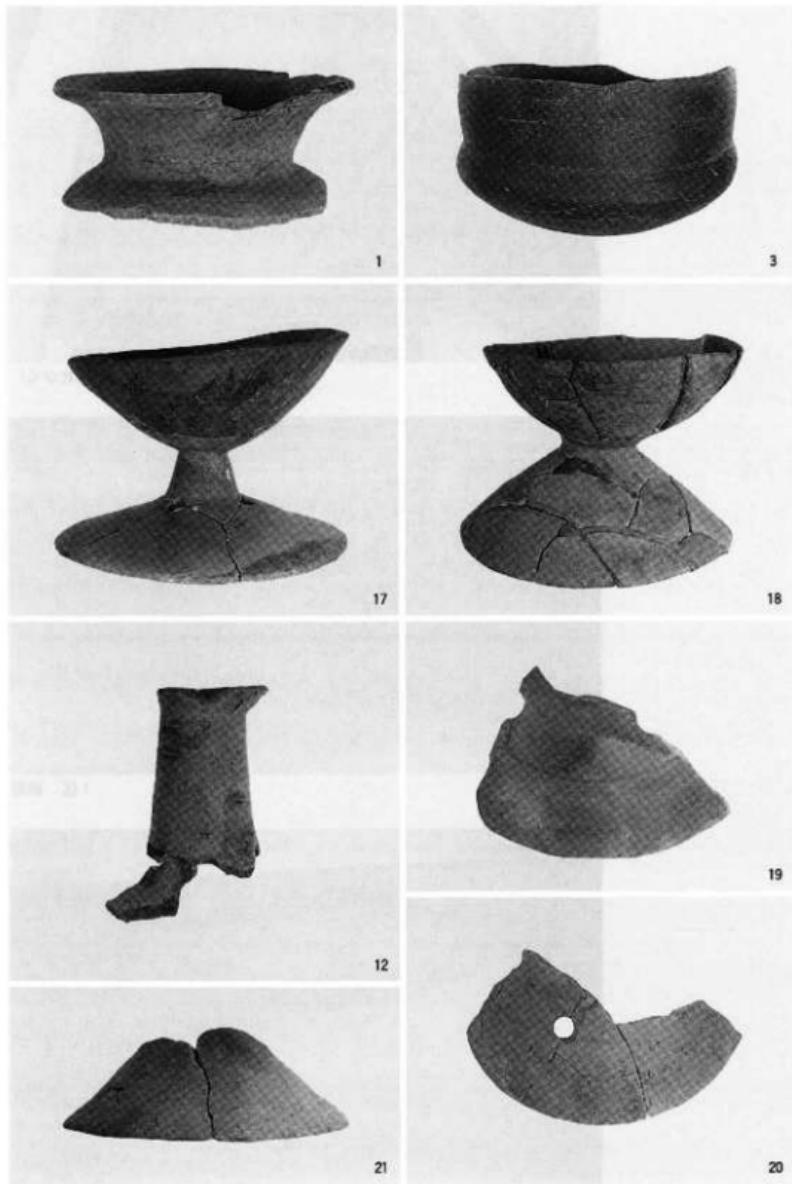
1区 遺構検出状況（北から）



1区 西壁



2区 遺構検出状況（北西から）



図版三
出土遺物



23



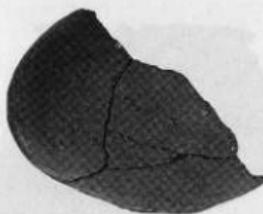
24



26



27



28



30



31



40



33



36



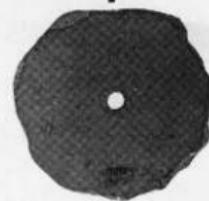
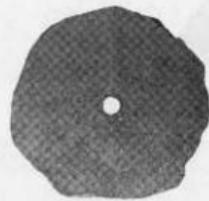
37



41



47



49



48

XI 美園遺跡第2次調査 (MS92-2)

例　　言

1. 本書は、八尾市美園町2丁目101-2で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する美園遺跡第2次調査（MS92-2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第115号平成4年10月7日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市消防本部から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年12月16日～12月19日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は70m²を測る。なお、調査においては澤井幹、西田寿が参加した。
1. 本書に関わる業務は、岡田が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	145
2.調査概要.....	146
1) 調査方法と経過.....	146
2) 基本層序.....	146
3) 検出遺構と出土遺物.....	147
3.まとめ.....	148

XI 美園遺跡第2次調査 (MS92-2)

1. はじめに

美園遺跡は、八尾市の北西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川右岸にあたる地域で繩文時代から近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では美園町1~4、久宝園1~3、佐堂町1~3、宮町4丁目付近で、西・北は東大阪市域に広がっている。周辺の遺跡では、北東に山賀遺跡、南西に佐堂遺跡、南東に宮町遺跡および穴太廃寺推定地が近接している。当遺跡内における発掘調査は八尾市教育委員会が「佐堂遺跡」として昭和53年に当調査地の北西部、昭和54年に当調査地の南部でそれぞれ2件実施されている。そのうち昭和53年の調査では弥生時代終末期~古墳時代初頭期にあたる壺・甕、奈良時代~平安時代に比定できる堆積層、その上層で土師器・須恵器・瓦器の土器片をそれぞれ検出している。昭和54年については、鎌倉時代~室町時代の遺物包含層の下層部分で、時期不明の大小2個の壺を用いた「合わせ口壺棺」



第1図 調査地位位置図

が埋納した状態で検出された。さらに同市教育委員会は昭和56年の調査で、平安時代の河道跡、古墳時代前期の建物・溝・井戸を検出している。また、昭和55年～59年にかけては当調査地の北西約300mの地点で、大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う調査が実施され、縄文時代～近世に至るまでの各時代の遺構・遺物が検出された。とくに古墳時代前期においては、堅穴住居・掘立柱建物とともに「美園古墳」と称される方墳が発見され、その周溝内には家形埴輪や壺形埴輪がみられ、さらに飛鳥～奈良時代にかけては水田遺構や自然河川から墨書き器や木簡・和同開珎が出土している。また、今回の発掘調査は当調査研究会が当遺跡内で実施した第2次調査にあたるものであり、当調査地の近隣で実施された第1次調査(MS92-1)では、古墳時代前期に比定される溝および落ち込み等の遺構・遺物、平安時代頃と推定される水田面をそれぞれ検出している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公園内における防火水槽設置工事に伴うもので、工事部分を対象に一片8.5mの調査区を設定した。掘削に際しては調査地南部の第1次調査(MS92-1)の調査資料を参考に、現地表土下1.8m迄の土層を機械掘削した後、以下1m前後の土層については人力による掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。さらにそれより以下の工事掘削深度範囲にあたる現地表下約3.0mから5.5mまでの層厚2.5m前後の土層については、機械と人力を併用し、慎重に遺構・遺物の確認を行った。その結果、現地表土下1.9～2.8m(標高5.1～4.2m)までの堆積層に古墳時代後期から平安時代末の遺構面及び遺物包含層を確認した。

2) 基本層序

第1層：盛り土及び擾乱層。層厚80～100cm。現地表面の標高は7.0mを測る。

第2層：旧耕土。層厚20～40cm。調査地の北部及び東部においてはほとんど擾乱により削平されている。

第3層：床土。層厚10～20cm。

第4層：淡茶灰色微砂質土。層厚10～20cm。近世の遺物片が若干含まれる。

第5層：茶褐色粘質土。層厚10～20cm。

第6層：明茶褐色粘質土。層厚20～30cm。酸化鉄分が含まれる。

第7層：灰白色粗砂。層厚20～30cm。平安時代以降の洪水層と考えられる。

第8層：黄褐色砂礫混粘土。層厚10～20cm。上層には酸化鉄分が多量に含まれる。平安時代末頃の水田耕土で、上面には人や牛の足跡が多くみられる。この上面を第1調査面とした。

第9層：灰色粘土。層厚20~30cm。

第10層：黒灰色粘土。層厚40~50cm。上層にはやや砂礫が含まれ、部分的に2層に分層できるところもある。下層からは古墳時代中期に比定される須恵器の小破片が微量含まれていた。

第11層：オリーブ灰色微砂混粘土。層厚30~40cm。この層の上面を第2調査面とした。

第12層：灰色粗砂。層厚50~70cm。湧水が著しい。

第13層：灰白色~灰色微砂。層厚40~50cm。ブロック状に植物遺体が混入する。

第14層：淡緑灰色粘土。層厚30~40cm。

第15層：黒色粘土。層厚40~50cm。第1次調査(MS 92-1)で確認された弥生時代に比定される堆積層と対応する層と考えられるが、層内に遺物は含まれていなかった。

第16層：明青灰色粘土。層厚40cm以上。

3) 検出遺構と出土遺物

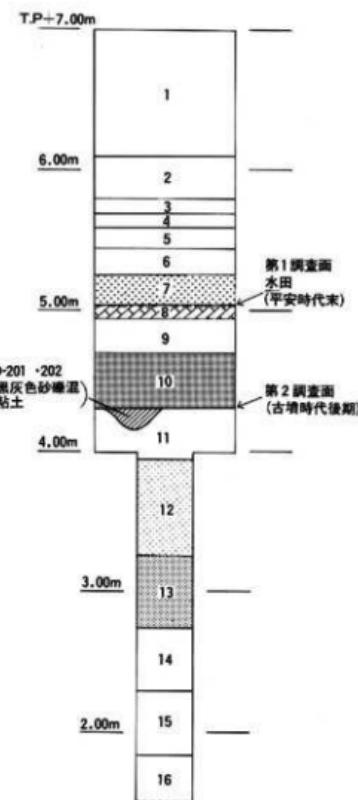
<第1調査面>

現地表土下2.0m付近(標高5.0m前後)の第8層黄褐色砂礫混粘土上面において平安時代末頃に比定される水田面を検出した。上面には河川の氾濫によって埋没したとみられる人や牛の足跡が多く確認できた。畦畔は平面的にとらえる事はできなかったが、調査区内壁面の観察では僅かながら畦畔とおもわれるような起伏部分がみられた。

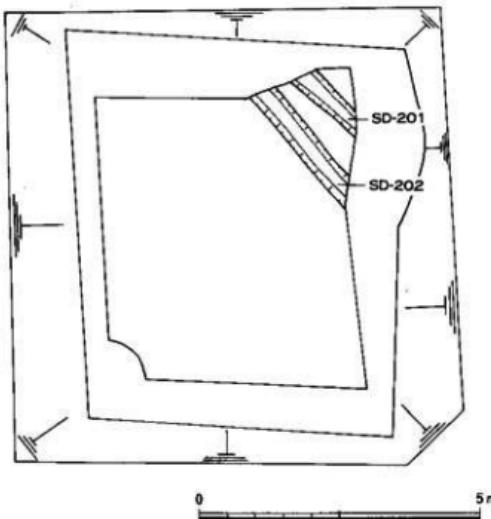
遺物に関しては、少量の土師器片以外に、調査区南東隅の地点で馬歯が数点みられた。この馬歯は出土状況からみて遺構に伴うものではなく、洪水による流れ込みと考えられる。

<第2調査面>

現地表土下2.6m付近(標高4.4m前後)のオリーブ灰色微砂混粘土上面において古墳時代後期に比定される溝2条(SD-201・202)を検出した。双方とも南東~北西方向に平行して伸びる溝で、検出規模は幅30~40cm・深さ10~15cmを測る。遺構内埋土は黑色微砂混粘土で、



第2図 基本層序模式図



第3図 第2調査面遺構平面図

1-）から層位を対応させて時期的に把握することに努めた。

当地における近世から中世にかけての生活面は、壁面観察からみて近代以降の整地等によって削平されたとみられる。平安時代の水田遺構については、而的にとらえることのできたのは当遺跡内でははじめてであり、当時期の生産遺構を解明する上で貴重な成果といえる。古墳時代後期の溝であるSD-201・202に関しては、上述同様に既往の調査結果から考えると居住域の存在を示唆するものであり、さらに今後の周辺における調査によってその広がりが明らかにされるとおもわれる。また、下層確認でみられた第12・13層の比較的厚い砂層の堆積は第1次調査(MS92-1)はもとより、既述の八尾市教育委員会の調査でもこれらとレベル的にも確認されていることから、当地が旧大和川の主流とも言える長瀬川右岸の氾濫源の一部であったことは必然である。

註記

註1 八尾市教育委員会 『昭和53・54年度 墓蔵文化財発掘調査年報』 八尾市文化財調査報告7 1981.3

註2 八尾市教育委員会 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』 1983.8

註3 大阪文化財センター 『美圖』 1985

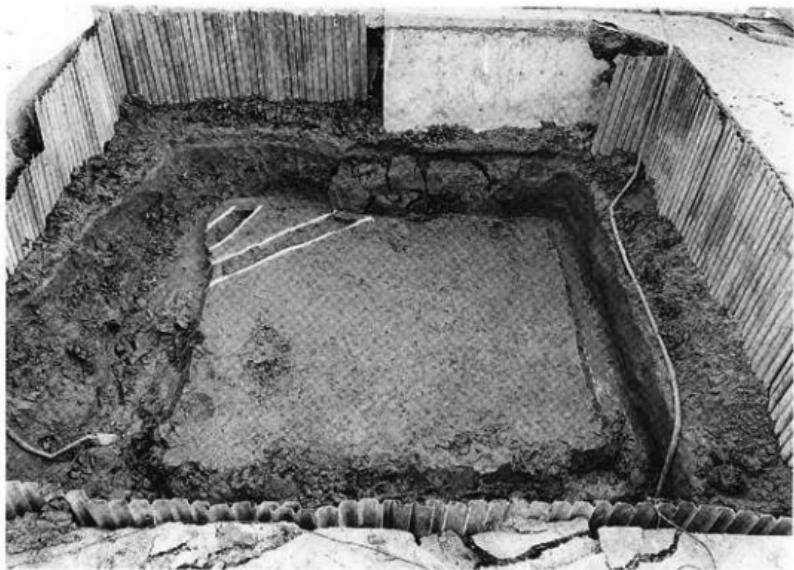
遺物は含まれていなかった。遺構の時期については、付近から6世紀代に比定される須恵器の蓋杯の一部がみつかっていることからおよそ古墳時代後期頃とおもわれる。

3.まとめ

今回の調査では既往の周辺の調査から、弥生時代～中世にかけての堆積層及び遺構の遺存していることを予測されていたが、遺物については皆無といっていいほどみられなかった。したがって今回検出した遺構について明確な時期決定はできないにせよ、周辺調査の資料(とくに第1次調査-MS92-



第1調査面全景（西から）



第2調査面全景（西から）



XII 東郷遺跡第39次調査 (T G 92-39)

例　　言

1. 本書は、八尾市荘内町2丁目地内で実施した公共下水道第93工区工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第39次調査（TG 92-39）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第70号 平成4年7月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年10月1日～11月7日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は50m²である。調査については八田雅美・清水柳吉・西岡千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本 文 目 次

1.はじめに.....	151
2.調査概要.....	154
1) 調査の方法と経過.....	154
2) 基本層序.....	154
3) 検出遺構と出土遺物.....	156
3.まとめ.....	158

XII 東郷遺跡第39次調査 (T G 92-39)

1. はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画では八尾市本町1・7丁目・東本町1~5丁目・北本町2丁目・光町1・2丁目・桜ヶ丘1~4丁目・莊内町1・2丁目一帯に所在する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

当遺跡の周辺には南東に小阪合遺跡、南西に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、東に萱振遺跡が

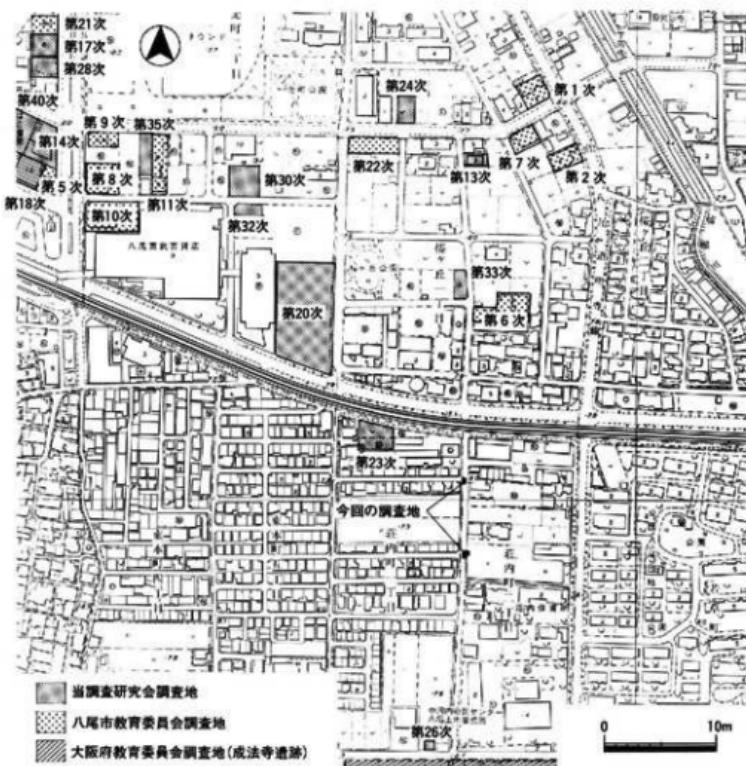
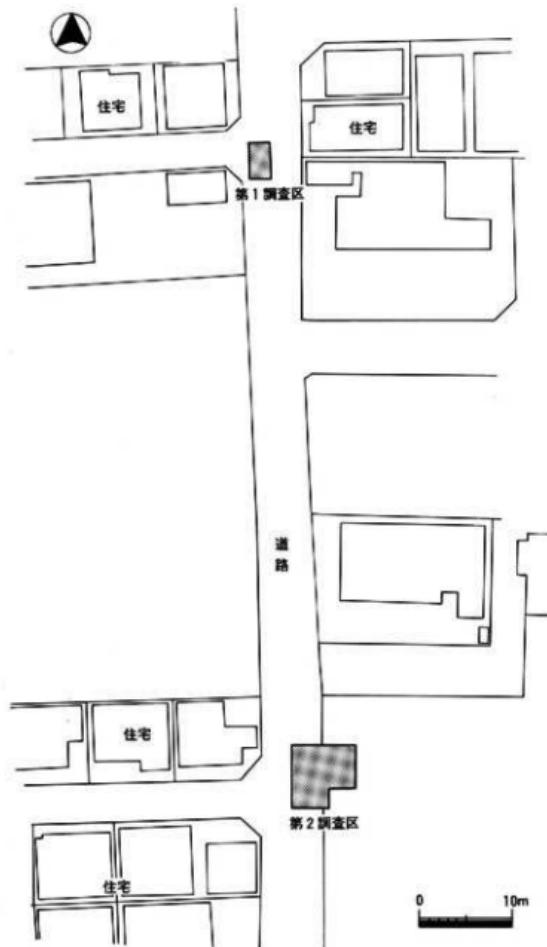


図1 図 調査地位図及び周辺図

存在している。今回の調査地の周辺では古墳時代前期の集落遺構が検出されている第23次調査（T G 86-23）・第26次調査（T G 88-26）が隣接している（第1図）。なお、これらの既往調査については第1表に掲載した。



第2図 調査区位置図

第1表 東郷遺跡発掘調査一覧表

番号	調査所在地	調査年度	調査期間	調査班別	主な出土品	出土物数	担当	報告書
1. TGR-1	佐久市 3丁目8-1, 8-9	昭和56年	1月10日～1月21日	考古付共同 会社	古墳小形土器、平安中期～作丸2・丸刀1、 骨筒・土器等	15	高橋 八丈研究会1	
2. TGR-2	越ヶ丘 3丁目7-1, 8-1	昭和56年	4月15日		古墳中型土器2枚・平安中期丸2・小穴1	2	高橋 八丈研究会2	
3. TGR-3	光町 1丁目69-2 黄七A	昭和56年	4月19日～4月15日		古墳小形土器2枚・平安中期丸2	2	高橋 八丈研究会3	
4. TGR-4	北木町 3丁目14 黄七B	昭和56年	4月15日		古墳中型土器3枚・平安中期丸2・小穴1 （火打付）（鉢・筒形）	2	高橋 八丈研究会4	
5. TGR-5	光町 1丁目88 黄七C	昭和56年	6月8日～7月7日		古墳中型土器4枚・平安中期丸2・小穴1 （火打付）	5	高橋 八丈研究会5	
6. TGR-6	板ヶ丘 3丁目9 社会問題 研究会	昭和56年	5月25日		古墳中型土器2枚・平安中期丸2・小穴2 （火打付）	5	高橋 八丈研究会6	
7. TGR-7	板ヶ丘 3丁目9 佐佐 木	昭和56年	6月21日		古墳小形土器2枚・平安中期丸2・小穴2	20	坪部 八丈研究会7	
8. TGR-8	光町 2丁目106 黄七D	昭和56年	6月15日～7月4日		古墳小形土器2枚・平安中期丸2・小穴1 （火打付）	2	高橋 八丈研究会8	
9. TGR-9	光町 1丁目47 黄七E	昭和56年	6月12日～6月24日		古墳中型土器4枚・平安中期丸2・小穴1 （火打付）	5	高橋 八丈研究会9	
10. TGR-10	光町 2丁目17 黄七F	昭和56年	7月1日～7月1日		古墳中型土器2枚・平安中期丸2・小穴1 （火打付）	3	高橋 八丈研究会10	
11. TGR-11	光町 2丁目9 川向先住	昭和57年	6月4日～6月10日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4・ 片内式土器1 （火打付）	3	高橋 八丈研究会11	
12. TGR-12	北木町 3丁目13 黄七G	昭和57年	6月5日～6月5日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	10	高橋 八丈研究会12	
13. TGR-13	板ヶ丘 3丁目8-1, 2-1, 3-1, 3-2, 4-1, 4-2	昭和57年	6月27日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	10	高橋 八丈研究会13	
14. TGR-14	板ヶ丘 3丁目8-2, 3-2, 4-2, 5-2, 6-2, 7-2, 8-2	昭和57年	6月28日～7月2日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	10	高橋 八丈研究会14	
15. TGR-15	光町 1丁目22 店舗	昭和57年	6月24日～7月4日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴2・ 片内式土器1 （火打付）	15	高橋 八丈研究会15	
16. TGR-16	光町 1丁目25 倉庫	昭和57年	6月25日～7月1日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴2 （火打付）	3	高橋 八丈研究会16	
17. TGR-17	光町 1丁目132 黄七H	昭和57年	6月29日～7月5日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	3	高橋 八丈研究会17	
18. TGR-18	北木町 2丁目34 店舗付住宅	昭和57年	6月30日～7月1日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	25	高橋 八丈研究会18	
19. TGR-19	光町 2丁目25-1 黄七I	昭和57年	6月30日～7月1日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	5	高橋 八丈研究会19	
20. TGR-20	光町 1丁目46 文化会館	昭和57年	10月28日～11月1日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	5	高橋 八丈研究会20	
21. TGR-21	光町 1丁目43-4 旅館	昭和57年	10月28日～10月28日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	3	高橋 八丈研究会21	
22. TGR-22	板ヶ丘 1丁目25 施設	昭和57年	11月1日～11月2日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	5	高橋 八丈研究会22	
23. TGR-23	光町 1丁目3 井戸	昭和57年	11月2日～11月3日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	12	高橋 八丈研究会23	
24. TGR-24	光町 3丁目18 大廻周防	昭和57年	11月4日～11月5日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	10	高橋 八丈文化財 活用委員会12	
25. TGR-25	光町 1丁目46 佐川便益	昭和57年	10月28日～10月28日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	5	高橋 八丈研究会25	
26. TGR-26	光町 1丁目43-4 旅館	昭和57年	11月1日～11月1日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	3	高橋 八丈文化財 活用委員会13	
27. TGR-27	光町 1丁目25 施設	昭和57年	11月2日～11月3日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	4	高橋 八丈文化財 活用委員会15	
28. TGR-28	光町 1丁目25-1 佐川便益	昭和57年	11月2日～11月3日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	10	高橋 八丈研究会24	
29. TGR-29	光町 1丁目28-1 佐川便益	昭和57年	11月3日～11月4日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	5	高橋 八丈研究会25	
30. TGR-30	本町 2丁目89-1 黄七J	昭和57年	11月4日～11月4日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	7	高橋 八丈研究会26	
31. TGR-31	光町 1丁目62 事務所ビル	昭和57年	11月5日～11月7日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	4	高橋 八丈研究会27	
32. TGR-32	光町 2丁目39 旅館付宿	昭和57年	11月9日～11月10日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	1	高橋 八丈研究会28	
33. TGR-33	板ヶ丘 1丁目39 旅館付宿	昭和57年	11月5日～11月6日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	12	高橋 八丈研究会29	
34. TGR-34	本町 2丁目89-1 佐川便益	昭和57年	11月6日～11月7日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	4	高橋 八丈研究会30	
35. TGR-35	光町 2丁目39 旅館付宿	昭和57年	11月7日～11月8日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	2	高橋 八丈研究会31	
36. TGR-36	光町 1丁目79 事業者 施設	昭和57年	11月3日～11月5日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	6	高橋 八丈研究会32	
37. TGR-37	本町 1丁目11 旅館	昭和57年	11月6日～11月7日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	7	高橋 八丈研究会33	
38. TG91-38	光町 2丁目5 公共施設内	昭和58年	2月19日～2月20日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	1	高橋 八丈研究会34	
39. TG95-39	舟内 2丁目5 地下 公共下水道	昭和58年	10月26日～10月27日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	1	高橋 本町報告	
40. TG99-40	光町 1丁目51 旅館	昭和58年	6月23日～6月25日		古墳中型土器6枚・平安中期丸2・小穴4 （火打付）	7	高橋 -	

2. 調査の概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道第93工区工事に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成4年10月29日～11月7日である。調査面積は50m²を測る。今回の調査は当遺跡で実施した第39次調査(TG92-39)である。

調査区は道路面下の下水道工事の立坑部分2ヶ所で、北部の到達立坑(面積10m²)を第1調査区、南部の発進立坑(面積40m²)を第2調査区とした(第2図)。掘削は現地表下約1.0mまでを機械でを行い、以下0.3mの土層については人力掘削を実施した。さらに、現地表下5.3mまでの土層については機械及び人力掘削の併用で行った。調査地は当遺跡の東部にあたり、第23次調査地(TG86-23)の南東部へ約70mの地点に第1調査区、約140mの地点に第2調査区がある。また、第2調査区から南部へ約170mの地点には第26次(TG88-26)の調査地がある。これらの発掘調査では古墳時代前期の集落遺構が検出されている。

2) 基本層序

基本層序は、第3図に示すとおりである。調査区の現地表面は標高8.3m前後を測る。

第1層 盛土・擾乱(旧耕土・床土)(層厚0.6~1.0cm)。道路下であり、アスファルト・プラス及び公共施設の埋設工事で埋めた土である。第2調査区の東部で旧耕土・床土を確認しただけである。

第2層 淡灰茶色砂混じりシルト(層厚5~25cm)。中世の耕作土と考えられる。上器の小片がごく少量含まれている。

第3層 明茶褐色粘質シルト(層厚5~10cm)。第2調査区では第2層により削平されており、この土層はない。

第4層 暗灰色シルト混粘土(層厚5~10cm)。古墳時代前期の包含層である。第2調査区では第2層により削平されており、この土層はない。

第5層 淡灰褐色粘質土(層厚10~20cm)。古墳時代前期の遺構面である。標高は第1調査区で6.9m、第2調査区で標高7.1m前後である。

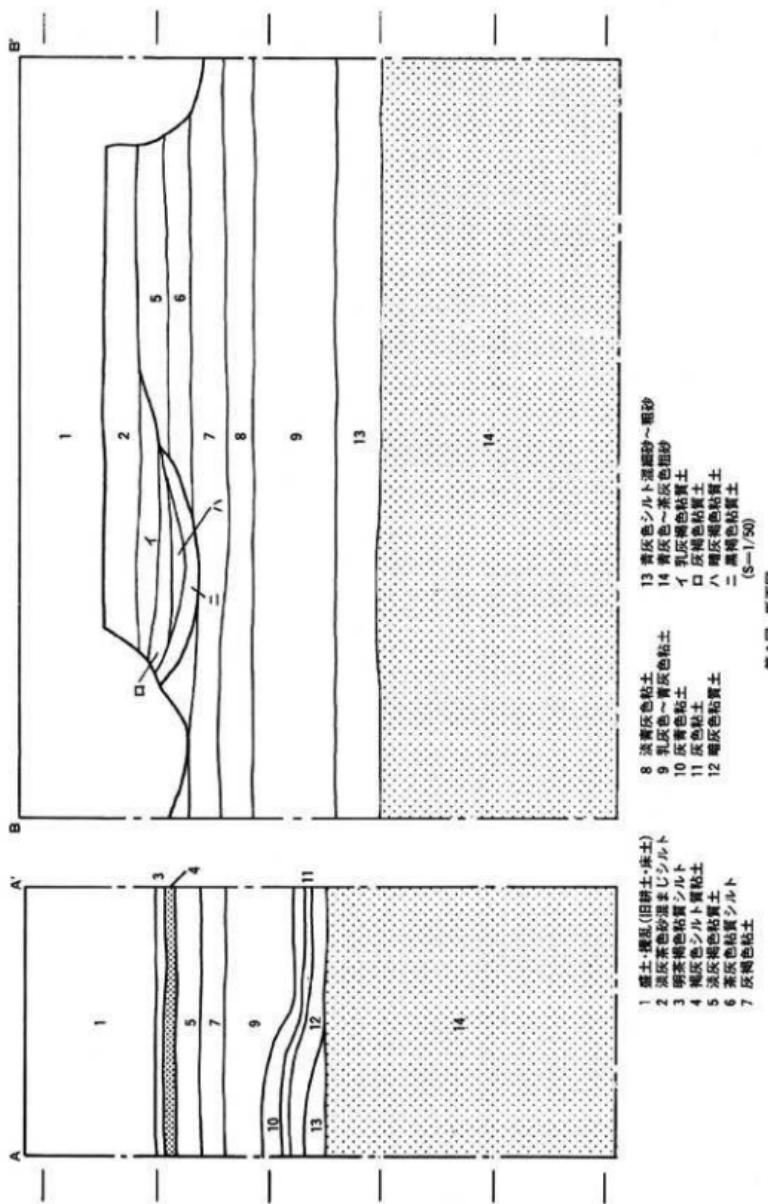
第6層 茶灰色粘質シルト(層厚10~20cm)。酸化鉄の斑点がある。第1調査区にはない。

第7層 灰褐色粘土(層厚20~30cm)。

第8層 淡青灰色粘土(層厚20~40cm)。第1調査区にはみられない。

第9層 乳灰色~灰青色粘土(層厚30~70cm)。粘性の強い粘土である。

第10層 灰青色粘土(層厚5~10cm)。第2調査区にはみられない。



- 第11層 灰色粘土（層厚5~10cm）。第2調査区にはみられない。
- 第12層 暗灰色粘質土（層厚15cm）。炭化物を少量含む土層で、第2調査区にはみられない。
- 第13層 青灰色シルト混細沙~粗砂（層厚0~15cm）。植物遺体が少量含まれている。
- 第14層 青灰色~茶灰色粗砂（層厚200cm以上）。弥生時代中期末以前の自然河川の堆積層とみられる。層厚を確認することができなかった。

3) 検出遺構と出土遺物

・第1調査区

4×2.4mの（到達）立坑である。現地表下約1.2m（標高7.2m）まで攪乱されていた。その下から古墳時代前期の包含層（第4層）を検出した。包含層を掘り下げ、第5層上面を精査したが、遺構はなかった。その下、現地表下約2.5m（標高5.8m）の第12層には炭化物が含まれていることから遺構・遺物の有無を確認した結果、遺構・遺物はなかった。さらに下層の掘削を実施したが、標高5.5mから3.0m以下には粗砂（第14層）が厚く堆積していた。調査では粗砂層の底までを確認することができなかった。この粗砂層の堆積状況は非常に大きな河川跡と考えられる。遺物は出土しなかったが、層位的にみて弥生時代中期末以前のものと思われる。

・第2調査区

6.8×6.8mで南東部が窪んだL字形の（発進）立坑である。西部はNTTケーブルの埋設と水道管の埋設で攪乱されており、不明である。東部の一部（道路外）で免れた所で調査した結果、現地表下約1.2m（標高7.1m）前後で古墳時代前期の溝1条（SD-1）を検出した。下層では第1調査区で検出した第10層～第12層の堆積土はなかったが第9層の粘土が厚く堆積していた。第14層は第1調査区と同様の河川跡の堆積と考えられる。この調査区でも河川跡の底は確認することができなかった。

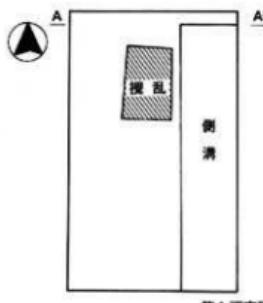
溝（SD）

SD-1

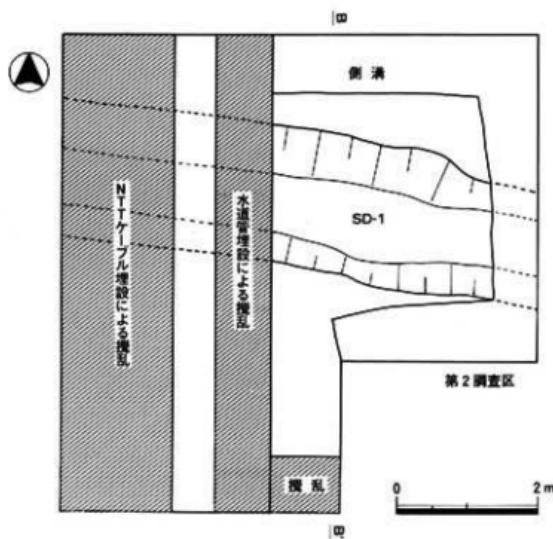
調査区北部で検出した。方向は東西方向を示す。規模は検出長6.8m、幅2.0m、深さ0.3mを測る。断面形は浅い半円形を呈する。堆積土は上から乳灰褐色粘質土・灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土・黒褐色粘質土でレンズ状に堆積し、下層では植物遺体が沈殿した土層と考えられ、水の流れのない溝と想定される。遺物は、溝底で古墳時代前期（布留式古棺）に比定される小型丸底壺1点（1）が完形に近い状態で出土した（第4図）。他には鉢・甕の小片がごく少量出土している。



第4図 SD-1出土遺物
実測図(S=1/4)



第1調査区



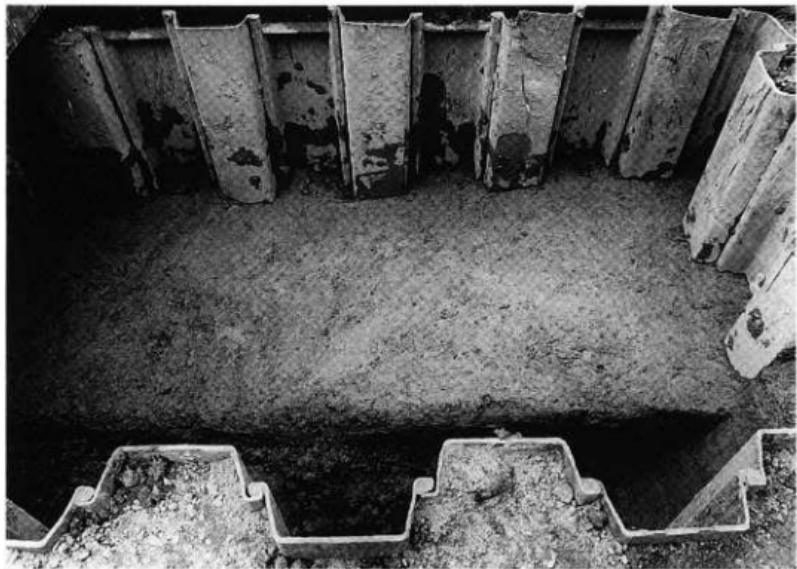
第5図 遺構平面図

3. まとめ

今回の発掘調査は、小面積ではあったが中世の土層及び古墳時代前期の包含層・遺構を検出することができた。第1調査区では、遺構はなかったが遺物包含層が確認され、北西約70m地点の第23次調査地（T G86-23）で検出した古墳時代前期の遺構面が南東部へ広がっていることがわかった。この調査では小面積であったことを考慮に入れても、第23次調査の包含層内の出土遺物量に比べ少ない。これはこの調査区が集落域からややはざれにあたることが考えられる。また第1調査区より南へ約70mの所にある第2調査区では古墳時代前期（布留式古柏）の溝が検出された。この溝は検出長約6.8mの東西方向に伸びるものであるが堆積状況からみて方形周溝墓の可能性も考えられ、墓域の存在が想定される。今後、この周辺で発掘調査を行う際には慎重な調査が必要であろう。

参考文献

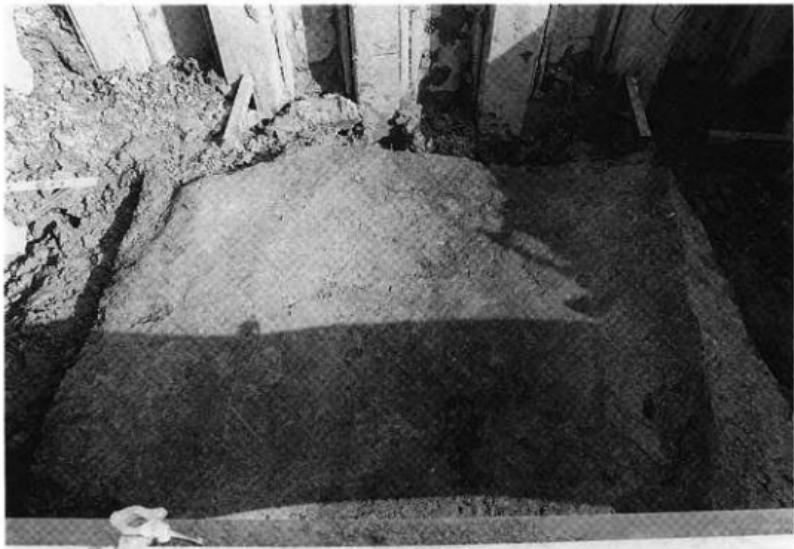
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」—その成果と概要— 1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度」(財)八尾市文化財調査研究会3 1984
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告6 1985
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和59年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和60年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告9 1986
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告13 1987
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和61年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告14 1987
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16 1988
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告17 1989
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財調査概要 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告22 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年」(財)八尾市文化財調査研究会報告25 1989
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告28 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡」—第23次・第24次発掘調査報告—(財)八尾市文化財調査研究会報告29* 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告 1991
- (財)八尾市文化財調査研究会「平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992



第1調査面全景（東から）



第2調査区 下層確認（北から）



第2調査区 SD-1 (西から)



第2調査区 下層確認 (東から)

第三回

XIII 久宝寺遺跡第15次調査 (K H 92-15)

久宝寺遺跡第15次調査報告書 (K H 92-15) は、本年度の調査報告書のうち最も重要な報告書である。本報告書は、久宝寺遺跡の歴史的・文化的意義を明らかにするために、多くの調査が実施された結果をまとめたものである。本報告書は、久宝寺遺跡の歴史的・文化的意義を明らかにするために、多くの調査が実施された結果をまとめたものである。

第三回 文書

地	久宝寺遺跡
年	1992年
月	8月
日	15日
調査者	久宝寺遺跡調査委員会

例　　言

1. 本書は、八尾市西久宝寺町地内で実施した電らん管新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第15次調査（KH92-15）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第184号平成4年3月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年8月5日～9月3日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は83m²をはかる。
1. 本書に関わる業務は、岡田が担当した。

本　文　目　次

1. はじめに.....	161
2. 調査概要.....	162
1) 調査方法と経過.....	162
2) 検出遺構と出土遺物.....	162
3. まとめ.....	164

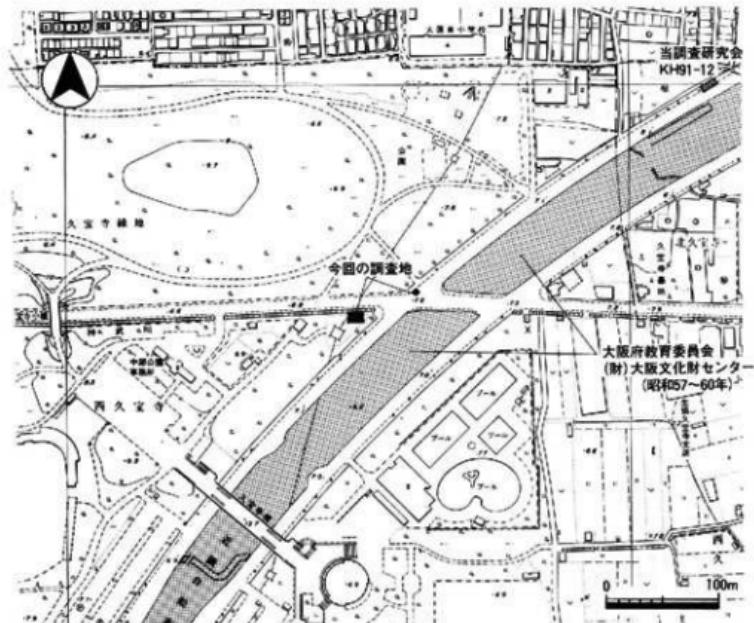
XIII 久宝寺遺跡第15次調査 (K H92-15)

1. はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川流域に開かれた沖積地で、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・龜井・北龜井・渋川町・跡部北の町がその範囲にあたり、さらには大阪市・東大阪市にまで広がる広範囲の遺跡である。本遺跡は绳文時代以降の各時代の遺構が重なる複合遺跡であり、とくに寺内町としてもよく知られている。

周辺の遺跡では北に弥刀遺跡（東大阪市）・佐堂遺跡・美國遺跡・宮町遺跡、南に跡部遺跡・龜井遺跡・竹瀬遺跡、西に加美遺跡（大阪市）、東に東郷遺跡・成法寺遺跡が隣接している。

本遺跡内では今までに当調査研究会が実施した14件の調査以外に、昭和56年度以降からの大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)大阪文化財センター・(財)東大阪市文化財協



第1圖 檢查地位置圖

会による発掘調査によって、縄文時代晩期から平安時代にいたる遺構・遺物が検出され、多大な成果をあげている。

今回の調査地は上述のなかでも、昭和57年度以降に大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センターにより実施された近畿自動車道建設に伴う調査地の北地区トレンチと南地区トレンチを跨ぐ中間地点の西側に位置する。

2. 調査概要

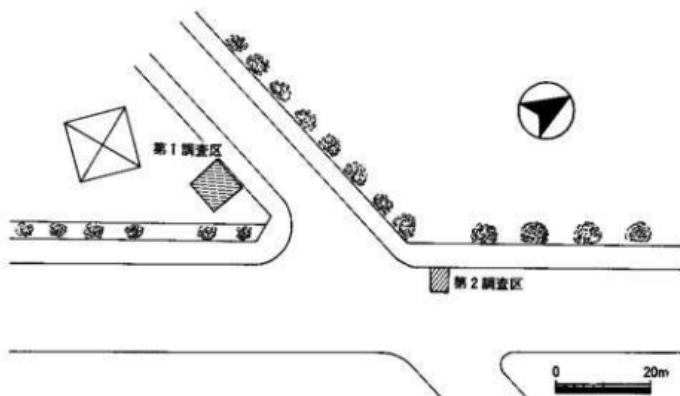
1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、電らん管新設工事に伴うもので、工事部分の発進立坑（8 m × 8 m）と到達立坑（4 m × 4 m）の2箇所を調査対象とし、発進立坑部分を第1調査区、到達立坑部分を第2調査区と呼称した。

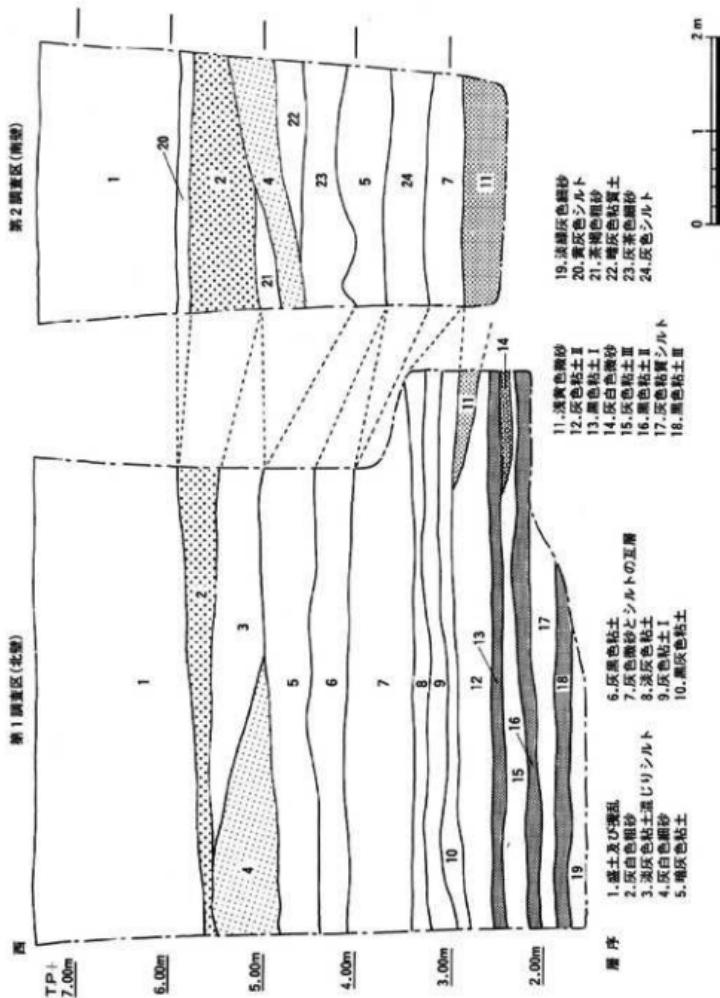
両調査区とも、現地表下2 m前後に堆積する盛土・擾乱・旧耕土部分を機械掘削した後、以下の工事対象部分にあたる3 m前後については層理に従い、機械と人力を併用しながら掘削・精査を実施した。第2調査区については、調査区周辺の交通事情等により、夜間に調査を実施した。

2) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、既述の近畿自動車道関連の調査結果と当調査地内の土層を対応させると、標高4.5 mから5.5 mの間にみられる砂層とシルトの互層は、弥生時代後期末から古墳時代初頭



第2図 調査区位置図



第3回 調査区断面図

にかけて幾度も河川の氾濫が繰り返されていた状況を示すものであり、古墳時代前期以降になって、比較的安定した土壤となったことを窺わせる。標高3.5mから4.5mにかけての灰色～黒色粘土層は、縄文時代晚期から弥生時代前期に比定される堆積層で、第1・第2調査区とも普遍的にみられる。また第1調査区においては第6層・第8層上面でその壁断面から水田を窺わせるような堆積状況がみられたが、平面的には確認できなかった。標高2.8mから3.5mにかけては各粘土層との間に微砂やシルトに加えて部分的に植物遺体が幾重にも堆積し、沼状を呈していたとも考えられる。標高1.8mから2.8mにかけて灰色粘土層と黒色粘土層の互層は、既述の近畿自動車道関連の調査結果から考えて縄文時代の遺構面が存在するところとおもわれるが、当調査地においては遺構・遺物は確認できなかった。

3.まとめ

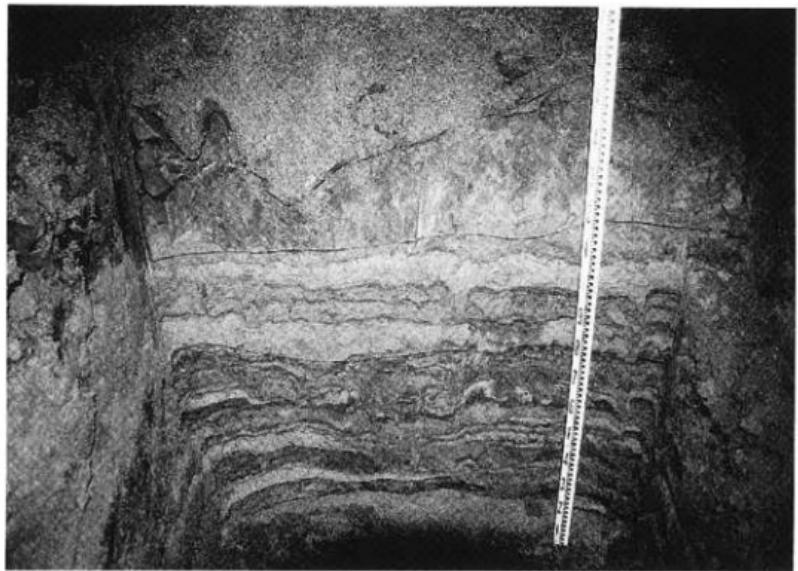
今回の調査区は、近畿自動車道に伴う調査に隣接することから、それらと関連性のある遺構・遺物が検出されると予想していたにもかかわらず、両調査区とも遺物片すらみられなかった。

しかし、調査全体を通じて既往の調査結果と層位的に検証しながら各時代を検討してきた結果、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて幾度となく繰り返されてきた河川の氾濫の広がりを確認することができた。弥生時代においては、壁断面から観察して少なくとも2時期にわたって水田が形成されていた様相が窺われる。また、平成3年度に今回の調査区から北東約300m地点で当調査研究会によって発掘調査されており、その結果、弥生時代後期～古墳時代前期に至る遺構・遺物を検出している。この調査資料からの土層堆積状況と今回の層位を対応させると、大まかではあるが古墳時代前期に関してレベル的に一致する部分がみられる。

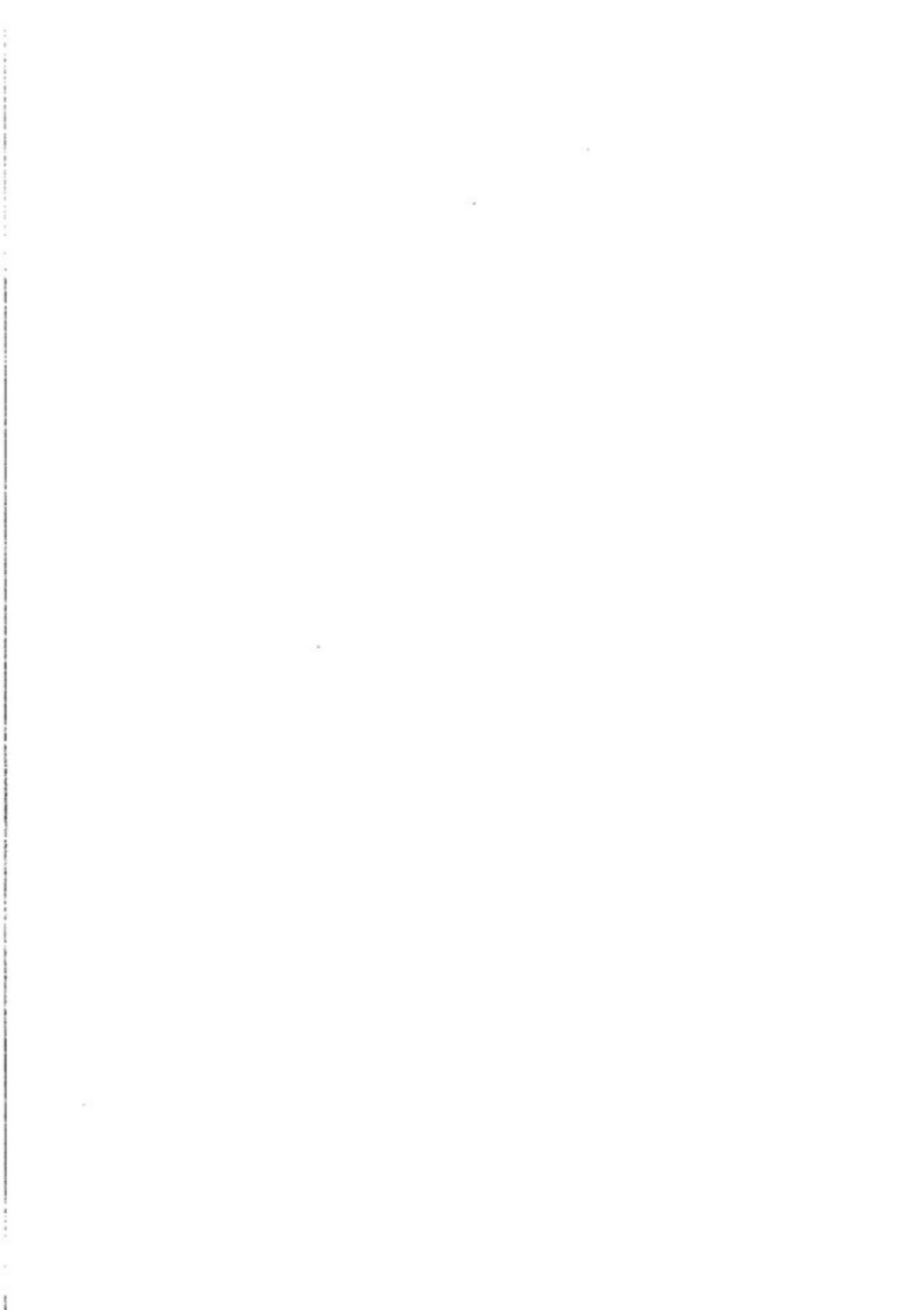
以上のことと既往の調査結果を考え合わせると、古墳時代前期以降は前述したように比較的安定した土地条件をもった集落域としての見方もでき、弥生時代においては当地は生産域であった可能性が高い。



第1調査区全景（西から）



第2調査区 南壁面（北から）



XIV 成法寺遺跡第9次調査（SH91-9）

例　　言

1. 本書は八尾市光南町1丁目2-23で実施したガソリンタンク埋設工事に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第9次調査（SH91-9）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第112号平成3年10月28日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が沼卯商事株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年10月29日から11月1日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は75m²を測る。なお、調査においては中西明美・垣内洋平・福島友香が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成5年8月31日に終了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物復元・実測一市森千恵子・西岡千恵子・千賀幸二 図面レイアウトトレースー中西明美・西村和子・西村公助が行った。
1. 本書の執筆・編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	167
2.調査概要	168
1) 調査方法と経過	168
2) 基本層序	168
3) 検出遺構と出土遺物	169
4) 出土遺物観察表	173
3.まとめ	175

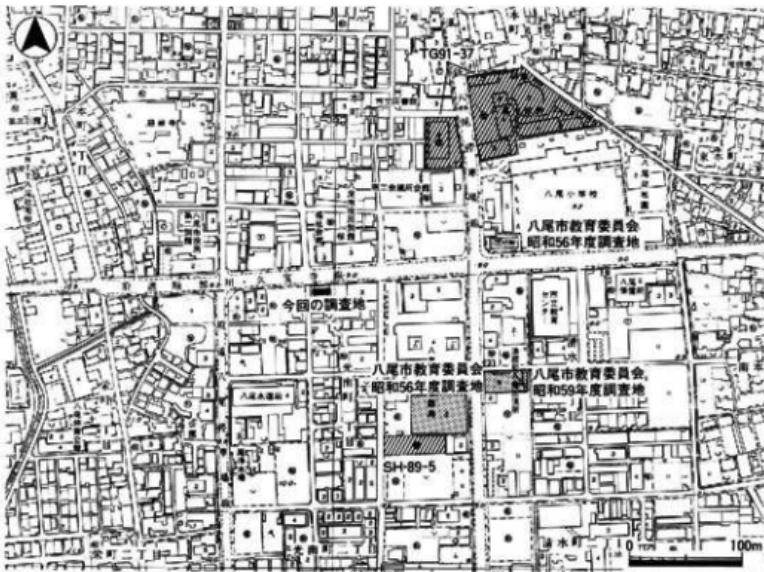
XV 成法寺遺跡 第9次調査 (SH91-9)

1 はじめに

成法寺遺跡は、河内平野の中を北または北西方向に流れている長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置している。現在の行政区画では、八尾市の光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園が当遺跡の範囲とされている。

当遺跡内では、当調査研究会が8件の調査を行っている他、大阪府教育委員会文化財保護課・八尾市教育委員会文化財室課により調査が実施されており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回調査を行った場所は、八尾市光南町1丁目2-23で、当調査研究会が行った第5次調査地の北西約150m地点にある。八尾市教育委員会文化財課が平成3年10月25日に実施した遺構確認調査で古墳時代の遺物が出土したことから、発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財課・財団法人八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成3年10月29日から11月1日で、調査面積は75m²を測る。



第1図 調査地周辺図

2 調査概要

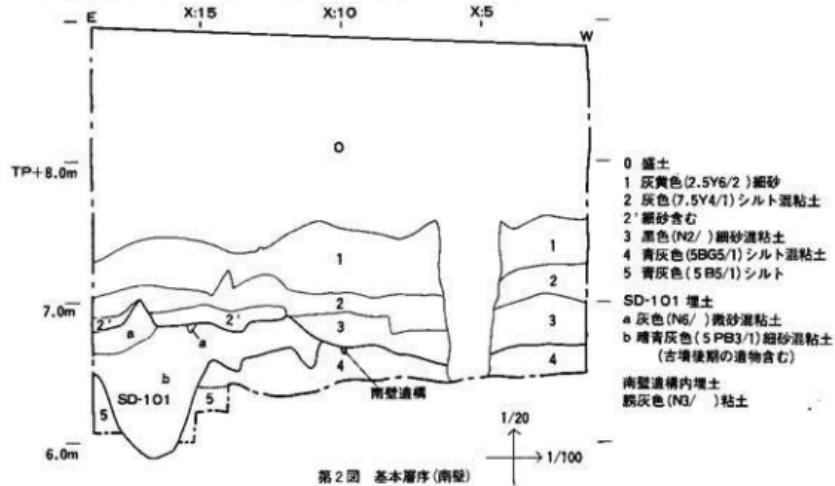
1) 調査方法と経過

今回の調査はガソリンタンク埋設に伴うもので、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第9次調査である。調査は埋設部分を対象に約75m²を行った。

調査では調査地の西側に基準の杭（任意）を打ち、そこから南に5m、北に5m、東に20mの範囲を地区割した。地区割には南西隅から東に5m毎にアラビア数字（1～4）・北に5m毎にアルファベット（a～b）を付した。1a・…・4bの範囲が今回の地区割である。地区割の南西隅にはX：0・Y：0を設け、その地点から東にX：0～X：20・北にY：0～Y：10を設定し、X・Yの交点を地点の名称とした。調査に当たっては、現地表下1.75m前後まで機械掘削を行い、以下0.3mについては人力掘削を行った。調査の結果、コンテナ箱8箱遺物が出土した。

2) 基本層序

第0層 盛土。	層厚 1.5m前後。
第1層 灰黄色(2.5Y 6/2)細砂。	層厚 0.4m。
第2層 灰色(7.5Y 4/1)シルト混粘土。	層厚 0.2m。
2' 細砂含む。	
第3層 黒色(N2/)細砂混粘土。	層厚 0.3m。
第4層 青灰色(SBG5/1)シルト粘土。	層厚 0.4m。
第5層 青灰色(SBG5/1)シルト。	層厚 0.4m以上。



3) 検出遺構と出土遺物

調査を実施した結果、現地表下約2.0m (TP+6.7m) 前後の第4層上面で古墳時代後期の遺構（溝1条）、弥生時代後期の遺構（土坑1基・小穴11個）、時期不明の遺構（小穴4個）を検出した。

土坑（SK）

SK-101

1a地区で検出した。平面の形状は梢円形で、東西幅0.7m・南北幅0.4m・深さ0.2mを測る。埋土は暗青灰色（5B3/1）粘土である。内部からは弥生時代後期の壺（1・2）・高杯（3）・甕（4～8）が出土している。

小穴（SP）

SP-101～SP-115

1～3a・b地区で検出した。平面の形状は、円形・梢円形である。径0.2～0.7m・深さ0.1～0.2mを測る。埋土は暗灰色（N3/）シルト混粘土で、SP-101内からは弥生時代後期の甕（11）が出土している。またSP-102～SP-108・SP-112～SP-114内からは同時期の遺物の破片が少量出土している。なお、SP-109～SP-111・SP-115内からは遺物の出土ではなく時期は不明である。

溝（SD）

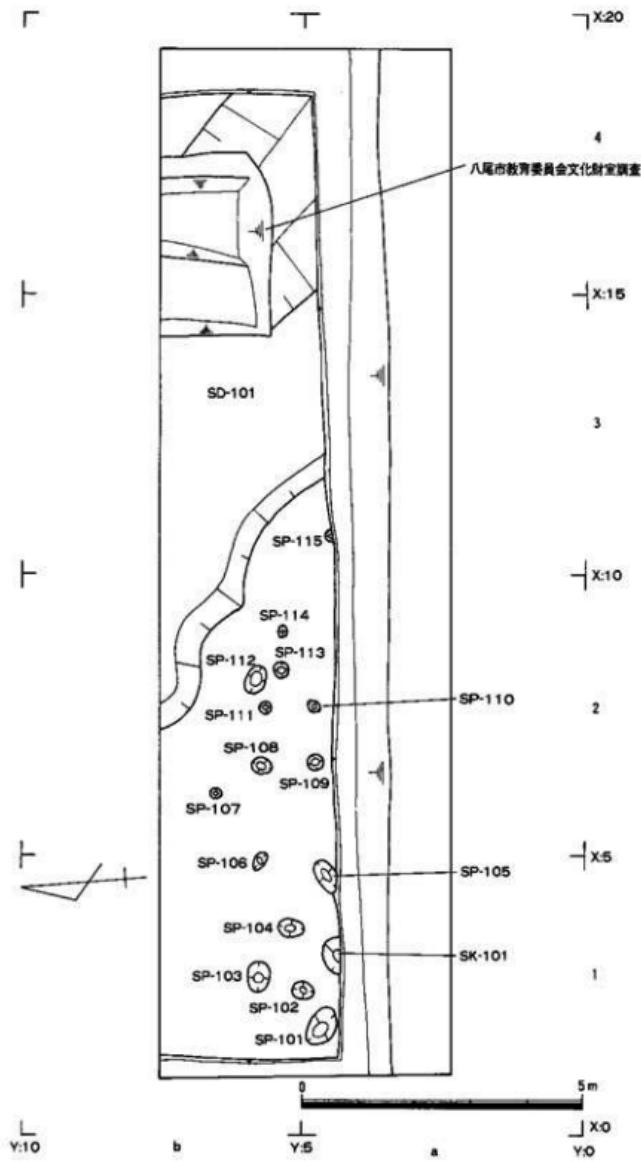
SD-101

2～4・a・b地区で検出した。南東から北西方向に伸びるもので、幅は溝の東肩が調査区外のため不明である。西肩から東に徐々に低くなり中央は急激に深くなっている。検出長5.5m・深さ1.1mを測る。埋土は上から灰色（N6/）微砂混粘土・暗青灰色（5PB 3/1）細砂混粘土である。暗青灰色（5PB 3/1）細砂混粘土からは古墳時代後期の土師器の杯（12）・須恵器の壺（13）・甕（14）・器台（15）・鉢（16）・蓋（17）・杯身（18～20）が出土している。6世紀前半頃のものと思われる。

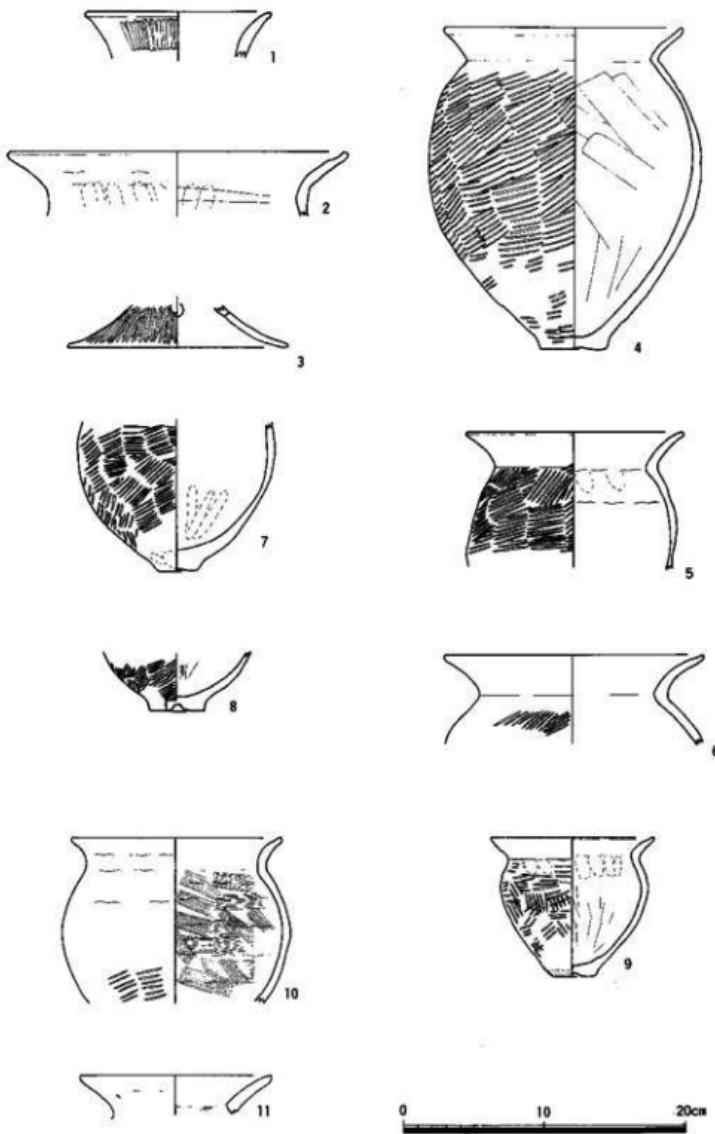
遺構に伴わない遺物

第2層内からは、須恵器の杯身（21）が出土しており、第3層内からは須恵器の蓋（22）・杯身（23）・古墳時代初頃〔庄内式期〕の甕（24）・弥生時代後期の壺（25）・高杯（26）・甕（27）が出土している。

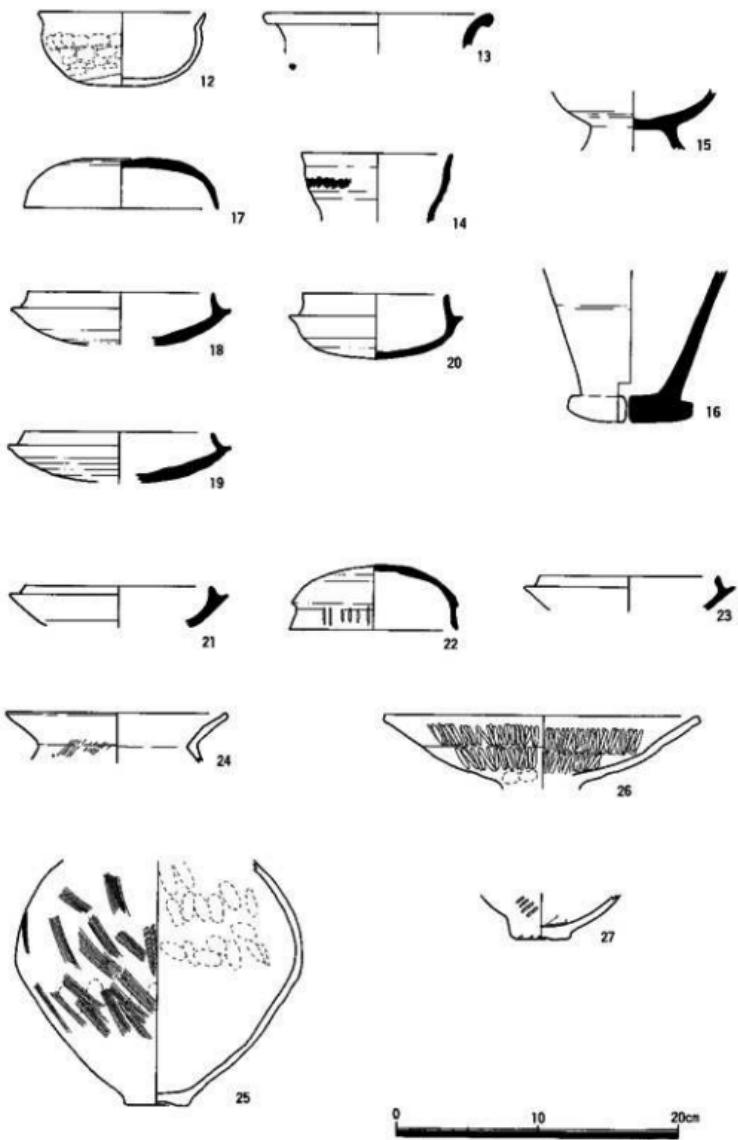
なお、平面的に遺構の検出はできなかったが、南壁では第4層上面から切り込む遺構の埋土〔暗灰色（N3/）粘土〕を確認した。内部からは弥生時代後期の甕（9・10）が出土している。



第3図 核出通橋平面図



第4図 出土遺物実測図



第5圖 出土遺物實測圖

4) 出土遺物観察表

遺物番号 回収番号	器種	法身 口桙 器高	調査	色	質	土	焼成	備考
SK-101								
1 弥生土器 壺		12.8	口縁部内面一横ナデ。外周一横ナデ後ハラミ ガキ。	淡茶灰色	0.4mm以下の 砂礫を多量に 含む	良好		
2 弥生土器 壺		23.6	口縁部内外面一横ナデ。内間にヘラナデ、外 周に指押え・粘土接合痕あり。	外面淡灰茶色 内面明茶色～ 乳白色	0.3mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好		
3 弥生土器 高杯	被覆	15.2	切底部内面一横ナデ、外周一ヘラミガキ、4方 向に孔あり。	淡茶灰色	0.3mm以下の 砂粒を少量含 む	良好		
4 弥生土器 壺		16.6 22.9	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ヘラナデ、 外周一タタキ目・黒斑あり。	外面明茶灰～ 明茶色 内面淡茶灰	0.4mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好		
5 弥生土器 壺		15.2	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ナデ、指 押え・粘土接合痕あり、外周一タタキ目。	外面淡灰茶色 内面淡茶色	0.5mm以下の 砂粒を少量含 む	良好		
6 弥生土器 壺		18.2	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ナデ、外 周一タタキ目。	淡茶褐色	0.4mm以下の 砂礫を多量に 含む	良好		
7 弥生土器 壺	底盤	2.5	体部内面一ナデ・指押えあり、外周一タタキ 目。底部外面一指押えあり。	外面耐候褐色 内面淡茶灰～ 明茶色	0.3mm以下の 砂粒を少量含 む	良好		
8 弥生土器 壺	底盤	2.0	体部内面一ヘラナデ、外周一タタキ目。底部 外面一指押えあり。	外面褐色系陶 色 内面明茶灰色	0.4mm以下の 砂礫を多量に 含む	良好		
南壁遺跡								
9 弥生土器 壺		12.4 9.9 2.9	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ヘラナデ。 指押えあり、外周一タタキ目・指押え・粘土 接合痕あり。底部外周一指押えあり。	淡黄茶色	0.4mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好		
10 弥生土器 壺		14.8	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ハケナデ、 外周一タタキ目・粘土接合痕あり。	乳茶色	0.5mm以下の 砂礫を多量に 含む	良好		
SP-101								
11 弥生土器 壺		13.6	口縁部内外面一横ナデ・納土接合痕あり。体 部内面一ハケナデ。	外面暗茶灰色 内面明茶灰褐色	0.4mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好		
SD-101								
12 上輪器 杯		11.6 5.7	口縁部内外面一横ナデ。体部内面一ナデ、外 周一ナデ・指押え・粘土接合痕あり。底部外 面ヘラケズリ。	外面淡茶灰色 内面淡黃茶色	0.2mm以下の 砂粒を微量に 含む	良好		
13 痢患器 壺		15.6	口縁部内外面一回転ナデ。	淡灰色	精良	良好		
14 痢患器 壺		10.4	口縁部内外面一回転ナデ。外周一波状文。	淡黑色	精良	良好		
15 痢患器 器台			体部内外面一回転ナデ。脚部内外面一回転ナ デ。	淡灰色	精良	良好		

遺物番号 国宝番号	器種	法量 口径 器高	調 整	色 調	監 土	焼成	備 考
16	須恵器 鉢	底径 9.1	体部内外面一同転ナダ。体部外面に沈線一条 あり。底部に孔あり。	青灰色	3.0mm以下の 砂粒を含む	良好	
17	須恵器 皿	13.6 3.5	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	淡灰色	精良	良好	
18	須恵器 杯	13.0	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	淡青灰色	精良	良好	
19	須恵器 杯	13.2	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	淡灰色	精良	良好	
20	須恵器 杯	10.5 4.6	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。粘土接合痕あり。	淡青灰色	精良	良好	

第2層包含層

21	須恵器 杯	13.0	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	外表面灰色 内面青灰色	2.0mm以下の 砂粒を含む	良好	
----	----------	------	---------------------------------------	----------------	-------------------	----	--

第3層包含層

22	須恵器 皿	11.8	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	青灰色	6.0mm以下の 砂粒(長石) を含む	良好	
23	須恵器 杯	12.6	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面一同転ナ ダ、外側一同転ヘラケズリ。	淡灰褐色	0.1mm以下の 砂粒を極少量 含む	良好	
24	七郎器 (庄内式期) 皿	15.4	口縁部内外面一同転ナダ。体部内面ヘラケズ リ、外側ハケナダ。	茶灰色	1.0mm以下の 砂粒を含む	良好	
25	弥生土器 皿	底径 20.2	体部内面ナダ、指押えあり、外側ハケナ ダ。	外表面灰茶色 内面暗黒色	0.4mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	
26	弥生土器 高杯	22.2	口縁部内外面ヘラミガキ。	外表面灰褐色 内面灰褐色	3.0mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	
27	弥生土器 皿	底径 4.2	体部外面タタキ目、内面ヘラナダ。	外表面灰褐色 内面灰褐色	1.0mm以下の 砂粒を少量含 む	良好	

3 まとめ

今回の調査では弥生時代後期と古墳時代後期の遺構が存在していることが確認された。

弥生時代後期

同時期の土坑（SK-101）からは多くの土器が出土しており、また建物を構成すると思われる小穴を11個検出していることから、当地に集落が存在していたことがわかった。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、溝1条である。溝内からは同時期の遺物が多く出土した。

この2時期の遺構は、八尾市教育委員会昭和56年度調査地（光南町1丁目29）や、当調査研究会が平成元年度に行った第5次調査（SH89-5）^{註1}でも検出していることから、これらの遺構と関連するものと思われる。

註記

註1 八尾市教育委員会 「成法寺遺跡」一八尾市光南町1丁目29番の調査 - 1983. 3

註2 (財)八尾市文化財調査研究会 「I 成法寺遺跡(第5次調査)」 平成4年度

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II) 八尾市文化財調査研究会報告 35



調査地周辺（西から）



遺構検出状況（西から）



4



5



16



17



18



19

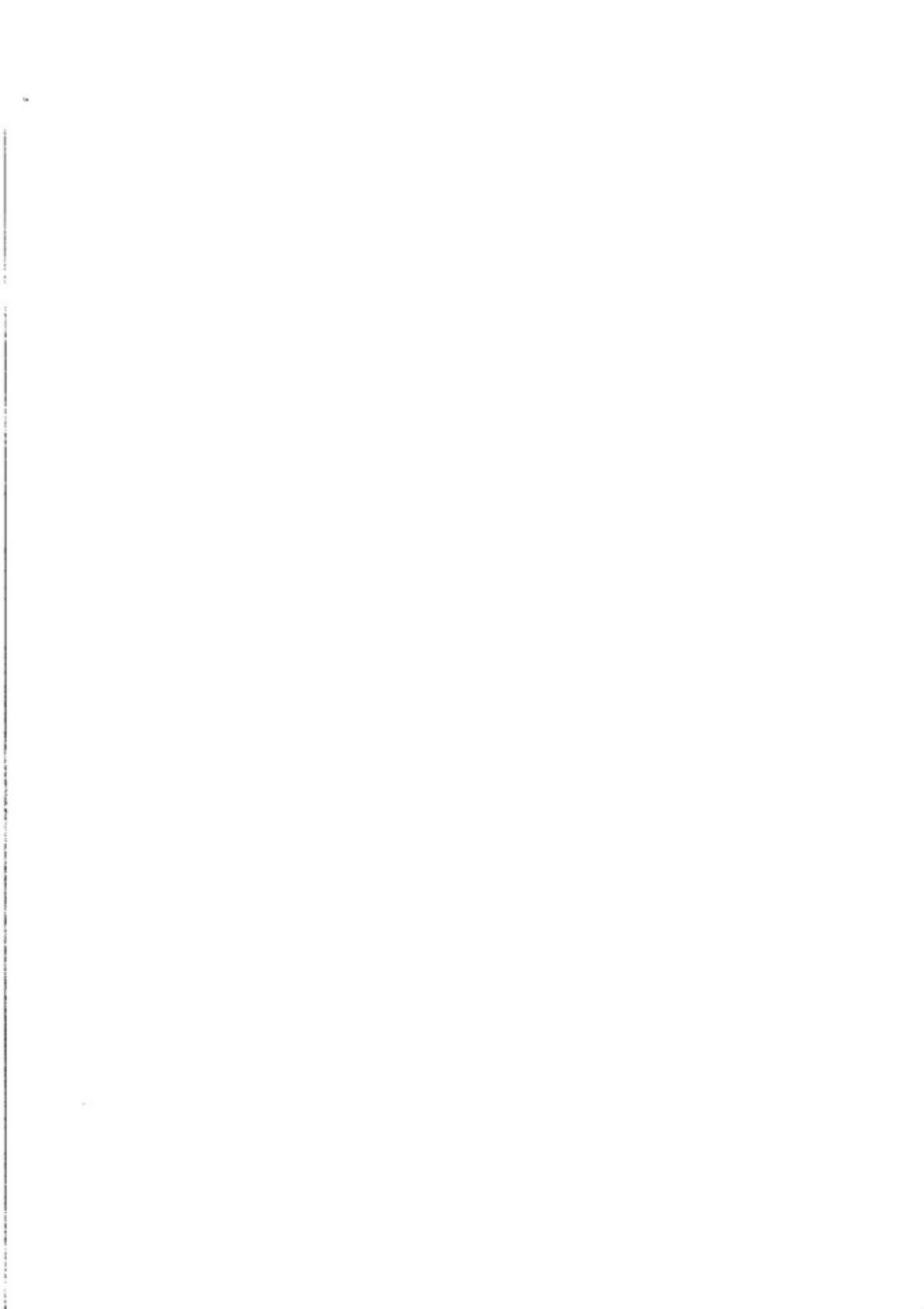


20



22

SK-101 (4・5), SD-101 (16~20), 造構に伴わない遺物 (22)



XV 竹渕遺跡第3次調査（TK92-3）

例　　言

1. 本書は、八尾市竹渕東3丁目80-3で実施した工場建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する竹渕遺跡第3次調査(TK92-3)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第90号平成4年8月28日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が友田技研工業株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年9月7日から平成4年9月26日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は約360m²を測る。なお、調査においては垣内洋平・福島友香が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一北原清子・沢村妙子、図面トレース一北原が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

1.はじめ	179
2.調査概要	180
1) 調査方法と経過	180
2) 基本層序	180
3) 検出遺構と出土遺物	181
4) 遺構に伴わない出土遺物	186
3.まとめ	189

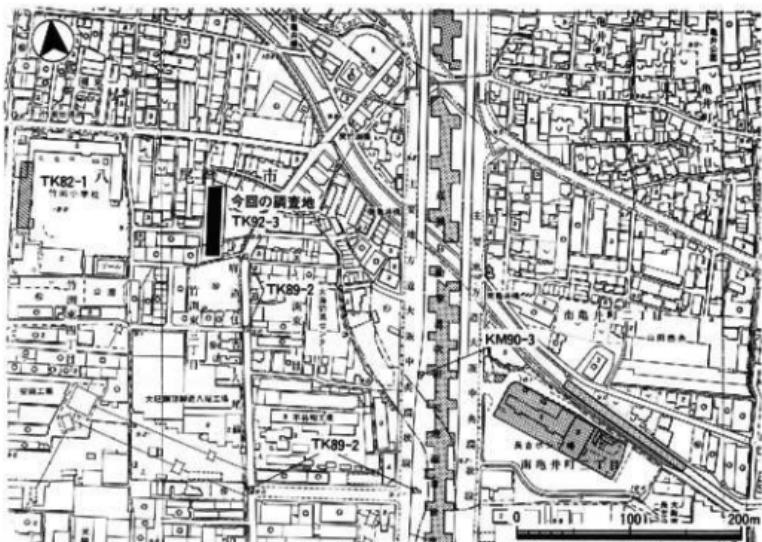
XV 竹渕遺跡 第3次調査 (TK92-3)

1 はじめに

竹渕遺跡は八尾市の西部に位置する遺跡で、現在の行政区画では竹渕、竹渕1～5丁目、竹渕東1～4丁目にあたり北側・南側・西側と東側の一部で大阪市と市域を接している。

地理的には平野川の左岸一帯に広がる低位沖積地にあたる。当遺跡の周辺は遺跡密度の高い地域で、東に龜井遺跡、南東に城山遺跡（大阪市）、北に加美北遺跡・加美遺跡（大阪市）が存在している。

当遺跡が遺跡として認識されたのは、昭和57年に市立竹渕小学校の校舎建て替え工事に伴う遺構確認調査で、古墳時代後期の遺構・遺物を検出したことによる。この結果を受けて当調査研究会が実施した第1次調査（TK82-1）では、古墳時代後期と江戸時代の遺構・遺物が検出されている。さらに、平成2年に竹渕東2丁目地内で実施した下水道工事に伴う第2次調査（TK89-2）では、弥生時代前期～中期の遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認されている。今回の調査地は第2次調査の2区から西に20m地点に位置している。



第1図 調査地周辺図

2 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は工場建設に伴うもので、建物の建築予定地に東西幅8m、南北幅45mの調査区を設定した。調査では、遺構確認調査結果から包含層までの深度が深く、さらに多量の涌水が予想されたため、法面の勾配を充分に取り、下幅で東西幅4m、南北幅41mの調査区を設定した。また、排土処理の関係から調査区を二分（北区・南区）する方法をとり、北区から調査を実施した。

掘削に際しては、地表下0.6~0.8m前後までは機械掘削を行った後、0.1m前後については人力掘削を実施した（北区・南区－第1面）。第1面の調査終了後、さらに、北区で1.3m、南区で0.7m前後については機械掘削を行い無遺物層を排除し、以下の土層については層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。

調査の結果、表土下0.9~1.1m（標高8.0~7.8m）に存在する第6層上面で平安時代前期に比定される上坑1基（SK-2）と近世末期に比定される井戸2基（SE-1・SE-2）を検出した（北区・南区－第1面）。さらに、北区では第1面から約1.3m（標高6.5~6.2m）下部で弥生時代前期～中期の遺物を包含する第14層および第15層上面を調査対象としたが、顕著な遺構は検出されなかった（北区－第2面）。南区では第1面から約0.8m（標高7.0m）下部で古墳時代後期初頭に比定される古墳1基（方墳1）を検出したため、調査区を一部拡張した結果、溝1条（SD-1）を検出した（南区－第2面）。さらに、古墳墳丘の築造状況と第14層および第15層上面における遺構・遺物を追求するため、墳丘内に東西・南北方向にトレンチを設定した結果、第15層上面（標高6.4m）で弥生時代前期の土坑状の遺構（SK-2）を検出した（南区－第3面）。遺物は遺構内および第5層・第12層～第14層からコンテナ箱に5箱程度出土した。

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚0.2~0.5m。上面の標高はT.P.+8.90m前後。

第1層 旧耕土。層厚0.1~0.2m。

第2層 7.5G Y7/1 明緑灰色細粒砂。床土。層厚0.1m。

第3層 5 Y8/3 淡黄色極細粒砂。層厚0.1~0.2m。

第4層 2.5Y8/4 淡黄色極細粒砂。層厚0.2~0.3m。

第5層 2.5Y7/1 灰白色粘質土。層厚0.1~0.4m。平安時代前期の遺物を少量含む。

第6層 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト。層厚0.2~0.4m。平安時代前期の遺構検出面。

第7層 10YR7/6 明黄褐色シルト。層厚0.15m。

第8層 5 Y7/4 浅黄色粘質シルト。層厚0.1m前後。

- 第9層 4.5G Y7/1 明緑灰色シルト～極細粒砂。層厚0.15m前後。
- 第10層 10B G7/1 明青灰色粘土。層厚0.2～0.3m。
- 第11層 10B G5/1 青灰色粘土。層厚0.1～0.4m。
- 第12層 2.5G Y4/1 暗オリーブ灰色中粒砂～小礫混粘質土。層厚0.15m前後。墳丘盛土。(上層)。弥生時代前期～中期、古墳時代後期初頭の遺物を少量含む。
- 第13層 10Y R3/1 黒褐色中粒砂～小礫混粘質土。層厚0.1～0.3m。墳丘盛土。(下層)。弥生前期～中期の遺物を含む。
- 第14層 N3/ 暗灰色細粒砂～中粒砂混粘質土。層厚0.3m前後。弥生時代前期～中期の遺物を含む。
- 第15層 5 Y3/1 オリーブ黒色粘質土。層厚0.5m。弥生時代前期の遺構検出面。
- 第16層 N8/ 灰白色細粒砂～小礫。層厚0.3m以上。河川内堆積土。調査区の中央部から北部で検出。
- 第17層 10B G4/1 暗青灰色粘土。層厚0.1～0.3m。
- 第18層 5 Y5/1 灰色粘土。層厚0.1m前後。
- 第19層 5 Y4/1 灰色中粒砂混粘土。層厚0.1～0.2m。北周溝内埋土。古墳時代後期の遺物を極少量含む。

3) 検出遺構と出土遺物

・北区、南区－第1面

土坑 (SK)

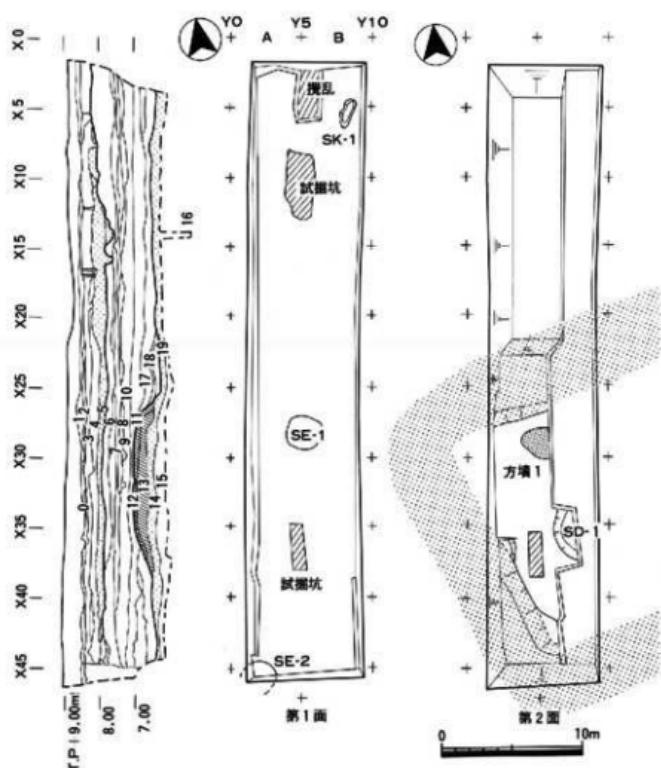
SK-1

1・2B区で検出した。上面の形状が南北方向に長い楕円形を呈するもので、南北幅2.1m、東西幅0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は淡褐灰色極細粒砂である。遺物は平安時代前期に比定される土師器・黒色土器の小破片が極少量出土している。

井戸 (SE)

SE-1

6A・B区で検出した。上面の形状が円形を呈するもので、東西幅2.2m、南北幅2.4mを測る。堀形の断面形状は概ねすり鉢状を呈するが、堀形上部の一部が内部にえぐられており袋状に広がっている。深さは1.5mまで確認したが、井戸側は検出されなかった。埋土は上層に淡青灰色細粒砂と黒灰色粘土の互層と褐灰色細～中粒砂が堆積するほか、以下は下部に至るまで第11層と第14層の瓦層である。遺物は近世末期に比定される瓦片のほか、弥生時代前期から中期の土器の小破片が少量出土している。なお、第6層上面で検出したが、本来の構築面は第2層上面である。形状からみて近世末期以降の農耕用の井戸と推定される。



第2図 掘出遺構平面図

SE-2

南区の南西隅で検出した。南部と西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部で東西幅1.6m、南北幅1.1mを測る。深さは1.7mまで確認したが、井戸筒は検出されなかった。埋土は第10層・第14層の互層である。遺物は近世末期に比定される煙管の吸口が1点出土している。SE-1と同様の性格を持つ井戸で構築面は第2層上面である。

・南区-第2面

方墳1

南区のほぼ全域で検出した。西部および東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、調査区の南東部で検出した方墳の南西コーナーおよび西辺と北辺からみて、一辺が約16m程度の方墳と推定される。方向は南北軸に対してN-9°-Wを示す。墳丘は弥生時代前期～中期の遺物包含層である第14層をベース面として、第12層・第13層が盛られており墳丘高は0.4～0.5mを測る。墳丘盛土からは、第14層と同様弥生時代前期～中期の遺物が出土していることから、第14層を削平して墳丘盛土としている。周溝は、北周溝の溝底が第14層の上部に達しており、幅4.5m、深さ0.15m前後を測るが、西周溝部分はほぼ水平で溝状を呈していない。なお、東壁で一部墳丘の上面が窪む地点がみられたため、東部に東西幅1.5m、南北幅4.5mを拡張した結果、溝1条(SD-1)を検出したのみで、主体部は検出されなかった。遺物は、墳丘の南西隅の9B区と墳丘北部の7A区の第12層と北周溝の第19層から須恵器杯身・杯蓋の小破片が数点出土している。そのうち、図化し得たものは須恵器杯蓋3点(1～3)である。出土位置は、(1・3)が墳丘上面、(2)が北周溝である。(1・2)は共に天井部下部から口縁部にかけての小片である。(3)は全体の約2分の1が残存するもので、天井部に灰かぶり・自然釉が見られるほか、焼成時に付着した陶片が2箇所に残存していた。

陶邑編年によるI-5～II-1

段階にあたるものと推定され、

6世紀初頭に位置付けられよう。

溝(SD-1)

SD-1



第3図 方墳1出土遺物

墳丘上の拡張区(7・8B区)で検出した。方墳1の墳丘上面の盛土である第12層を切っている。検出した部分は溝の屈曲部で、東肩は調査区外に至るため不明である。検出した部分で幅1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

・南区-第3面

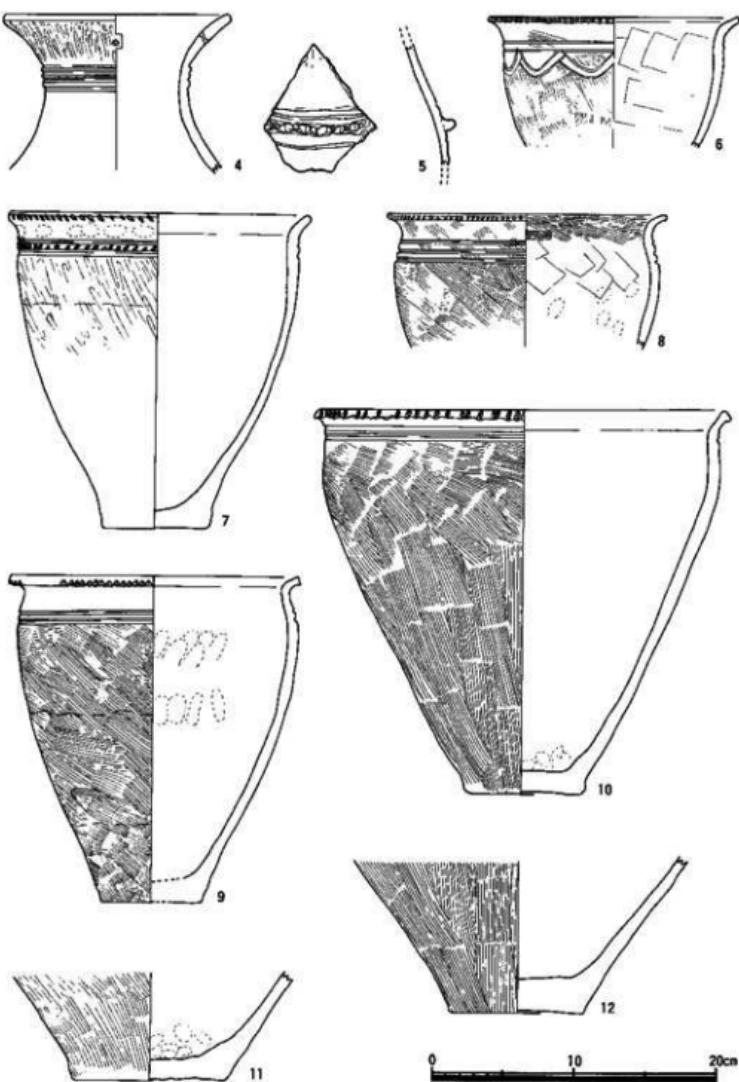
方墳1の墳丘盛土の状況と北区の第2面で確認した弥生時代前期～中期の遺物包含層である

第14層を調査対象として、東壁と西壁に沿った地点と墳丘中央部を横断するトレンチを設定した。その結果、第15層を構築面とする弥生時代前期の土坑1基（SK-2）を検出した。

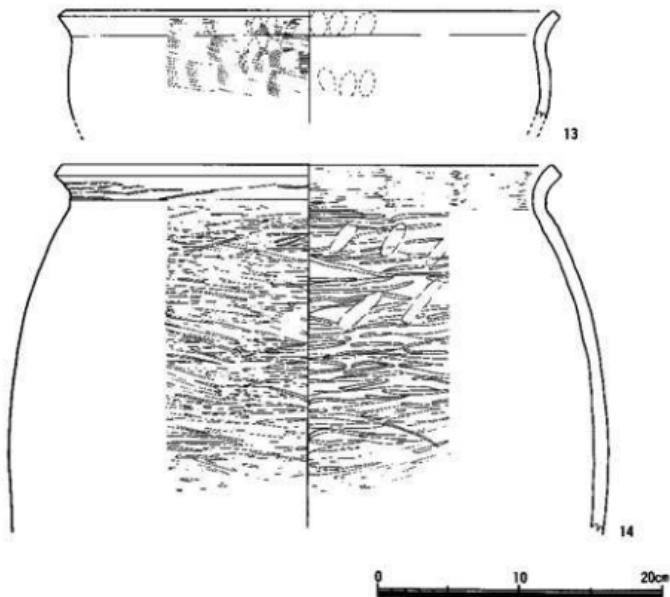
土坑（SK）

SK-2

7区南部（X33・Y3地点）で検出した。ただ、幅1m程度のトレンチ内で検出したことや、さらには湧水が多大なこともあります。遺構の全容をつかむまでに至らなかったが、検出部分では円形を呈し、径約1m、深さ0.3m前後の規模を測った。埋土は炭・灰を多量に含んだ黒灰色砂質土である。内部から弥生時代前期に比定される遺物がコンテナ1箱程度出土している。出土した遺物は土器類が主で、そのほか焼土塊や発泡した土塊が多量出土したほか、サヌカイト片1点が出土している。そのうち、図化したものは11点（4～14）である。内訳は壺2点（4・5）、甕9点（6～14）である。（4）は広口壺で頸部で削出突帯上に2本のヘラ描沈線文を巡らしている。口縁部に径5mmの紐孔1個が穿がたれている。色調は乳灰色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。（5）は広口壺の胴部の資料で、2本の沈線間に貼付け突帯が付く。色調は明橙色で、胎土には長石・石英・チャートが散見される。（6）は甕で口縁端部に刻目、頸部に2本の沈線と迷彌文を施す。色調は褐色～暗黒灰色で、胎土には長石・石英・チャートが多量に含まれている。（7）は甕で口径21cm、器高22.3cm、底径7cmを測る。全体が倒鐘形を呈するもので、口縁部は上外方に屈曲する。文様は、口縁端部に刻目、頸部には2本の沈線間に豆粒文を施す。胎土は粗く2mm大の長石・石英が多量に含まれている。色調は上半が灰白色、下半が明橙色、内面が乳灰色である。（8）は口縁部が水平に折れ曲がる甕で、口縁端部に刻目、頸部に3条の沈線を施す。色調は外面が淡橙色、内面が黒灰色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。（9）は甕で、口径20.4cm、器高23.2cm、底径7.1cmを測る。全体が倒鐘形を呈するもので、口縁部は屈曲外反し端部は平坦な面を有する。文様は口縁端部に刻目、頸部外面に2本の沈線を施す。色調は褐色で、胎土には長石・石英・チャートが散見される。（10）は倒鐘形を呈するもので、口径28.5cm、器高27.3cm、底径8.4cmを測る。文様は口縁端部に刻目、頸部にやや太めの沈線を2本施す。色調は橙色～淡褐色で、胎土には長石・石英・チャート・螢母が多量に含まれている。底部内面に炭化物が付着している。（11・12）は甕の底部で、外面にハケナデが施されている。（13）は口縁部が緩やかに外反する甕で、口縁端部は平坦面を持って終わる。外面に横方向のハケナデを施す。色調は淡橙色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。（14）は口縁部の形態が（13）に似た大型の甕である。胴部内外面共に横方向のヘラナデ調整が行われている。色調は内面が黒灰色である。胎土には長石・石英が多量に含まれている。



第4図 SK-2 出土遺物(1)

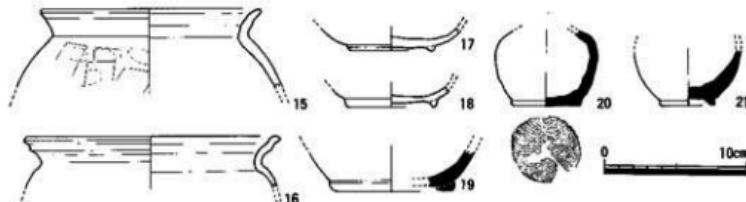


第5図 SK-2 出土遺物(2)

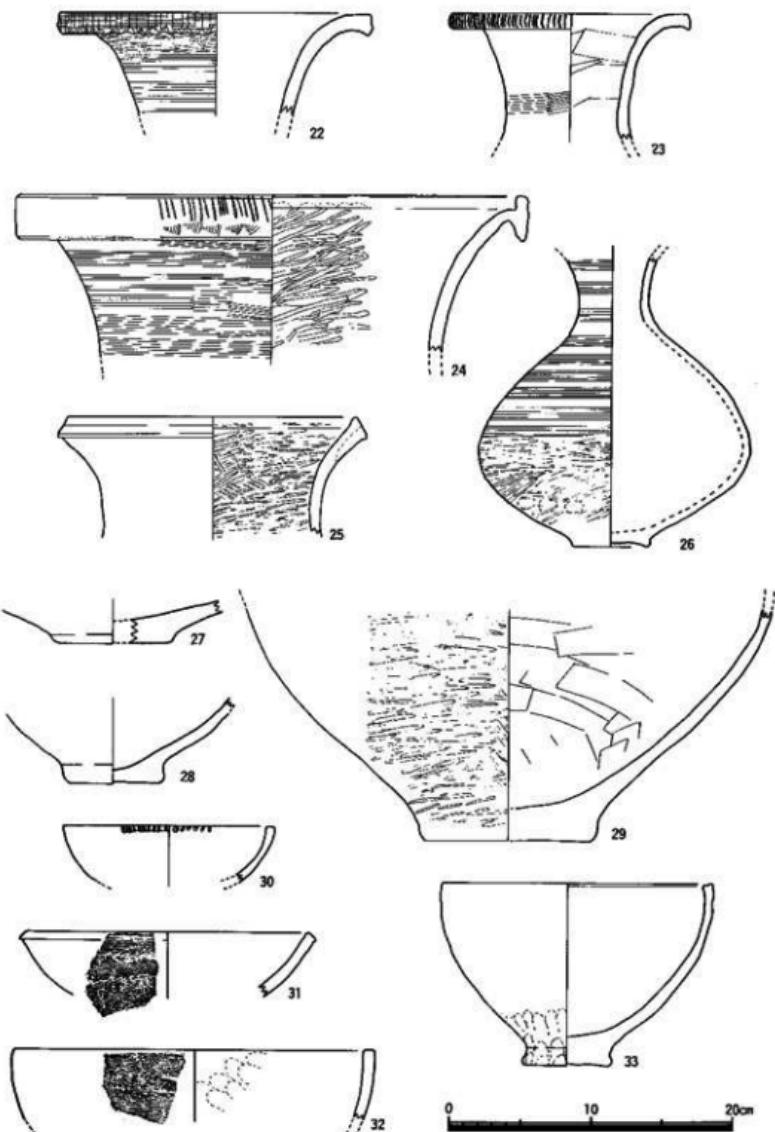
4) 遺構に伴わない出土遺物

・第5層出土遺物

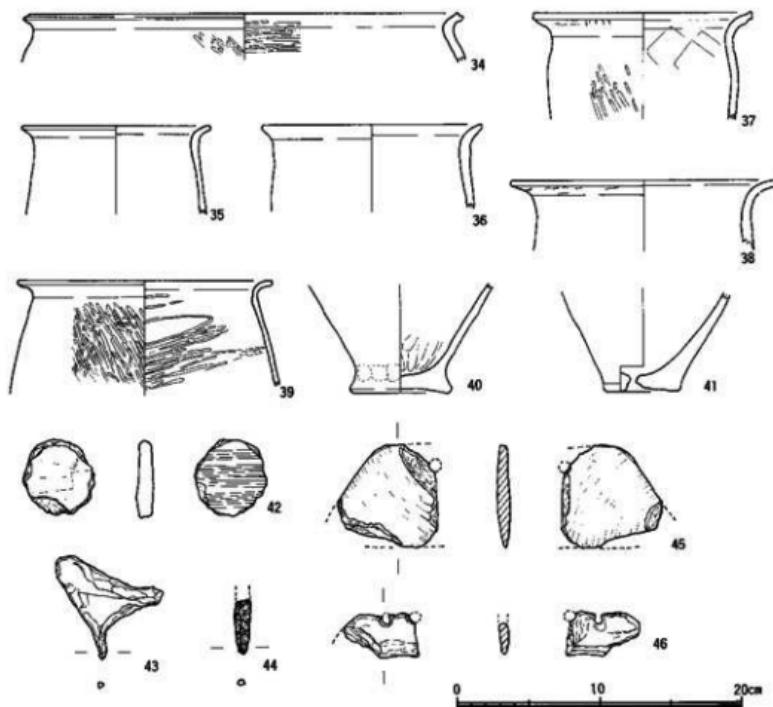
第5層からは平安時代前期を中心とした遺物が少量出土したが、その大半が小破片であった。そのうち、図化し得たものは7点(15~21)である。(15・16)は土師器壺である。(15)は口縁部が上外方に外反するもので、口縁端部は丸く終わる。外面は黒斑を有する。(16)は口縁部が二段に屈曲するもので、口縁端部は小さく外折して終わる。外面に煤が付着している。



第6図 第5層出土遺物



第7圖 第14層出土遺物(1)



第8図 第14層出土遺物(2)

(17・18)は土師器椀の底部で、断面の形状が三角形を呈する高台が貼り付けられている。(19)は灰釉陶器の壺底部で、高台は幅広で重厚感のある貼り付け高台である。外面と内底面に自然釉が認められる。(20・21)は共に須恵器小壺である。(20)の底部には静止糸切りが認められる。(21)には断面形状が逆台形を呈する貼り付け高台が付く。

・第14層出土遺物

岡化したものは25点である。概ね弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）を中心とした資料である。(22)は小さく垂下した口縁端部下方に刻目を施す広口長頸壺である。文様は口縁端部に籠状文、頸部に備瀬直線文を施す。色調は茶褐色で、胎土には長石・石英が散見される。(23)はラッパ状に聞く頸部から口縁部が外反する広口壺である。外面全体が風化しており不明瞭であるが、文様は口縁端部に列点文、頸部に備瀬直線文を施す。色調は外面が乳灰色、内面が赤褐色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。(24)は口縁部が上下に拡張する大型の広

口壺で、口縁端部外面の上位に列点文、下位に扇形文を施す。頸部外面には櫛描直線文を施す。色調は茶褐色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。(25) は直立気味に伸びる頸部から口縁部が緩やかに外反して伸びるもので、罐部は内傾する面を持つ。色調は茶褐色で、胎土には長石・石英・角閃石が多量に含まれている。(26) は口縁部以外は完存する細頸壺である。算盤玉形を呈する胴部から頸部外面にかけて櫛描直線文が施文されている。色調は淡茶色で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。(27~29) は壺底部である。いずれも、胎土には長石・石英が多量に含まれている。(30~32) は鉢ないしは高杯の口縁部である。(30) には口縁端部の内外面に刻目が施されている。(31) の口縁部外面には櫛描直線文2条とやや雜な波状文2条が施されている。(32) は口縁部外面に波状文と直線文が施されている。(33) は深い楕形の杯部を持つ鉢である。色調は淡褐色で、胎土には長石・石英・角閃石が散見される。外面には煤が付着しており、二次焼成を受けたものと推定される。(34~40) はいずれも窓の小破片である。(34) は口縁端部が内傾する面をもつ大型品で非生駒西麓製である。(35~39) は口縁部が緩やかに外反するもので、すべて生駒西麓製である。(40) は壺底部である。(41) は焼成後に穿孔された底部有孔土器である。(42) は壺形土器の破片を再利用した円板状土製品である。径5cm、厚さ1cmを測る。(43・44) は石錘で石材はサヌカイトである。

(45・46) は石庵丁で石材は緑色片岩である。

3 まとめ

今回の発掘調査では、平安時代前期・古墳時代後期・弥生時代前期の遺構・遺物を検出した。以下、各時期ごとに概要を列記する。

・平安時代前期

この時期の遺構は、北区の第6層上面でSK-1を1基検出したのみであるが、SK-1に近接した位置で実施された遺構確認調査でも同時期の土坑が検出されており、北区の北部を中心にして遺構が存在していたようである。

・古墳時代後期

南区で古墳1基（方墳1）検出した。古墳の大半が調査区外に至るため、古墳の全容や主体部の検出には至らなかったが、墳丘内および周溝内から出土した遺物から6世紀初頭に築造されたものと推定される。今回の調査のように、河内平野の内部においても発掘調査で埋没した古墳が発見される例が増加している。このように、平野部で検出される古墳は、同時期生駒山西麓部に築造された横穴式石室を主体部に持つ古墳とは形状を異にしており、両者の墓制の在り方を比較するうえでも、これらの資料は重要であろう。また、当調査地から西約160m地点の市立竹園小学校内で実施した第1次調査（TK82-1）では、同時期の集落が検出されてお

り、当調査で検出した古墳との有機的な関係が示唆されよう。

・弥生時代前期

南区の第3面で検出したSK-2については、平面的な広がりをつかむまでには至らなかったが、出土した遺物には弥生時代前期（畿内第1様式新段階）の土器類のほか、スサ混じりの焼土塊（発泡したものを含む）が多量に出土している。焼土塊の中でも発泡したものについては、通常の焼成では発生しないものとされていることから、金属器生産に関連したものと推定される。しかし、これらの焼土塊とともに溶解した土器が出土した八尾市美園遺跡の出土遺物の科学的分析の結果では、金属成分が検出されておらず、金属器生産に起因するものではないと言う結論が示されている。以上から発泡した焼土塊についても、積極的に金属器生産に関連したものとは言えないが、いずれにしても、発泡に必要な1200度前後の焼成を長時間維持するような条件を備えた遺構が、この周辺に存在したようである。また、調査地に東接する亀井遺跡とは、便宜上遺跡名を冠にしているが本来は一連のものと考えられ、この地点における弥生時代前期の遺構の存在は遺跡内での居住域の推移を考え上で貴重な資料といえよう。

註1 (財)八尾市文化財調査研究会「竹湊遺跡（第1次調査）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告23 1989

註2 沢田正昭・秋山隆保・井藤暁子「第9節 八尾市美園遺跡出土の変形を受けた土器について」「美園」(財)八尾市文化財センター 1985.3



北区第一面全景（南から）



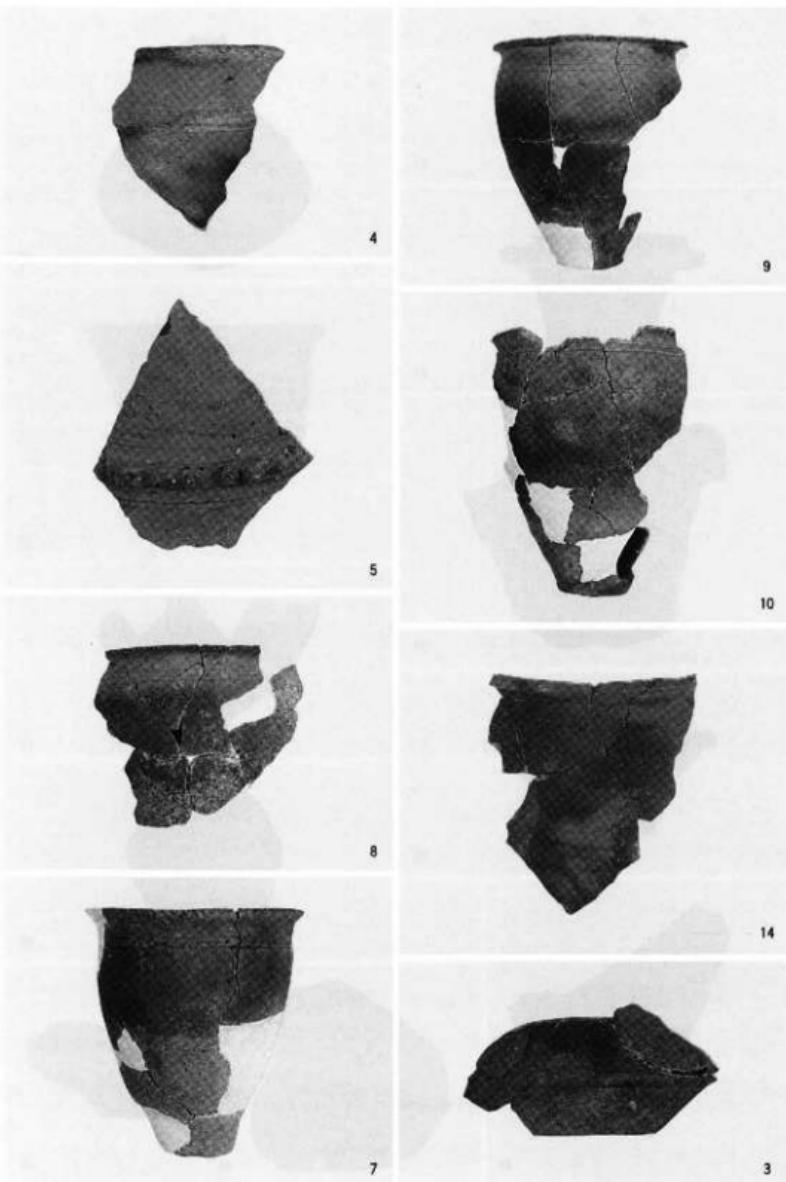
南区第一面全景（北から）



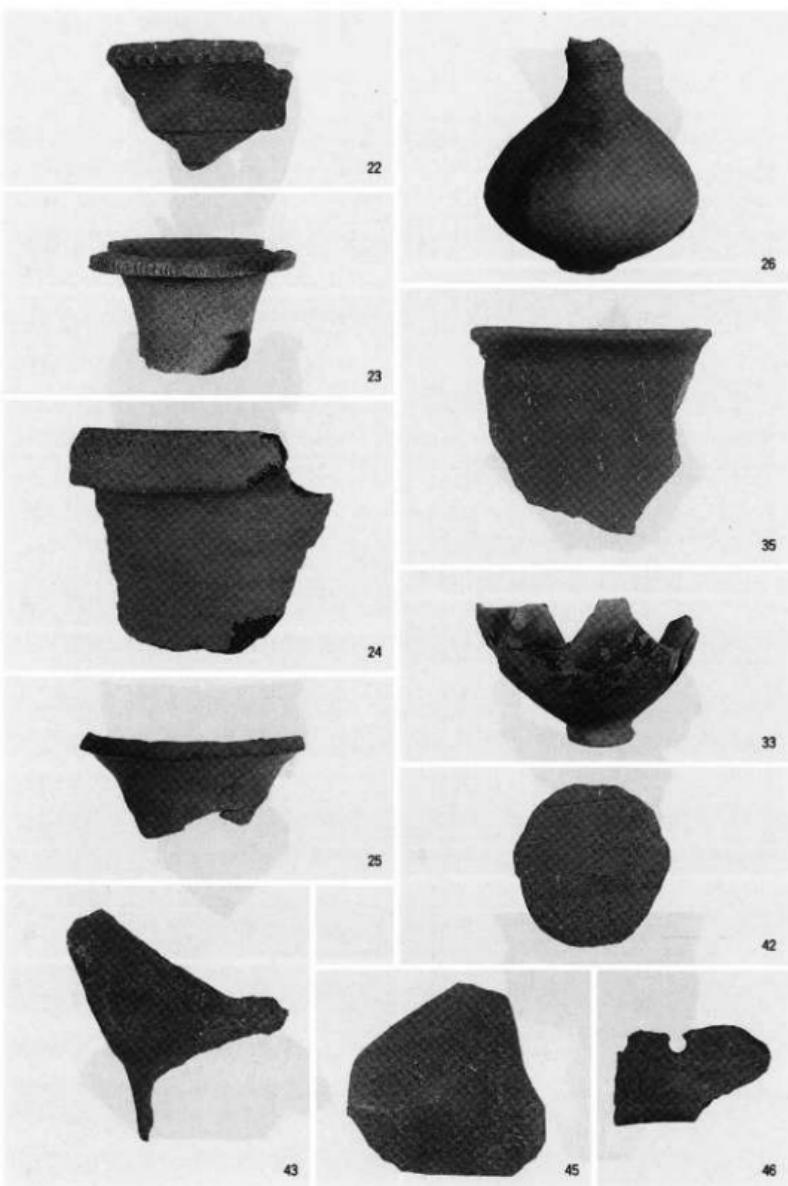
南区 第2面全景（北から）



南区 方墳1北部（西から）



方墳1(3), SK-2(4・5・7~10・14)出土遺物



第14層 出土遺物

XM 植松遺跡第1次調査（UM92-1）

植松遺跡は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。植松駅は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。

植松駅は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。

植松駅は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。

植松駅は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。

植松駅は、JR東海道本線の「植松駅」の南側に位置する。

文 本

植松駅	JR東海道本線

例 言

1. 本書は、八尾市永畠町3丁目地内で実施した公共下水道第26工区工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する槇松遺跡第1次調査(UM92-1)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第145号 平成4年12月15日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年1月18日～2月2日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約40.32m²である。調査については八田雅美が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本 文 目 次

1.はじめに.....	195
2.調査概要.....	195
1)調査の方法と経過.....	195
2)第1調査区.....	197
3)第2調査区.....	199
3.まとめ.....	200

M 植松遺跡第1次調査 (UM92-1)

1. はじめに

植松遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では植松町3～8丁目、永畠町2・3丁目を中心と所在する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸一帯に広がる沖積地の自然堤防上に位置する。当遺跡では、昭和56年に平安時代前期の掘立柱建物・溝が確認されたのみにとどまっている。その後、八尾市教育委員会が数回の遺構確認調査の実施によって古墳時代前期から中世に至る遺物包含層を確認している。また、今回の調査地の隣接では大阪府教育委員会が下水道工事に際して発掘調査を実施している。この調査では古墳時代から平安時代の遺物を少量出土している程度で、遺構は確認されていない。

当遺跡の周辺には南に木の本遺跡、南西に八尾南遺跡、西に跡部遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡が存在している。また、今回の調査地の周辺では、古くは大和王族のころに物部一族と蘇我一族との鬭いの痕跡が遺存している。調査地より西へ350mの所には物部守屋墳、北東へ300mの所には「旧大和川の一つである長瀬川東辺にあった龍華寺の大門付近にまつられてあったのが移された」と言い伝えられている大門地蔵、さらにそこから200mの所には植松の式内社で、「物部一族の祖神をまつたもの」と言われている淡川神社がある。調査地南部にはこれらの交通の往来として盛んに使用された奈良街道がある。この街道は現在国道25号線と称して、今なお八尾市の交通の主要道路として活躍している。調査地点としては南植松町3丁目交差点より北へ進入し、植松の旧村に続く道幅3～4mの狭い道の東端側にあたる。

2. 調査の概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（第26工区）に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成5年1月18日～2月2日である。調査面積は約40m²を測る。今回の調査は、当調査研究会が当遺跡で実施する第1次調査（UM92-1）である。

調査区は下水道工事の立坑部分2ヶ所で、北部の到達立坑NO.2（縦6.8m×横3.6mで、面積24.48m²を測る）を第1調査区、南部の発進立坑NO.1（縦4.4m×横3.6mで、面積約15.84m²を測る）を第2調査区とした（第1図）。調査は第1調査区より開始した。掘削は現地表下約1.8mまでの土層を機械で行い、以下の土層については人力掘削及び機械の併用で実施した。最終深度は現地表下6.5mの工事掘削深度まで確認した。なお、調査途中、鋼矢板のひずみを



第1図 調査位置図及び周辺図

防ぐため、現地表から約2m間隔で3段の支保工の取り付け作業を行い、その間、発掘調査作業は中断した。調査地は当遺跡の南部にあたり、平成3年度に大阪府教育委員会が公共下水道に伴う発掘調査を実施している国道25号線との交差点の地点（立坑部分）から北へ10mの所に第2調査区、さらに第2調査区から北へ73mの所に第1調査区が位置する。

2) 第1調査区

① 基本層序

第1調査区の基本層序は第2図のとおりである。

第1層 盛土・擾乱（層厚0.8~1.5m）。工場（帝國ヒューム管）跡地の基礎と工場を取り壊した際のコンクリート片等である。

第2層 旧耕土（層厚1~20cm）。耕土下の標高は9.5mを測る。

第3層 暗灰青色粘砂土（層厚25~30cm）。中世以降の土器の小片がごく少量含まれている。

第4層 暗青灰色粘質土（層厚20cm）。

第5層 青灰色粘土（層厚20~25cm）。

第6層 茶灰色シルト混粘土（層厚35~40cm）。

第7層 灰茶色粘土（層厚20cm）。

第8層 灰青色粘土（層厚20cm）。

第9層 青灰色シルト（層厚60

~70cm）。

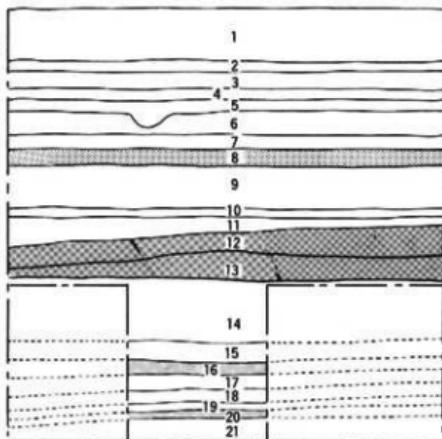
第10層 青灰色粘土（層厚10~
15cm）。粘性の強い粘
土である。

第11層 青灰色粘土（層厚10~
40cm）。第2調査区に
はみられない。

第12層 暗灰色粘土（層厚30~
40cm）。弥生時代中期
の遺物包含層である。
第2調査区にはみられ
ない。

第13層 暗灰黑色粘質土（層厚

10~40cm）。炭化物を



第2図 西壁断面図(S=1/80)

少量含む弥生時代中期の遺物包含層で、第2調査区にはみられない。

第14層 淡青灰色粘質シルト（層厚90cm）。

第15層 暗灰色粘質シルト（層厚30cm）。

第16層 暗灰黒色シルト混粘質土（層厚15~20cm）。植物遺体が少量含まれている。

第17層 淡灰青色微砂（層厚20cm）。

第18層 暗灰色粘質シルト（層厚20cm）。

第19層 暗灰青色粘土（層厚10cm）。植物遺体が少量含まれている。

第20層 黑灰色粘土（層厚10cm）。植物遺体が多量に含まれている。

第21層 青灰色粘土（層厚20cm以上）。

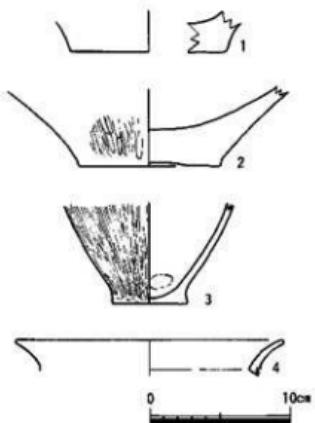
② 検出遺構と出土遺物の状況

現地表（標高10.6m）下約1.2mまで擾乱されていた。その下約1.2m（標高8.3m前後）から古墳時代前期の遺物包含層（第8層）を検出した。この遺物包含層を掘り下げ、ベース面と

考えられる第9層上面を精査したが、遺構はなかった。さらにその下、現地表下約2.8~3.4m（標高約6.6~7.2m）の第12層・第13層には弥生時代前期～中期の遺物が含まれていた。この層を掘削し、ベース面と考えられる第14層を精査し、遺構の確認を行ったが、遺構はなかった。さらに工事掘削される深さまで掘削を実施し、下層の状況を確認した。標高5.2~5.4mに存在する第16層と、標高4.6~4.8mに存在する第19・20層は久宝寺や龜井遺跡で確認している縦文時代晚期頃の黒色土層と同一土層と考えられる。

出土遺物は、上記でも述べたように第12・13層から出土した弥生時代前期～中期に比定される弥生土器（壺・甕）、第8層から古墳時代前期に比定される土師器（壺・甕）の小片が出土した。第3図に掲載した土器は第12・13層から

出土した弥生時代前期（第I様式）に比定される壺底部片（1・2）、弥生時代中期（第IV様式）に比定される壺底部片（3）、第8層内から出土した弥生時代後期末～古墳時代前期に比定されるV様式系甕口縁部片（4）である。



第3図 出土遺物実測図

3) 第2調査区

① 基本層序

第2調査区の基本層序は第4図のとおりである。

第1層 盛土 (層厚90cm)。第1調査区と同様の盛り土である。

第2層 淡灰褐色微砂 (層厚40cm)。

第3層 淡褐灰色細砂 (層厚0~30cm)。中世以降の洪水層と考えられる。調査区の西側にはみられない。

第4層 灰色細砂混じりシルト (層厚20cm)。色調が東側へ行くに従い青色に変色している。

第5層 灰褐色シルト (層厚20~30cm)。褐色の斑点がみられる。色調が東側へ行くに従い青色に変色している。

第6層 灰褐色粘質シルト (層厚15cm)。色調が東側へ行くに従い青色に変色している。

第7層 灰青色粘土 (層厚15cm)。色調が東側へ行くに従い青色に変色している。

第8層 暗灰色粘土 (層厚15~20cm)。粘性の強い粘土である。

第9層 暗灰色粘質シルト (層厚15~20cm)。遺物は含まれていなかったが、第2調査区で検出した古墳時代前期の包含層に対応するものと思われる。

第10層 灰色微砂 (層厚30~40cm)。古墳時代前期のベース面と考えられる。標高は7.9m前後を測る。

第11層 灰色粘質土 (層厚10~20cm)。

数層にわたり淡灰白色細砂が互層する。

第12層 淡灰白色細砂 (層厚10~20cm)。

第11層とこの層は洪水層の堆積と考えられる。

第13層 暗灰黒色粘質土 (層厚10~20cm)。

炭化物が少量含まれている。

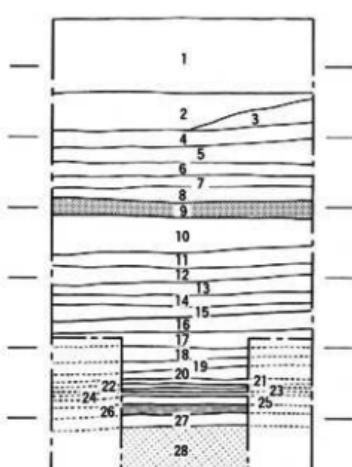
第14層 暗灰色細砂混じり粘土 (層厚10~15cm)。

遺物は含まれていなかったが、

第13層・第14層とこの層は第1

調査区で検出した弥生時代中期

の遺物包含層の土層と対応する



第4図 北壁断面図 (S=1/80)

ものと考えられる。

- 第16層 青灰色シルト(層厚15~20cm)。この上面が弥生時代中期のベース面になるものと考えられる。
- 第17層 暗灰色シルト(層厚20cm)。
- 第18層 灰青色シルト混微砂(層厚10~20cm)。
- 第19層 暗灰青色微砂混シルト(層厚10cm)。
- 第20層 暗灰色シルト(層厚5~14cm)。
- 第21層 淡灰色粗砂(層厚6~8cm)。
- 第22層 青灰色シルト(層厚4~8cm)。
- 第23層 暗灰青色粘質土(層厚4~6cm)。
- 第24層 灰黑色粘土(層厚6~8cm)。上部には植物遺体が多量に含まれている。
- 第25層 暗灰色粘土(層厚10cm)。
- 第26層 黑灰色細砂混じり粘質土(層厚12~15cm)。
- 第27層 暗灰色細砂(層厚15~20cm)。
- 第28層 乳灰青色細砂(層厚70cm以上)。弥生時代前期以前の洪水層と考えられる。

② 検出遺構と出土遺物の状況

現地表(標高10.6m)下約1.2m前後までの土層は工場事務所跡の基礎によって大半が擾乱されていた。北部の一部で旧耕土と思われる土層を確認した程度である。現地表下約1.2mでは中世以降の洪水層と考えられる細砂層が北東隅にみられた。第1調査区で検出した古墳時代前期の土層と対応すると考えられる第9層には遺物はなかった。その下の第10層上面がベース面と思われる面には遺構も確認できなかった。第1調査区で検出した弥生時代前期~中期の遺物包含層と対応する土層は第13~15層と考えられるが遺物は含まれておらず、炭化物のみが含まれていた。さらに下層の調査では第1調査区で検出した黒色土層ではなく砂層を中心とした堆積で洪水層もしくは河川跡の堆積土層であろう。

3.まとめ

今回の発掘調査は、小面積な調査区2箇所ではあったが弥生時代前期~中期の遺物包含層・古墳時代前期の遺物包含層を検出することができた。以下、各時代ごとに記す。

弥生時代前期~中期

この時期のものは第1調査区から濃厚な状態の遺物包含層が検出しており、第1調査区の周辺付近には集落域が存在することは確実であろう。また、第2調査区には弥生時代の土層がみられないことから、第1調査区と第2調査区の間が南側の居住域の境界があることは言うまで

もないことであろう。

古墳時代前期

古墳時代前期の遺物包含層は八尾市教育委員会が平成4年度に帝国ヒューム管八尾工場跡地で実施した遺構確認調査でも確認しており、今回の第1調査区・第2調査区の調査でも確認されたことから、この時期の居住域が広範囲に存在することが改めて確認された。

奈良時代以降

今回の調査では奈良時代以降の遺構・遺物を確認することはできなかったが調査区東部に近接する既往調査では平安時代前期の遺構・遺物が見つかっており、この調査区付近にも存在する可能性が考えられる。

最後に、弥生時代前期～中期の時期のものが当遺跡内に存在することが確認されたのは今回の調査がはじめてである。しかし、今回のような深部までの掘削ができたことにより発見されたもので、今後、下水道等の工事で地中深く掘削されることが多くなるものと思われ、深部までの土層状況を確認する必要があろう。

参考文献

- 八尾市教育委員会『第2章 横松南遺跡発掘調査概要報告』「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』 (財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983. 8
- 八尾市教育委員会『4. 横松遺跡(90-433)の調査』「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II」八尾市文化財調査報告26 1992. 3



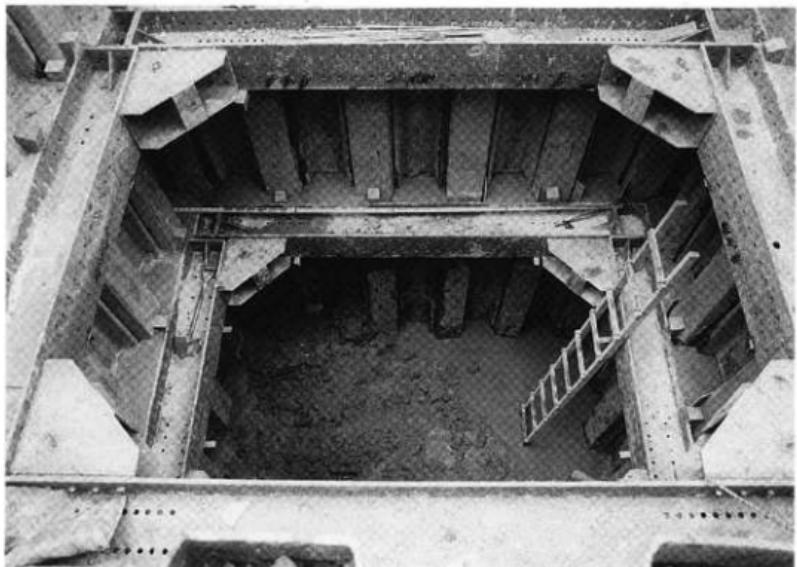
第1調査区 下層状況全景（北から）



第1調査区 断面状況（東から）



第2調査区 上層状況（南から）



第2調査区 下層状況（北から）



第2調査区 下層断面状況（北から）

XII 太子堂遺跡第4次調査 (TS92-4)

例　　言

1. 本書は、八尾市東太子町2丁目地内で実施した公共下水道第94工区工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第4次調査（TS92-4）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第160号 平成5年1月30日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年3月9日～4月6日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約37m²である。調査については八田雅美・能勢尚樹・西田寿・澤井幹が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレースー市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	205
2.調査概要.....	206
1) 調査の方法と経過.....	206
2) 基本層序.....	206
3) 検出遺構と出土遺物.....	208
3.まとめ.....	211

XII 太子堂遺跡第4次調査 (TS 92-4)

1. はじめに

太子堂遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では太子堂3～5丁目、東太子2丁目・南太子1～6丁目に所在する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地の自然堤防上に位置する。当遺跡の周辺には南に木の本遺跡、南西に八尾南遺跡、北東に跡部遺跡、西に亀井遺跡が存在している。

当遺跡では昭和58年に当調査研究会が実施した第1次調査 (TS 84-1) で古墳時代後期・奈良時代の遺構・遺物が確認されている。その後、平成元年に公共下水道に伴う発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺構・遺物が存在することを確認した。また、平成3年に大阪府教育委員会が当遺跡の南側を東西に走る国道25号線と東側の南北に走る旧主要地方道大阪環状線の太子堂交差点で下水工事に伴う発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代の河川跡が確認されている。

今回の調査地の周辺では、6世紀後半ごろに「物部氏と蘇我氏との戦いの痕跡」が遺存している。調査地より南へ250mの所には「聖徳太子古戦場」の石碑が建てられている大聖勝軍寺、



第1図 調査地位位置図及び周辺図

南東へ約250mの所には「物部守屋墓」がある。

調査では平成2年度に行った公共下水道工事に伴う第2次(TS90-2)発掘調査の第2調査区の南部に接した調査区であった。第2次調査では溝が検出され、その中から古墳時代前期の遺物が多量に出土している。この調査を踏まえて調査にあたった。

2. 調査の概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道(第94工区)に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会、当調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成5年3月9日～4月6日である。今回の調査は、当調査研究会が実施した第4次調査にあたる。

調査区は下水道工事の立孔部分1ヶ所で、縦7.2m×横5.2mの面積約37m²を測る。この調査区を第1調査区とした。調査は現地表下約1.8mまでの上層を機械掘削し、以下、1.0mの土層については人力掘削、さらに下層確認として工事で掘削される最終深度までの土層の確認を行った。なお、調査途中、鋼矢板のひずみを防ぐため、現地表から2m間隔で2段の支保工の取り付けを行い、その間発掘調査を中断した。

調査の結果、弥生時代中期～古墳時代前期の遺構・遺物が少量出土した。



第2回 調査区位置図(S=1/400)

2) 基本層序

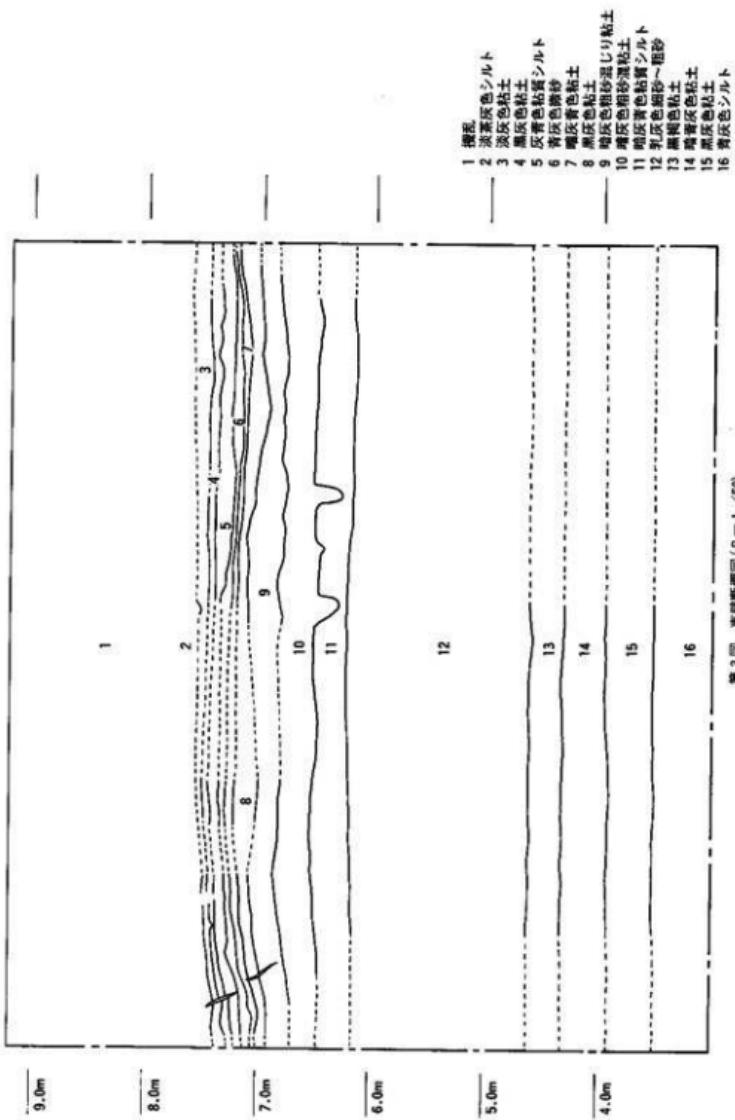
基本層序は調査区内で検出した土層で普遍的に存在する16層を摘出した。以下、これらの土層について記す。

第1層 盛土・擾乱・旧耕土(層厚0.8～1.5m)。道路の基礎と埋設工事等で擾乱している。

借換地部分の一部で確認した。耕土下の標高は8.5mを測る。

第2層 淡茶灰色シルト(層厚10～20cm)。

第3層 淡灰色粘土(層厚5～20cm)。褐色の斑点がみられる。中世以降の水田土と考えられる。



第3回 地質断面図 (S = 1 / 50)

- 第4層 黒灰色粘土（層厚5～10cm）。炭化した植物遺体を少量含む。
- 第5層 灰青色粘質シルト（層厚5～10cm）。シルトと粘土の薄い層が互層している。
- 第6層 青灰色微砂（層厚3～10cm）。
- 第7層 暗灰青色粘土（層厚3～8cm）。粘性が強い粘土である。
- 第8層 黒灰色粘土（層厚15～20cm）。粘性の強い粘土で、土器片・炭等を少量含む。古墳時代前期の包含層に対応するものと思われる。
- 第9層 暗灰色粗砂混じり粘土（層厚20～30cm）。古墳時代前期の土器片・炭等を少量含む包含層で、第2次調査との対応を考えるとこの土層は古墳時代前期（布留式新相）の遺構の土層と考えられるが調査区全体で確認しており、遺物包含層とした。
- 第10層 暗灰色粗砂混粘土（層厚20～35cm）。古墳時代前期の土器片・炭等を少量含む包含層で、第2次調査との対応を考えるとこの土層は古墳時代前期（庄内式新相）の包含層と考えられる。
- 第11層 暗灰青色粘質シルト（層厚35～40cm）。古墳時代前期の遺構のベース面である。標高は6.5m前後を測る。
- 第12層 乳灰色細砂～粗砂（層厚150～170cm）。上層に行くに従い砂粒が細かい。洪水層または河川による堆積と考えられる。
- 第13層 黒褐色粘土（層厚30cm）。植物遺体を含む。上層の標高は4.6mを測る。
- 第14層 暗青灰色粘土（層厚40cm）。植物遺体を含む。
- 第15層 黑灰色粘土（層厚40～50cm）。植物遺体を含む。
- 第16層 青灰色シルト（層厚20cm以上）。

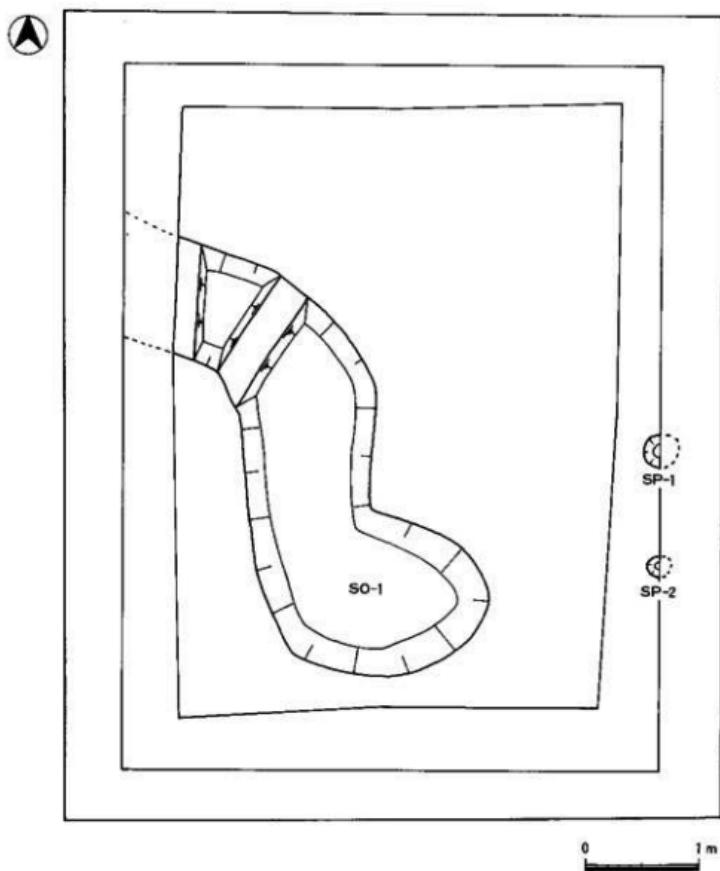
3) 検出遺構と出土遺物

現地表（標高10.6m）下約1.2m前後までの土層は、道路・埋設工事によって大半が擾乱されていた。西側の借換地にあたる部分では旧耕土と思われる土層の一部が確認された程度である。第8層～第10層は古墳時代前期の土層と考えられる。その下の第11層上面より切り込む落込み状遺構が1ヶ所（S O - 1）・小穴2個（S P - 1・2）を検出した。さらに下層では砂層が堆積する洪水層もしくは河川跡の堆積土層を確認した。

落込み状遺構（S O）

S O - 1

調査区の南西部で検出した。第9層には起伏があり、第11層の上面まで深くなった部分である。標高6.1mを測る。底面付近では遺物の出土はなかったが、調査区全体では古墳時代前期（布留式新相）に比定される土器片が少量出土している。



第4図 遺構平面図 ($S = 1/50$)

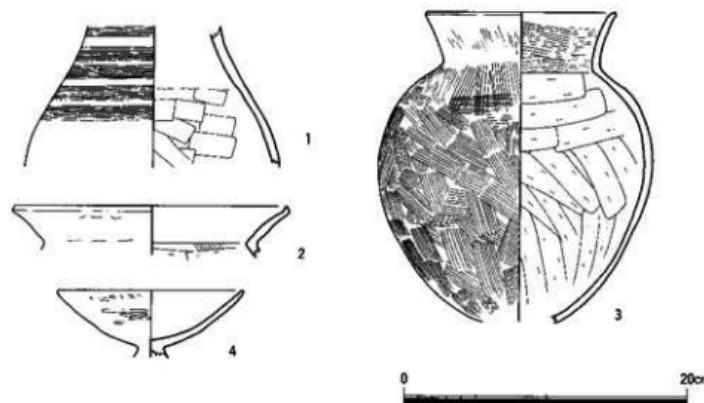
小穴 (SP)

SP-1・2

調査区東部の東壁断面で確認した。平面はほぼ円形で、規模はSP-1が径28cm、深さ20cm、SP-2が径18cm、深さ25cmを測る。断面はどちらもU字形を呈する。堆積土は暗灰色粗砂混粘土である。この小穴は断面状況から住居に関連する建物・柵等に伴う柱穴の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

4) 遺構に伴わない遺物

第7層～第8層内から出土した。弥生時代中期から古墳時代前期に比定される土器である。調査区で出土した遺物量はコンテナにして1箱分である。土器はほとんどが小片で器種がわかる程度である。確認できる器種をみると壺・甕・鉢・器台・高杯等である。図示できたものは4点である。弥生時代中期末の壺(1)、庄内式新相の器台(2)・甕(3)・庄内甕(4)である。



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図

3.まとめ

今回の発掘調査は、小面積な調査区ではあったが古墳時代前期の遺物包含層を検出することができた。包含層は厚く濃厚な状態で検出しており、第2次調査（TS90-2）第2調査区では遺物が多量に含まれている溝を検出しているが、当調査区で確認できなかった。また、古墳時代前期の遺物包含層は西部へ約200mの所で平成3年度の下水道工事に伴う第3次調査（TS91-3）でも確認されており、当遺跡の西部にはこの時期の居住域が広範囲に存在することが確認された。さらに今回の調査では奈良時代以降のものを確認することはできなかつたが調査区東部に近接する既往調査では奈良時代の遺構・遺物がみつかっており、この調査区付近にも存在するであろう。また、調査区東壁断面の北部では基本土層の第9層から第2層へ亀裂が1条みられた。この亀裂により土層がずれてその中には砂が入っており、小規模な噴砂の痕跡と考えられる。この噴砂は土層の状況から想定すると中世以降に起こった地震が想定できる。

最後に、当遺跡では弥生時代の存在が確認されていないが、遺跡名は異なるが当調査区より北東約150mで実施した跡部遺跡第10次調査では現地表下約3~4mの地層に遺物を含んだ層が確認されており、太子堂遺跡にも続くものと思われ、深部までの土層状況を慎重に確認することが必要であろう。

参考文献

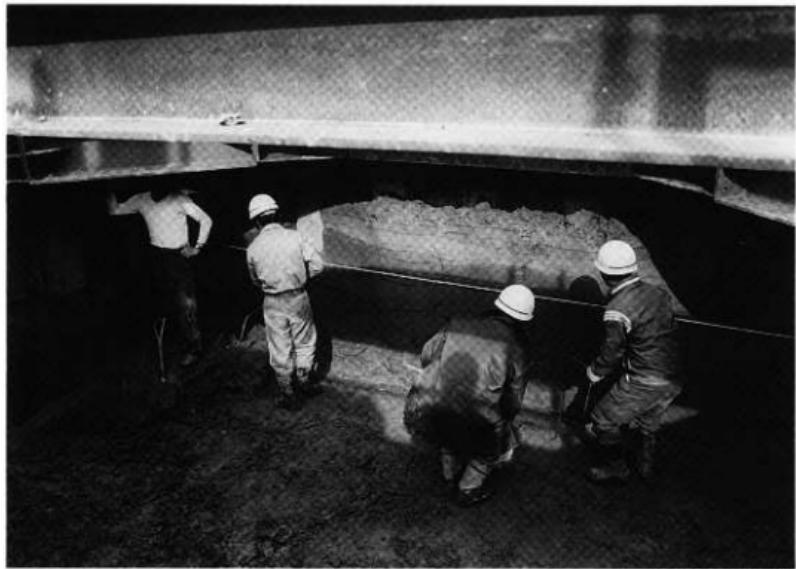
- (財)八尾市文化財調査研究会「太子堂遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992



調査区全景（南から）



東壁断面状況（西から）



調査風景（西から）



1



3

造構に伴わない出土遺物



XIII 東弓削遺跡第6次調査(HY92-6)

例　　言

1. 本書は、八尾市八尾木2・3丁目地内実施した公共下水道工事（平成4年度13工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第6次調査（HY92-6）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第102号 平成4年9月11日付）に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年4月8日から5月10日にかけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約100m²を測る。現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。
1. 遺物整理等には、上記の他、磯上サカエ・宮崎寛子・村井俊子があたった。

本　文　目　次

1.はじめに.....	215
2.調査の方法と経過.....	216
3.調査概要.....	216
1) 1区.....	216
2) 2区.....	217
3) 出土遺物観察表.....	218
4.まとめ.....	219

XIII 東弓削遺跡第6次調査 (H Y92-6)

1. はじめに

東弓削遺跡は、八尾市中央南部の八尾木・八尾木東・東弓削・都塚・刑部一帯に位置しており、地理的には、旧大和川の主流である玉串川と長瀬川の分流点である「二俣」地区より北側の低平地にあたっており、北側には中田遺跡、東には玉串川を挟んで恩智遺跡、南から西には長瀬川を挟んで弓削遺跡・志紀遺跡などがある。

当遺跡内で過去に行われた調査では、弥生時代以降、中・近世までの各時代の遺構や遺物が検出され、多大な成果があがっている。



第1図 調査地周辺図

2 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が東弓削遺跡内で実施した6度目の発掘調査（HY92-6）である。

調査地は北側の発進立坑（約32m²）と南側の到達立坑（約5m²）の2か所で、前者を1区、後者を2区と呼び、ともに工事の進捗状況に合わせて随時調査を行い、現地表下約5.5mまでの掘削に立ち会った。調査期間は平成5年2月19日～5月12日まで、調査日数は15日間である。

3 調査概要

1) 1区

東西5.2m・南北6.8mの範囲のL字形の立坑で、調査面積は約32m²を測る。調査期間は平成5年2月19日～4月6日までの10日間である。

基本層序

現地表面のレベルはT.P.+11.2m前後で、道路側の約19m²は、現地表以下約1.5～1.7mまでは道路敷設時に攪乱されている。民地側の盛土は0.3～0.5m程度ある。

第1層は近世・近代の整地層と考えられる土層で、シルトと砂を主とする褐色系の土層が約0.4m程度の厚さで数枚堆積しており、近世の陶磁器片が多量に出土している。

第2層灰褐色粘質シルトは層厚0.2～0.3mを測り、部分的に粗砂・微砂等が見られる。層中には鎌倉時代後期～室町時代（14世紀代）の遺物が多量に含まれており、上面で近世の生活面が捉えられる。この層上面は現地表下0.8m前後（T.P.+10.3～10.4m）にあたる。

第3層灰青色粘質シルトは少量の礫を含み、層厚は0.15～0.2mを測る。この層上面が平安時代末期～鎌倉時代初頭（12世紀代）の生活面と考えられ、井戸が構築されている。この層上面は現地表下1.0～1.1m程度（T.P.+10.1m）である。

以下には、第4層灰色・明褐色微砂・粗砂（層厚0.2～0.5m）、第5層青黒色粘質シルトと微砂の互層（層厚0.2～0.3m）、第6層青灰色シルト（層厚0.1m前後）があり、その下には第7層白灰色粗砂が約1mの厚さで堆積している。これらの層は河川流出土で、第7層は含水量が極めて多く、第3層上面から切り込む井戸底にあたっている。この層からは、古墳時代中期～平安時代前半までの遺物が多量に出土している。

第8層黒褐色疊混じり粘土の層厚は0.3～0.4m、固く締まった土層である。この層上面は現地表下2.6m（T.P.+8.6～8.7m）を測る。

以下の層第9層青黒色粘質シルト（層厚0.1m）、第10層暗灰色粗砂（層厚0.3～0.4m）、第11層青灰色シルト～微砂（層厚0.4m）も河川流出土で、含水量は極めて多い。

第12層暗褐色粘質シルト（層厚0.2m）は植物遺体を多く含む層、以下第13層は暗褐色粘質

シルト・青灰色シルト～微砂・植物遺体の互層（層厚0.2～0.3m）で、粘質シルトは粘性が高い。第14層も暗褐色粘質シルト（層厚0.2m）で、炭化した植物遺体を含んでおり、以下には第15層青灰色シルトと灰色粗砂の互層（層厚0.2～0.3m）が堆積する。これらの層も漏水を示す層で、含水量が多い。

第16層黒灰色礫混じり粘土の層厚は0.3～0.4mあり、この層は礫を多量に含む硬質の上層で、安定した堆積状況を示す。この層上面は現地表下4.6m（T.P.+6.6m前後）に達する。

第17層白灰色粗砂は層厚0.6mまでを確認したが、この層も河川流出土で、含水量は極めて多い。最終の掘削深度は現地表下5.5m（T.P.+5.7m前後）である。

検出遺構

現地表以下1.0～1.1m程度（T.P.+10.1m）の第3層灰青色粘質シルト上面で、調査区東部で南北方向に伸びる段を検出した。遺構面はこの段を境にして東から西へなだらかに下がっている。中央部には井戸が構築されていることから、この段が井戸掘形上面の可能性を考えられるが、中央より西側は井戸をも含めて道路敷設時に擾乱を受けているため、詳細は不明である。井戸は、曲物と羽釜を組み合わせて井戸側とするもので、井戸側は下から曲物、羽釜（5）、曲物2段分が残存していたが、曲物は損傷が甚だしい。井戸掘り形上部もまた、擾乱を受けているため、確認できていない。最上段の曲物から井戸底までの深さは約40cmで、井戸底は第7層白灰色粗砂に達し、T.P.+9.5mを指す。

出土遺物

第1層近世・近代の整地層からは、おびただしい量の瓦や陶磁器などが出土しており、第7層白灰色粗砂からは平安時代前半から古墳時代中期にかけての遺物が出土している。遺物の出土量はコンテナ箱（60×40×20cm）に3箱である。

第1層中には鎌倉時代後半～室町時代の瓦や土器片なども比較的多く含まれているが、量的に多く占めるのは江戸時代末期の磁器片である。

2) 2区

発進立坑から南約160m地点に位置する。直径約2.5mの円形の立坑で、調査面積は約5m²調査期間は平成5年5月7日から5月12日までの5日間である。

基本層序

地表面のレベルはT.P.+11.6m前後で、地表以下約1m程度まで盛土・擾乱が及んでいる。ここでは、地盤改良の効果が高く表れたため、各土層の詳細は明らかにできていないが、おおむね以下の第1層～第5層が観察できた。

第1層青灰色粘質シルトは約1.5m程度の厚さで堆積しているが、この層の上部は粘性が高

く、下部ほど粘性が低いことから、複数の土層に分かれる可能性があり、旧耕作土や床土にあたる層が含まれるものと考えられる。

以下には、第2層青灰色シルトに青黒粘質シルトのブロック層（層厚0.3m）、第3層青色シルトと灰色微砂の互層（層厚0.9m）、第4層灰色細砂（層厚0.4m）と不安定な土層堆積が続き、第5層灰色粗砂に達する。第5層灰色粗砂の層厚は1.5m以上あり、最終の掘削深度は地表下約5.5m（T.P.+6.1~6.2m）である。

検出遺構と出土遺物

第1層青灰色粘質シルト層中で、近世末期～近代の取水施設である竹樋（竹筒暗渠）と排水施設である陶管が見られた。構築面や掘り形等は明確にできなかったが、竹樋は地表下1.7~1.8m（T.P.+9.9m前後）でほぼ東西方向に伸び、陶管は地表下2.0m前後（T.P.+9.5~9.6m）でほぼ南北方向に伸びる。

第3層青色シルトと灰色微砂の互層からは、弥生土器の破片が1点出土している。

3) 出土遺物観察表

番号	器種	出土場	法量 (kg)	色調 外 内 ○内は無色 ○内は中板	胎 上	焼成	技法・形態等の特徴	備考
1	須恵器 高杯	7層	口 径(5.1)	青灰色 （灰褐色） （黑色）	やや粗	良好	回転ヘラケツリの様ナデ 間に合形成すかし（3方）	
2	瓦器 桶	落ち込み	口 径(13.6)	青灰色（淡灰色）	密	良好	口縁端部は緩状の凹みが認め る。 外縁ヘラケツリ後ナデ、縁ヘラミガキ。 内面ナデ後レコードヘラミガキ（密）	
3	瓦器 桶	1層	口 径(13.9)	淡褐色～灰褐色 （淡褐色）	密	良好	外縁ヘラケツリ後指おさえ、口縁端ヨコナデ後 縁ヘラミガキ。内面ナデ・ヨコナデ後縁ヘラミ ガキ（密）	外側洗浄吸 着不良
4	瓦器 碗	2層	口 径(12.5)	墨灰色 （白灰色）	やや粗	良好	外縁指おさえ・ナデ。 内面ナデ後ヘラミガキ（密）	
5	土師器 羽皿	井戸側	側 径(10.6)	明褐色～灰褐色 （明褐色）	粗	良好	口縁部は内傾し、内面は水平。外縁ヘラケツリ後、 縁ヨコナデ、内面ハケ、ヘラケツリ後ナデ 縁以下に痕、内面下に炭化物有	井戸側
6	瓦質土器 羽皿	1層	口 径(26.6) 深 径(23.6)	墨灰色 （淡灰色）	やや粗	良好	口縁部は内傾し、ヨコナデによる縫を持つ（3 段）。内面は水平。外縁大部ヘラケツリ、口縁部 ヨコナデ内面体幅ナデ、口縁ヨコナデ	縫以下に攝 合縫
7	瓦質土器 羽皿	1層	口 径(25.4)	墨灰色 （淡灰色）	やや粗	良好	口縁部は内傾し、ヨコナデによる縫を持つ（2 段）。縫は外と方へ伸びる。外縁ヨコナデ、内 面ヘラケツリ後ハケ、ヨコナデ	縫以下に攝 合縫
8	瓦質土器 羽皿	2層	口 径(29.1) 深 径(26.6)	にぶ褐色～墨灰 色 （火色）	やや粗	良好	口縁部は内傾し、ヨコナデによる縫を持つ。内 面は外と方へ伸びる。外縁体部ヘラケツリ、口縁 ヨコナデ。内面ナデ・ハケの後ヨコナデ。	外側洗浄吸 着不良
9	瓦質土器 羽皿	落ち込み	口 径(27.3) 深 径(27.9)	淡灰褐色～墨灰 色 （火色）	やや粗	良好	口縁部は立ち立し、縫は深く水平に伸びる。 外縁ヨコナデ、内面ハケ後ヨコナデ。	縫以下に攝 合縫
10	瓦質土器 縁り鉢	1層	口 径(30.4)	墨灰色 （灰褐色）	やや粗	良好	外縁ヘラケツリ後口縁部ヨコナデ 内面ハケ	内面下半周 跳（跳 用灰か？）

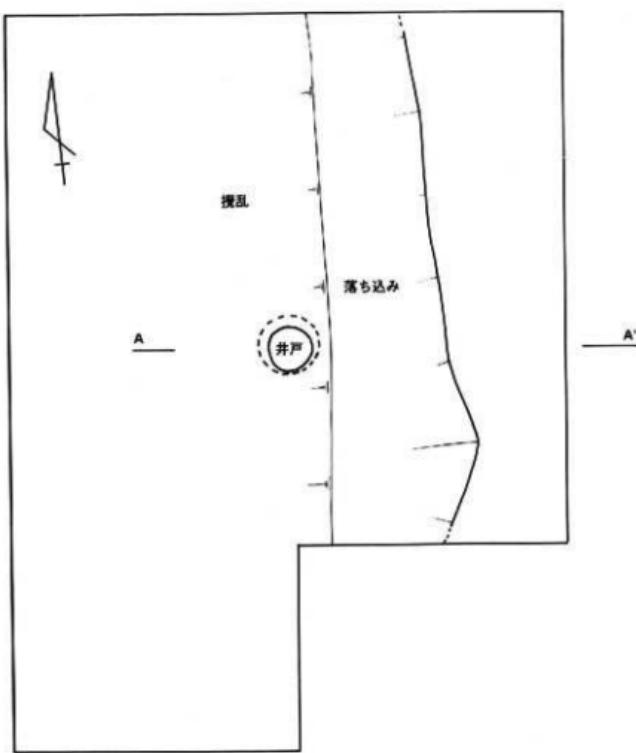
番号	基 種	山土堆	法盤 (cm)	色調 ○内は板元値 △内は中核	外 内	施 土	地成	技法・形態等の特徴	備 考
11	丸瓦土器 裏	1層	口 径(30.1)	灰色 (灰白色)	やや粗		良好	内面全体ナガ、口縁部ヨコナガ	
12	吉津焼 鏡	2層	高台径 4.2	断十：赤褐色 ～淡褐色 底：暗褐色	やや粗		良好	カシナ割り	質人あり
13	伊万里焼系 小皿	1層	口 径(10.5)	胎土：灰白色 表層：青黑色 発色：不良	青		良好	外面口縁部に墨線1条、体部に花文？ 内面口縁部に墨形文	
14	伊万里焼系 瓶	1層	口 径(11.4)	胎上：灰白色 表層：淡青色 発色：不良	青		良好	内面に網目文	
15	伊万里焼系 瓶	1層	高台径(4.5)	胎上：白色 表層：淡青色 発色：良好	青		良好	外面全体に花文？高台部に墨線1条、高台に墨 線3条、見込みに2条の墨線内に花文？	
16	伊万里焼系 碗	1層	口 径(11.2) 高台径 4.6 脚 高 5.3	胎土：灰白色 表層：暗青色 発色：不良	青		良好	外側口縁部に墨形文、体部全体内に横、高台部 に1条、高台部に2条の墨線	
17	伊万里焼系 瓶	1層	口 径(12.3) 高台径 4.6 脚 高 5.3	胎土：灰白色 表層：暗青色 発色：不良	青		良好	外側全体に墨文、高台部に2条の墨線、内面口 縁部に2条の墨線、見込みに3条の墨線内に五 花文。	
18	伊万里焼系 瓶	1層	口 径(17.4) 高台径 9.8 脚 高 3.0	断十：乳白色 表層：暗青色 発色：良	青		良好	高台部に1条、高台に1条の墨線、体部に花文 内面口縁部に花文、見込みに花文	
19	七郎右衛門 大甕	1層	高台径(12.7)	明褐色	青		良好	外側面ヘラケズリ、高台周囲カシナ割りの後 部四輪足。内面四輪足。	
20	土瓶實十郎 大甕	2層	底 径(13.2)	にぼ褐色 黒褐色	やや粗		良好	平滑な基部に牛形の脚（5点か？）を持つ。 陶ナラ後部底面一部落下部ハケズリ、側周側 無え。内面ヘラケズリ後ハケ。	

4まとめ

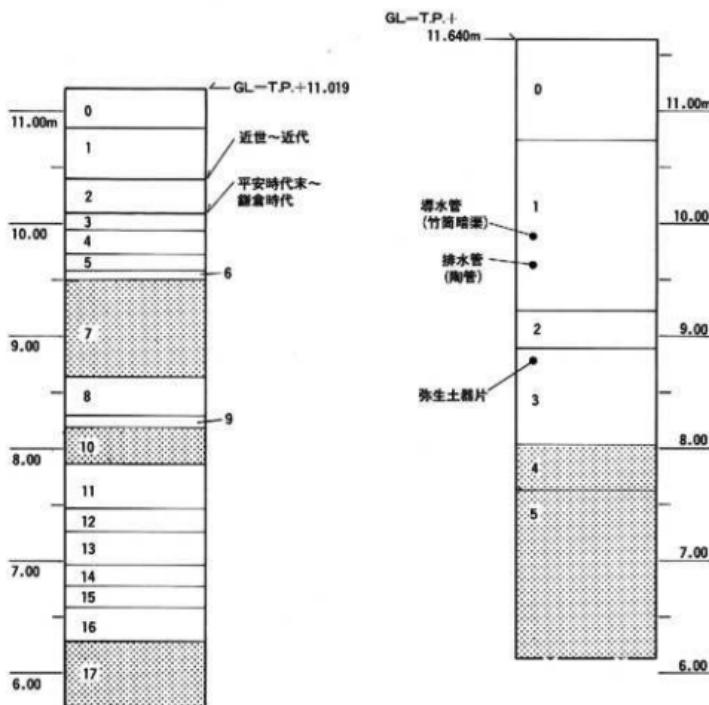
今回の調査地点は、八尾木旧集落内の調査地であったため、近世・近代の生活層が現在の集落に重複していたことが明らかになった。

1区では、第1層=整地層内に鎌倉時代後半～室町時代（13～14世紀）の瓦や土器の小破片が含まれていることから、近隣に当該時期の建物や生活の跡があったものと考えられる。また、地表下1.5～2.4mと地表下3m前後、地表下5m以下に河川出土である3枚の粗砂（第6層・第9層・第17層）が堆積していることが確認できた。上層の粗砂=第6層は、平安時代末期～鎌倉時代初頭（12世紀）の井戸底にあたっていること、層中には古墳時代後期～平安時代中期まで（6世紀～10世紀）の遺物が含まれていることなどから、12世紀までには埋没してしまった河川である。中層の粗砂=第10層・下層の粗砂=第17層は層位的には古墳時代前期以前の時期に想定できる。

2区では、近世～近代の遺構が検出されたが、以下には不安定な土層が見られ、旧大和川である長瀬川旧流路の本流に近いことから、その影響が強く残っていたものといえる。



第2図 1区平断面図

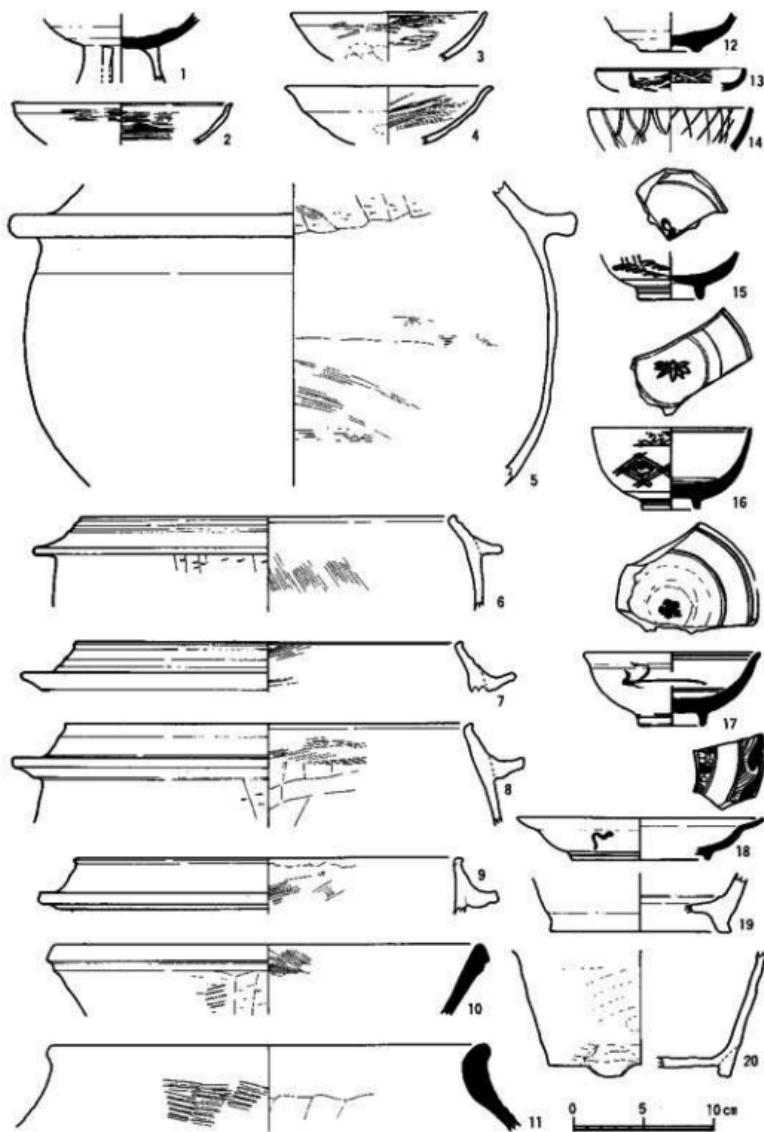


第0層 盛土・旧表土
第1層 暗褐色シルト・微砂・粗砂の互層
(整地層)
第2層 褐灰色シルト(微砂・粗砂含む)
第3層 青灰色粘質シルト
第4層 灰色～暗褐色シルト
第5層 青灰色粘質シルトと微砂の互層
第6層 青灰色シルト
第7層 白灰色粗砂
第8層 黒褐色擦過じり粘土
第9層 青黑色粘質シルト
第10層 暗灰色粗砂
第11層 青灰色シルト～微砂
第12層 暗褐色粘質シルト+植物遺体
第13層 暗褐色粘質シルトと青灰色シルト
の互層+植物遺体
第14層 暗褐色粘質シルト(炭化物含む)
第15層 青色シルトと粗砂の互層
第16層 黑灰色擦過じり粘土
第17層 白灰色粗砂

第0層 盛土・擾乱
第1層 青灰色粘質シルト
第2層 青灰色シルトに青黒粘質シルトの
ブロック
第3層 青色シルトと灰色細砂の互層
第4層 灰色細砂
第5層 灰色粗砂

第3図 1区基本層序模式図

第4図 2区基本層序模式図



第5圖 1區出土遺物實測圖



1区北壁（下層）

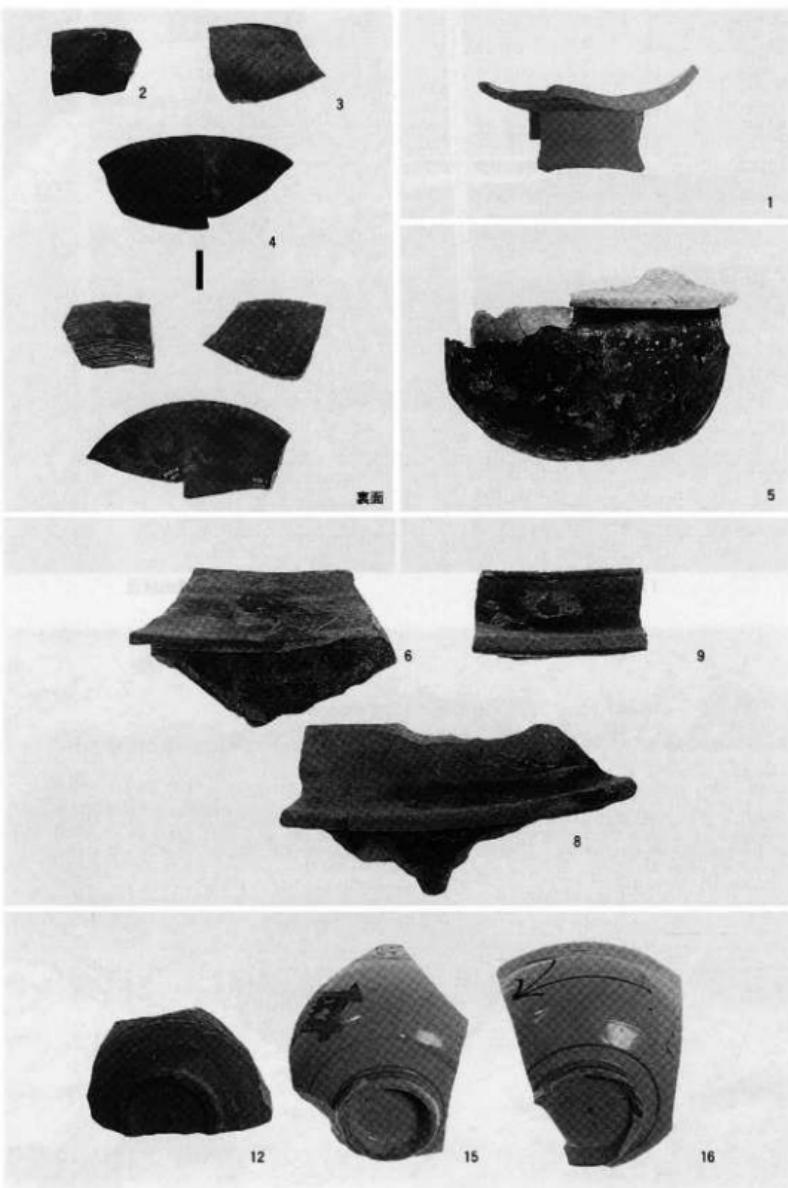


1区 井戸検出状況



1区北壁（中層）

図版一
出土遺物



XX 田井中遺跡第9次調査 (T N92-9)

例　　言

1. 本書は、八尾市志紀町西2丁目1、4-2で実施した公共下水道工事（平成3年度10工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第10次調査（TN92-9）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第153号 平成4年1月21日付）に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年4月8日から5月10日にかけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約100m²を測る。現地調査には、西田 寿・磯上サカエ・村井俊子が参加した。
1. 遺物整理等には、上記の他、宮崎寛子があたった。

本　文　目　次

1.はじめに.....	225
2.調査の方法と経過.....	226
3.調査概要.....	226
1) 基本層序.....	226
2) 検出構と出土遺物.....	228
3) 出土遺物観察表.....	230
4.まとめ.....	230